

目 次

	ページ
1. 適用範囲	1
2. 引用規格	1
3. 定義	2
4. ページの構成及び版面の寸法	9
4.1 ページの構成	9
4.2 仕上がり用紙サイズ	9
4.3 仕上がり用紙サイズを示すガイドマーク	9
4.4 版面の形状及び寸法並びに段の形状及び寸法	10
4.5 けい線の処理	11
4.6 指定行長	11
4.7 段の配置	11
4.8 組版対象領域への行などの配置方法	11
5. とじの方向	12
6. ノンブル及び柱の処理	13
6.1 ノンブルの処理	13
6.2 柱の処理	16
6.3 ノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズ例	18
6.4 ノンブル及び柱の組方例	18
7. 行組版規則	18
7.1 行に配置する文字列の基本的な配置位置	19
7.2 約物の基本的な用法	19
7.3 行頭禁則処理	20
7.4 行末禁則処理	21
7.5 分離禁止処理	21
7.5.1 分割禁止	21
7.5.2 分離禁止	22
7.6 連数字の配置法	22
7.7 和欧文混植処理	23
7.8 縦中横処理	23
7.9 ルビ処理	29
7.9.1 ルビ文字の文字サイズ	23
7.9.2 ルビ文字列の位置	23
7.9.3 ルビ文字列を片側にのみ配置する場合の処理	23
7.9.4 ルビ文字列を両側に配置する場合の処理	27
7.10 添え字処理	30

7.11	圏点処理	31
7.12	下線・傍線・抹消線処理	31
7.13	割注処理	31
7.14	文字の位置調整処理	33
7.14.1	字詰め方向の位置調整処理	33
7.14.2	行方向の位置調整処理	33
7.15	行の調整処理	35
7.16	タブ処理	36
7.16.1	タブ属性	36
7.16.2	タブ処理対象文字列の配置法	36
7.17	囲み文字処理	38
7.18	結合文字処理	38
7.19	具体字形処理	39
8.	行組版モデル	39
8.1	文字の組版属性	39
8.1.1	文字クラス	39
8.1.2	空き量	40
8.1.3	分割可能条件	40
8.1.4	延ばし可能条件	41
8.2	行の構成アルゴリズム	41
8.2.1	処理の流れ	41
8.2.2	割注文字列を除いた本文文字列の不可分文字列化	41
8.2.3	割注の不可分文字列化	42
8.2.4	不可分文字列の長さの計算	44
8.2.5	割注の長さの計算	44
8.2.6	ルビ付き親文字群の長さの計算	45
8.2.7	縦中横の文字列の長さの計算	47
8.2.8	候補行の構成	47
8.2.9	分割点の決定	47
8.2.10	行の調整処理	48
8.2.11	そろえ	48
9.	段落整形対象要素の組版規則	48
9.1	行の基本的な配置方法並びに段落整形処理及び段落末尾処理	48
9.1.1	行の基本的な配置方法	48
9.1.2	段落整形処理	50
9.1.3	段落末尾処理	50
9.1.4	段落間処理	50
9.2	改ページ・改段の処理	51
9.3	中扉処理	52
9.4	見出し処理	52

9.4.1	見出しの種類	52
9.4.2	見出しの構成	52
9.4.3	見出しの組方向	53
9.4.4	見出しの改ページ・改段の処理	53
9.4.5	別行見出しの処理	53
9.4.6	同行見出しの処理	56
9.4.7	窓見出しの処理	57
9.4.8	見出しの組方例	58
9.5	箇条書き処理	58
9.6	注の処理	59
9.6.1	注と基本版面との関係及びその構成	59
9.6.2	合印の処理	59
9.6.3	後注の処理	61
9.6.4	脚注の処理	61
9.6.5	傍注の処	63
9.7	図・写真等の処理	65
9.7.1	図・写真等の構成	65
9.7.2	図・写真等のキャプション及び注記の処理	66
9.7.3	図・写真等のブロックのページ内での配置	67
9.8	表処理	76
9.8.1	表の構成	76
9.8.2	表の全体の処理	77
9.8.3	こま内容の処理	78
9.8.4	こま内容がこまに入りきらない場合の処理	79
9.8.5	こま余白の処理	80
9.8.6	表のキャプション及び注記の処理	80
9.8.7	表のブロックのページ内での配置	81
9.9	漢文の処理	83
9.9.1	漢文の組方向	83
9.9.2	漢文につける訓点等	83
9.9.3	漢文親文字の字間の処理	84
9.9.4	返り点, 送り仮名及び読み仮名の文字サイズ	84
9.9.5	返り点の配置位置	85
9.9.6	送り仮名及び読み仮名の処理	85
9.9.6.1	送り仮名及び読み仮名の配置方向	85
9.9.6.2	送り仮名の処理	85
9.9.6.3	読み仮名の処理	85
9.9.6.4	送り仮名及び／又は読み仮名の字数が多い場合の処理	85
9.9.7	たて点の処理	86
9.9.8	圏点及び傍線の処理	86

9.10 行送り方向の組版対象領域の領域調整処理	86
10. 適合性	87
10.1 処理系	87
10.2 機能追加項目	87
10.3 処理系定義項目	88

附属書 = 柱の字間を空ける例 92

附属書 = 中扉及び見出しの組方【要：指定と修正】例 93

附属書 = 国際符号化文字集合（JIS X 0221）との対応 【【省略】】

附属書 = (参考 1) 行の構成アルゴリズム 【【省略】】

附属書 = (参考 2) 組対象の形式定義 【【省略】】

附属書 = (参考 3) 処理系定義項目 【【省略】】

附属書 = (参考 4) 第 1 次規格との非互換項目 【【省略】】

附属書 = 仕上がり用紙サイズ別の基本版面の指定例，並びに仕上がり用紙サイズ別のノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズの指定例

附属書 = 仕上がり用紙サイズ別の基本版面組方例，並びに仕上がり用紙サイズ別のノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズの組方例 【【省略】】

日本語文書の組版方法

Formatting rules for Japanese documents

委員会作業原案 ver. 2.8 (02-08-04)

1. 適用範囲 この規格は、**JIS X 0201**、**JIS X 0208**、**JIS X 0212**、**JIS X 0213** 及び **JIS X 0221-1** に規定される図形文字を対象とする文字（以下、文字という。）を基本として用いた日本語文書の行、版面及びページについての基本的な組版方法を規定する。ここでいう行の組版方法は、欧文ピッチ処理を含む1行の構成方法並びに行内での文字配置を規定する。版面の組版方法は、段落、中扉、見出し、箇条書き、注、図・写真等、表及び訓点等のつく漢文を含む版面の構成方法並びに版面内での文字、けい（罫）線及び図・写真の配置方法を規定する。ページの組版方法は、柱、ノンブル及び版面を含むページの構成方法及び配置方法を規定する。

ここで規定する組版方法は、主に書籍に適用する。

備考1. 文字の符号化は、処理系定義とする。

2. **JIS X 0221** に含まれる文字とこの規格で扱う文字との対応は、附属書による。

2. 引用規格 次に掲げる規格は、この規格に引用されることによって、この規格の一部を構成する。これらの引用規格は、その最新版（追補を含む。）を適用する。

JIS P 0138 紙加工仕上寸法

JIS X 0201 7ビット及び8ビットの情報交換用符号化文字集合

JIS X 0208 7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化漢字集合

JIS X 0212 情報交換用漢字符号—補助漢字

JIS X 0213 7ビット及び8ビットの2バイト情報交換用符号化拡張漢字集合

JIS X 0221-1 国際符号化文字集合（UCS）—第1部 体系及び基本多言語面

JIS X 4052 日本語文書の組版指定交換形式

JIS Z 8202-0 量及び単位—第0部：一般原則

JIS Z 8202-1 第1部：空間及び時間

JIS Z 8202-2 第2部：周期現象及び関連現象

JIS Z 8202-3 第3部：力学

JIS Z 8202-4 第4部：熱

JIS Z 8202-5 第5部：電気及び磁気

JIS Z 8202-6 第6部：光及び関連する電磁放射

JIS Z 8202-7 第7部：音

JIS Z 8202-8 第8部：物理化学及び分子物理学

JIS Z 8202-9 第9部：原子物理学及び核物理学

JIS Z 8202-10 第10部：核反応及び電離性放射線

JIS Z 8202-12 第12部：特性数

JIS Z 8202-13 第13部：固体物理学

3. 定義 この規格で用いる主な用語の定義は、次による。

- a) **JIS X 4052:2000 で定義済みの用語** この規格は、**JIS X 4052** で定義されている次の用語を用いる。
欧文ベースライン、改段、改ページ、箇条書き、行送り方向、行の幅、具体字形、組版、組方向、字詰め方向、書体、段間、段間けい、段組、地、天、同行見出し、トップセンタ、のど、版面、本文段落、文字の並びの縦軸、文字の並びの横軸、文字の正立方向
- b) **この規格で定義する用語** この規格で定義する用語は、次による。
- 1) **合印** (あいじるし) 注と本文文字列の該当項目とを対応させるために該当項目につける文字列。
 - 2) **空き量** 字間の値、行頭から行の先頭の文字までの間隔の値又は行の最後尾の文字から行末までの間隔の値。
 - 3) **追込み** (おいこみ) 禁則処理の一つの方法であって、字間を詰めて行中の文字数を多くすること。
 - 4) **追出し** (おいだし) 禁則処理の一つの方法であって、字間を広げて行中の文字数を少なくすること。
 - 5) **欧文** 欧文用文字及び欧文間隔で構成される文章であって、横書きとし、欧文ピッチ処理の対象となるもの。
 - 6) **欧文間隔** 欧文の単語間の空きを表現する文字。
 - 7) **欧文用文字** 欧文を書き表すときに主な構成要素となる表音文字 (欧字)、数字及び記号 (コンマ、ピリオドなど)。縦書きで用いる全角の欧字は、和字として扱う。
 - 8) **送り仮名 (漢文の)** 漢文を訓読する場合に、漢字の読み方を示すために漢字に添える仮名。添え仮名、捨て仮名ともいう。通常、片仮名が用いられる。ただし、送り仮名及び読み仮名の区別は指定による。
 - 9) **親文字** (おやもじ) ルビ、添え字又は圏点がつけられたとき、その対象となる文字。
 - 10) **親文字群** 親文字及びそれに付随するルビ、添え字又は圏点を含めた文字群。
 - 11) **親文字列長** 親文字列を指定の文字サイズで、表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組で配置したときの、親文字列の先頭から最後尾までの長さ (図 1 参照)。

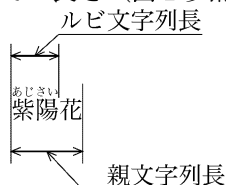


図 1 親文字列長とルビ文字列長

12) **終わり括弧類** 文章の中で、ある部分を囲んで他との区別を明らかにするための記号のうち、区切りの終わりを表すもの並びに文章の中の切れ目を表すコンマ“,”及び読点“、”(表 2 参照)。

例 横書きにおける終わり括弧類 、 , ’ ”)]] } } 》 」 』 』

参考1. 縦書きではコンマを使用せず、読点“、”を使用する。

2. コンマ及び読点は、組版処理の上で終わり小括弧と同じ処理を行うので、終わり括弧類としてまとめて扱うこととした。

13) **改行** (かいぎょう) 行を改めて、新しく組み始めること。

14) **改丁** (かいちょう) 見出しなどを、次の紙葉の表面 (おもてめん) から新しく組み始めること。ノブルは奇数となる。縦書きの場合は、左ページおこし、横書きの場合は、右ページおこしが改丁となる。

- 15) **改丁・改ページ等** 左・右ページに関わらず改ページ，左ページおこし又は右ページおこしのいずれかによる場合の総称。
- 16) **囲み文字** 1文字の字面の内側に，別の文字列を配置し合成した文字。
- 17) **括弧類** 始め括弧類及び終わり括弧類。
- 18) **かべ** 多段組において，文章の行の流れを折り返すことになる段抜きの別行見出し。
- 19) **漢文親文字** 漢文における漢字。
- 20) **基底文字** 結合文字に先行する非結合文字。
- 21) **基本版面** (きほんはんめん) 本の基本として設計される版面体裁。組方向、段数、文字サイズ、字詰め数、行数、行間及び段間で指定する。
- 22) **脚注** (きゃくちゅう) 基本版面が横書きにおいて，組版対象領域の下端に配置する注。
- 23) **行間** 隣接する行の最も大きな文字サイズの文字の外枠間の距離。通常，行間は，行の幅の 1/2 倍～1 倍となる (図 2 参照)。

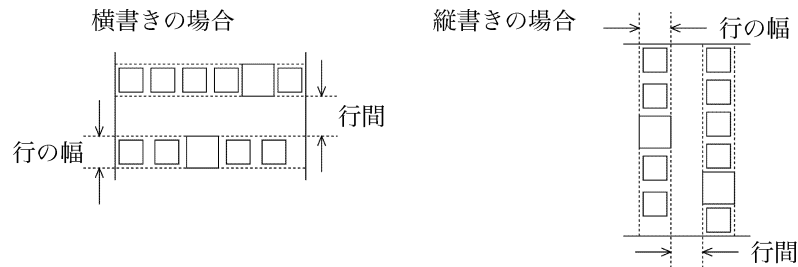


図 2 行 間

- 24) **行長** 行頭から分割可能点までの長さ (図 3 参照)。

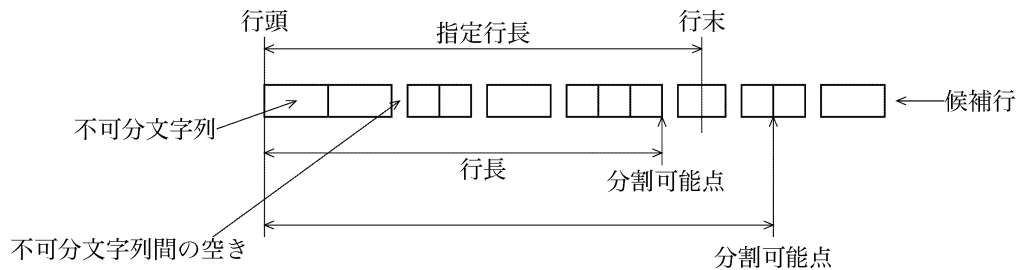


図 3 指定行長と行長

- 25) **行頭** 一つの行の始まる位置 (図 4 参照)。

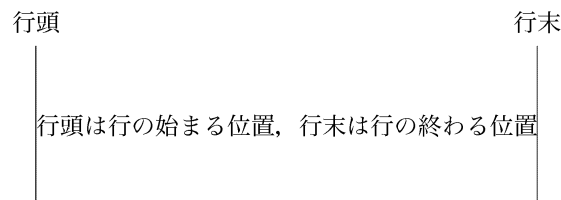


図 4 行頭・行末の位置

- 26) **行頭禁則処理** 禁則条件上，行頭に位置してはならない文字 (行頭禁則文字) が，行頭にこないように追込み又は追出しをすること。
- 27) **行頭禁則和字** 行頭禁則処理の対象になる和字 (表 2 参照)。
- 例** 横書きにおける行頭禁則和字 丶ゞゞゞターあいうえおつやゆよわアイウエオツヤユヨワカケ
- 28) **行頭そろえ** 文字列の最初の文字を行頭の位置に合わせること。

- 29) **行末** 一つの行の終わる位置 (図 4 参照)。
- 30) **行末禁則処理** 禁則条件上、行末に位置してはならない文字 (行末禁則文字) が、行末にこないように追込み又は追出しをすること。
- 31) **行末そろえ** 文字列の最後の文字を行末の位置に合わせること。
- 32) **禁則条件** 禁則文字が行頭若しくは行末に位置してはならないこと、又は禁則文字の組を分割してはならないことの条件。
- 33) **禁則処理** 禁則条件を満足するように文字の配置を決めること。
- 34) **禁則文字** 行頭若しくは行末に位置してはならない文字、又は分割してはならない文字の組を構成する文字。
- 35) **均等割り** 字間を均等に空け、文字列の両端を行頭と行末にそろえること。
- 36) **キャプション** 図・写真等及び表につける標題及び簡単な説明。
- 37) **区切り約物 (やくもの)** 文章・語句の区切りに用いる約物で、行頭禁則処理の対象となる約物 (表 2 参照)。

例 横書きにおける区切り約物 ? !

- 38) **句点類** 文又は文章の終わりを示すもの (表 2 参照)。

例 横書きにおける句点類 。 .

参考 縦書きではピリオドを使用せず、句点“?。”を使用する。

- 39) **組版対象領域** 1 段組の版面及び多段組の 1 段の領域の総称。
- 40) **グループルビ** 2 文字以上の親文字列全体にまとめてつけたルビ。
- 41) **訓点 (くんでん)** 漢文を訓読するために施した句点、読点、中点、括弧、返り点、送り仮名、読み仮名、たて (堅) 点の総称。
- 42) **けい (罫) 線** 複数の項目を二次元的に区切るために用いるもの。横けい及び縦けいがある。けい線は、実線や破線などのけい線種、けい線の太さ、可視や不可視などのけい線属性をもつ。
- 43) **結合文字** 基底文字の直後に続き、基底文字と組み合わせること又は合成列と組み合わせることを意図した図形文字。
- 44) **圏点 (けんでん)** 文字のそばにつけて注意を促したり、その部分を強調したりするしるし。

例 圏点

- 45) **合成列 (結合文字の)** 基底文字とそれに続く一つ以上の結合文字とからなる図形文字の列。
- 46) **後注 (こうちゅう)** 大見出し、中見出し若しくは小見出しでくくられた内容の最後、段落の後、又は本文の最後にまとめて配置する注。
- 47) **小口 (こぐち)** のどに対向する方向。

参考 小口は、本の中身の背以外の三方にある断面のことを意味する場合があります、この場合は、のどの反対側を他と区別して前小口と呼ぶ。しかし、通常は前小口を小口と呼ぶことが多い。

- 48) **こま (小間)** 表のこま内容を表示する領域。基本的には、隣り合う 2 本の横けいと隣り合う 2 本の縦けいに囲まれた領域からこま余白部分を除いた領域が、一つのこま (小間) を形成する。隣接する複数のこま (小間) を合成して一つのこま (小間) として用いることもある。
- 49) **こま内容** 表のこまの中に表示されるもの。
- 50) **こま余白** 表のけい線とこまとの間の空白領域。
- 51) **三分アキ (さんぶあき, さんぶんあき)** 空き量を、全角アキの 1/3 とするもの。
- 52) **三分ルビ (さんぶんるび)** 全角の字幅に 3 文字のルビをつけるためのルビ。縦書きの場合の三分ルビ

ビは、ルビ文字の文字の高さは親文字の 1/3 であるが、ルビ文字の文字の幅は親文字の 1/2 となる。横書きの場合の三分ルビは、ルビ文字の文字の幅は親文字の 1/3 であるが、ルビ文字の文字の高さは親文字の 1/2 となる。

参考 親文字が和字 1 文字で、かつルビ文字数が 3 文字ですべて仮名文字の場合に使用する。

- 53) 字上げ 行末の位置を行頭方向に移すこと。
54) 字間 同一行の隣接する二つの文字の外枠の間隔 (図 5 参照)。

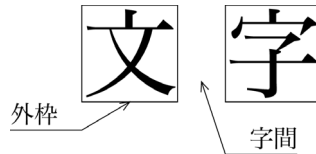


図 5 字 間

- 55) 字下げ 行頭の位置を行末方向に移すこと。
56) 字面 (じづら) 文字の図形の、空白を含まない実際に印字または表示される領域。
57) 指定行長 行頭から行末までの長さ (図 3 参照)。
58) 字幅 (じはば) 文字を配列する方向の外枠の寸法。
参考 字幅は、横書きでは文字の幅となるが、縦書きでは文字の高さとなる。
59) 四分アキ (しぶあき, しぶんあき) 空き量を、全角アキの 1/4 とするもの。
60) 四分角 (しぶかく, しぶんかく) 字幅が、全角の 1/4 である文字の外枠。
61) 熟語ルビ モノルビがつく親文字群が熟語を構成するルビ。
62) 省略記号 角度, 通貨などを表す記号。連数字の直前に表記する前置省略記号及び連数字の直後に表記する後置省略記号がある (表 2 参照)。

- 例 1. 横書きにおける前置省略記号 ¥ \$ £
2. 横書きにおける後置省略記号 ° ' " % ‰ ¢

参考 片仮名单位字を含む全角単位字及び JIS X 0208 及び JIS X 0213 に含まれる単位記号は、この規格では省略記号として扱う。

例 縦書きの片仮名单位字 キ ロ

- 63) 白ページ (しろページ) 何も表示しないページ。
備考 改丁の場合、直前の文章が奇数ページで終わっているときは、改丁の直前の偶数ページは白ページとなる。
64) 全角 (ぜんかく) 漢字 1 文字分の外枠。欧文の組版ではエム (em) ともいう。
65) 全角アキ 空き量を、対応する文字の全角の字幅とするもの。ただし、対応する文字は、表 3 による。
66) 添え字 文字のそばにつける上付き文字又は下付き文字。
例 1. s^2 , x^n の “2”, “n” が上付き文字の例
1. CO_2 , x_1 の, “2”, “1” が下付き文字の例
67) 外枠文字 (そとわくもじ) 囲み文字の囲みを構成する文字。
68) そろえ 1 行の文字列の位置を指定した位置に合わせること。
69) 縦書き 各行の文字を文字の高さ方向に並べる文字の配置。通常、上から下に縦に並べる。
70) 縦中横 (たてちゅうよこ) 縦書きの行中で、縦書きの字の向きのまま横書きにすること。

例 ※図版制作中

71) たて（縦）点 漢文を訓読する場合に、熟語として読むことを示すために熟語の字間に挿入する符号。連続符，音合符，訓合符，連字符，熟字符，合符ともいう。

72) タブ（tab）処理 行中の指定された位置に、文字列を合わせて配置すること。

73) タブ処理対象文字列 タブ記号とタブ記号との間にある文字列又はタブ記号と改行までの文字列。

例 □をタブ記号とすると、次の文字列の“BBBBBB”と“CCC”がタブ処理対象文字列である。“AA”は、タブ処理対象文字列ではない。

AA□BBBBBB□CCC

74) タブ処理対象文字列長 タブ処理対象文字列を指定の文字サイズで、表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組で配置したときのタブ処理対象文字列の先頭から最後尾までの長さ。

75) 単位記号 距離，時間などをはかる基準となる量を表す JIS Z 8202 に含まれる単位記号。通常，連数字の直後に表記する。

例 100 km, 50 s

参考 片仮名单位字を含む全角単位字及び JIS X 0208 に含まれる単位記号は，この規格では省略記号として扱う。

76) 段抜き（だんぬき） 多段組において見出しを複数の段にわたって配置すること。

77) 段落 行組版処理の処理単位となる一つ以上の文の集まり。段落は，1 行又は連続した複数の行からなる。

78) 段落字下げ 段落先頭行の行頭を空けること。

79) 段落整形処理（indent） 段落字下げ，字下げ及び字上げに従って文字を配置すること。

80) 段落末尾（character widow）処理 段落の最終行の文字数が，ある文字数未満になることを避けるための処理。文字ウィドウ処理ともいう。

81) 中央そろえ 文字列の中央を，行頭と行末との中央の位置に合わせること。

82) 注記 図・写真等及び表につけるキャプション以外の説明，凡例，出典等。

83) 詰め処理 行長が指定行長より大きいとき，字間を詰め，指定行長と同じにする処理。

84) 内部文字 囲み文字の内部を構成する文字列。

85) 中点類（なかつてんるい） 文章・語句の区切りに用いる記号で，文字の幅の中心に位置するもの（表 2 参照）。

例 横書きにおける中点類 ・ ： ；

参考 縦書きの和文では，セミコロン“；”を使用しない。

86) 中扉（なかとびら） 書籍の内容が大きく区分される場合に，その内容の区切りをはっきりさせるために本文中に挿入する，標題などを掲げたページ。

87) 2 倍アキ 空き量を，全角アキの 2 倍とするもの。1.5 倍アキは，全角アキの 1.5 倍，3 倍アキは，全角アキの 3 倍，以下 4 倍アキ，5 倍アキ等も同様とする。

88) 二分四分アキ（にぶしぶあき） 空き量を，全角アキの 3/4 とするもの。

89) 二分アキ（にぶあき，にぶんあき） 空き量を，全角アキの 1/2 とするもの。

90) 延ばし処理 行長が指定行長より小さいとき，字間を広げ，指定行長と同じにする処理。

91) ノンブル 本のページの順序を示す番号。

92) 始め括弧類 文章の中で，ある部分を囲んで他との区別を明らかにするための記号のうち，区切りの始まりを示すもの（表 2 参照）。

例 横書きにおける始め括弧類 ‘ “ ([[{ く 《 「 『 【

- 93) 柱 (はしら) 本の各ページに書名・見出しなどを記載したもの。
- 94) 八分アキ (はちぶんあき, はちぶあき) 空き量を, 全角アキの 1/8 とするもの。
- 95) 半角 (はんかく) 字幅が, 全角の 1/2 である文字の外枠。欧文の組版ではエヌ (en) ともいう。
- 96) 左とじ (綴じ) 書籍, 雑誌又は小冊子などの印刷物の表 (おもて) 表紙又は 1 ページを表 (おもて) にし, 主要な文字の天地左右が読者の目から見た天地左右の方向と一致するように置かれた場合に, とじ目が読者の目から見て左側となり, ページを右側から左側方向に開いていとじ方。左開き (ひだりあき, ひだりびらき) ともいう。左とじの場合, 見開きでは, 左側のページは必ず小さいノンブル (偶数), 右側のページは必ず大きいノンブル (奇数) となる。
- 97) ピッチ処理 文字を個々の文字の固有の配置位置に応じて並べること。
- 98) 表 複数の項目を見やすいように二次元的に配置し, けい線で区切ったもの。けい線, こま及びこま内容から構成される。
- 備考** けい線を用いない表は, 不可視という属性のけい線を用いているものと解釈する。
- 99) 不可分文字列 分割不可能な 1 単位として扱う 1 文字以上の文字の並び。
- 100) 副題 (ふくだい) 見出しに付ける副次的な標題。サブタイトルともいう。
- 101) ブロック類 図・写真等のブロック及び表のブロックの総称。
- 102) 分割 (ぶんかつ) 文字間で改行すること。割注処理においては, 文字を次の割注行頭に移動すること。
- 103) 分割可能点 分割点の候補となりうる文字の間。
- 104) 分割点 禁則条件を満足するように分割を決定した文字の間。
- 105) 分離禁止処理 分離禁止文字の組を構成する文字間では分割しないように追込み又は追出しをする (分割禁止) とともに, 延ばし処理によって行を調整するときには, 分離禁止文字の組を構成する文字間を広げないように (分離禁止) して, 文字を配置すること。
- 106) 分離禁止文字 連続した同じ文字間では分割してはならず, 延ばし処理によって行を調整する場合でも, 連続した同じ文字間を広げてはならない文字 (表 2 参照)。

例 横書きにおける分離禁止文字 — … …

参考 2 倍ダッシュ及び 2 倍リーダは, それぞれダッシュ及びリーダを 2 文字続けて表す。

- 107) 分離禁止文字の組 連続した同じ分離禁止文字の組, 前置省略記号とその後ろに続く連数字との組, 連数字とその後ろに続く後置省略記号との組, 連数字とその後ろに続く欧文間隔以外の欧文用文字との組及び欧文間隔以外の欧文用文字とその後ろに続く連数字との組のこと。
- 108) ベタ組 字間を空けずに文字を配置すること。
- 109) 別行見出し (べつぎょうみだし) 独立した行として配置する見出し。
- 110) 傍注 (ぼうちゅう) 基本版面が縦書きの場合において, 見開きを 1 つの単位として, 1 段組では奇数ページの版面内の左端に接して配置し, 多段組では奇数ページの最下段における 1 段の領域内の左端に接して配置する注。
- 111) 本文 (ほんぶん, ほんもん) 書籍を構成する主要部分。通常, その前には前付がつき, その後には後付がつく。
- 112) 本文文字列 見出し, 中扉, 表, 図・写真等を除外した, 通常 of 文字列。
- 113) 窓見出し (まどみだし) 見出しだけで 1 行を構成することなく, 見出しの次に 2 行又は 3 行の本文文字列を続ける見出し。

- 114) **回り込み** 組版対象領域に配置したブロック類を避けて、片側に本文文字列、小見出しなどを配置すること。
- 115) **右とじ(綴じ)** 書籍、雑誌又は小冊子などの印刷物の表(おもて)表紙又は1ページを表(おもて)にし、主要な文字の天地左右が読者の目から見た天地左右の方向と一致するように置かれた場合に、とじ目が読者の目から見て右側となり、ページを左側から右側方向に開いていくとじ方。右開き(みぎあき、みぎびらき)ともいう。右とじの場合、見開きでは、右側のページは必ず小さいノンブル(偶数)、左側のページは必ず大きいノンブル(奇数)となる。
- 116) **見出し** 書籍、雑誌などで、内容を区分するまとまりにつける標題。上位のレベルより、中扉、大見出し(おおみだし)、中見出し(なかみだし)、小見出し(こみだし)がある。小見出しには、別行見出し、同行見出し及び窓見出しがある。
- 117) **見開き(みひらき)** 本を開いたときの両方のページをあわせていう。
- 118) **文字サイズ** 全角の外枠の高さ(図6参照)。

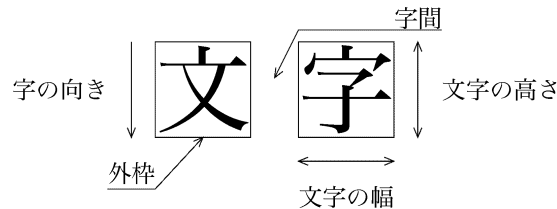


図 6 文字サイズ

- 119) **文字の高さ** 文字の、字の向き方向の外枠の大きさ(図6参照)。
- 120) **文字の幅** 文字の、字の向きに直角方向の外枠の大きさ(図6参照)。
- 121) **モノルビ** 親文字列の1文字毎に対応させたルビ。
- 122) **約物(やくもの)** 句点類、括弧類、中点類などの記述記号の総称。
- 123) **横書き** 各行の文字を文字の幅方向に並べる文字の配置。通常、左から右に横に並べる。
- 124) **読み仮名(漢文の)** 漢文を訓読する場合に、漢字そのものの読みを示すために漢字につける仮名。通常、平仮名が用いられるが、片仮名が用いられる場合もある。
- 125) **ラベル名** 図番号、表番号、見出し番号、柱の内容を表示するためにつける文字列。
- 126) **ルビ** 文字のそばにつけて文字の読み方、意味などを示す小さな文字。

例

- 127) **ルビかけ対象** ルビ文字列長が親文字列長より長い場合に、ルビ文字をかけて配置してもよい文字クラスの文字又は空き量(表3参照)。
- 128) **ルビかけ長** ルビかけ対象にかけて配置するルビ文字列の長さ。
- 129) **ルビ文字列長** ルビ文字列を指定のルビ文字列の文字サイズで、表3の空き量を挿入する以外はベタ組で配置したときのルビ文字列の先頭から最後尾までの長さ(図1参照)。
- 130) **連数字(れんすうじ)** 数字が一つ以上連続するもの。位取りのコンマ及び空白並びに小数点のピリオドを含む。

備考 和字として扱われる全角数字及び欧文用文字として扱われる固有の字幅をもつ数字は除く。

- 131) **和欧文混植処理** 和文と欧文が混在した文章からなる行を構成し、文字を配置すること。
- 132) **和字(わじ)** 和文を構成する漢字、仮名、数字、約物及びその他の記号。縦書きの場合、全角の欧字を含む。

133) 和字間隔 和字として扱われ、空き量を表現する文字。

134) 和文 和字で構成される文章であって、欧文を含まないもの。

135) 割注 (わりちゅう) 行中で、複数行に割書きした注釈。割注には、割書きを囲む括弧類を含む。この規格では、2行の割書きだけを規定する (図7参照)。

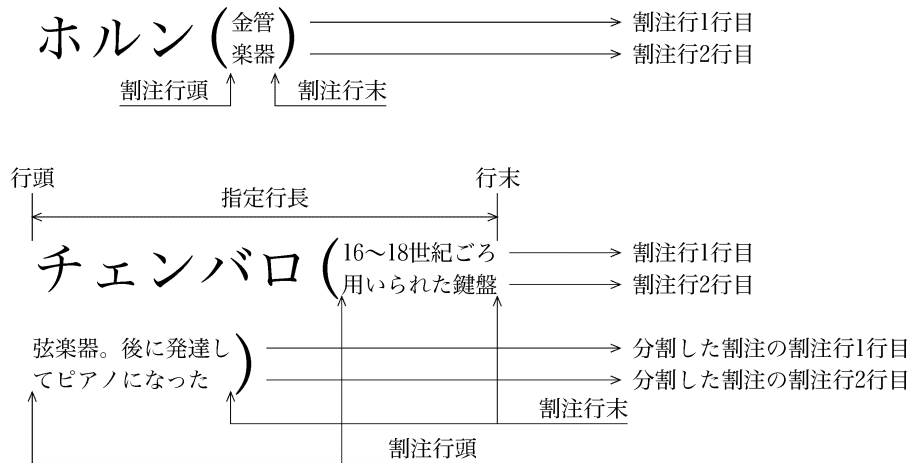


図7 割注・割注行

136) 割注行 割書きした一つの行。横書きの場合は上から、縦書きの場合は右から1行目、2行目と呼ぶ。指定行長に収まらず割注を行に分割した場合も、それぞれの行について1行目、2行目と呼ぶ (図7参照)。

137) 割注行頭 一つの割注行の始まる位置 (図7参照)。

138) 割注行末 一つの割注行の終わる位置 (図7参照)。

139) 割注文字列 割注における注釈文全体。割書きを囲む括弧類は含まない。

140) 割注文字列長 割注文字列を指定の文字サイズで、表3の空き量を挿入する以外はベタ組で配置したときの割注文字列の先頭から最後尾までの長さ。

4. ページの構成及び版面の寸法

4.1 ページの構成 一つのページは、仕上がり用紙サイズを示すガイドマーク、版面、柱及びノンブルで構成する。また、版面内を複数の段に分ける多段組の場合の版面は、段、段間及び段間けいで構成する。ただし、段間けいは、必須要素ではなく、省略できるものとする。

4.2 仕上がり用紙サイズ 仕上がり用紙の大きさは、次に規定する仕上がり用紙サイズのいずれかとする。ただし、処理系定義でこれ以外の大きさとしてもよい。

a) JIS P 0138 に規定する仕上寸法の A6, A5, A4, B6 又は B5。ただし、いずれも短辺を横寸法とする縦置きとする。

b) 横寸法 105mm で縦寸法 173mm の新書判。

c) 横寸法 128mm で縦寸法 188mm の四六判。

4.3 仕上がり用紙サイズを示すガイドマーク 仕上がり用紙サイズを示すガイドマークの種類と寸法は、次による。

a) ガイドマークの種類 ガイドマークの種類は、次による。ただし、ガイドマークの形状は処理系依存とする。

1) 仕上がり用紙サイズの4隅を示す裁ち線・裁ち代 (たちしろ) (図8の a 及び b)

- 2) 仕上がり用紙サイズの上側における左右の中心 (図 8 の c)
- 3) 仕上がり用紙サイズの下側における左右の中心 (図 8 の d)
- 4) 仕上がり用紙サイズの左側における天地の中心 (図 8 の e)
- 5) 仕上がり用紙サイズの右側における天地の中心 (図 8 の f)
- 6) 折り位置を示す折り線 (図 8 の g)

※図版制作中

図 8 ガイドマーク

b) 裁ち代寸法は、3mm とする。ただし、処理系定義でこれより大きくしてもよい。

4.4 版面の形状及び寸法並びに段の形状及び寸法 版面及び段の形状及び寸法は、次による。

a) 版面の形状及び段の形状 版面及び段の形状は、長方形とする。

b) 版面の寸法及び指定数値範囲並びに段の寸法及び指定数値範囲

1) 版面の寸法及び段の寸法

1.1) 1 段組の場合 版面寸法は、基本版面として指定する組方向、文字サイズ、字詰め数、行数及び行間の各指定数値を使用し、次の式で算出する。

1.1.1) 縦書き版面縦寸法又は横書き版面横寸法の計算式

$$\text{字詰め数} \times \text{文字サイズ}$$

1.1.2) 縦書き版面横寸法又は横書き版面縦寸法の計算式

$$\text{行数} \times \text{文字サイズ} + \text{行間} \times (\text{行数} - 1)$$

1.2) 多段組の場合

1.2.1) 段の寸法 段の寸法は、基本版面として指定する組方向、文字サイズ、1 段の字詰め数、1 段の行数及び行間の各指定数値を使用し、次の式で算出する。

1.2.1.1) 縦書き 1 段の縦寸法又は横書き 1 段の横寸法の計算式

$$1 \text{ 段の字詰め数} \times \text{文字サイズ}$$

1.2.1.2) 縦書き 1 段の横寸法又は横書き 1 段の縦寸法の計算式

$$1 \text{ 段の行数} \times \text{文字サイズ} + \text{行間} \times (1 \text{ 段の行数} - 1)$$

1.2.2) 版面の寸法 版面の寸法は、基本版面として指定する組方向、文字サイズ、1 段の字詰め数、1 段の行数、行間、段数及び段間の各指定数値を使用し、次の式で算出する。

1.2.2.1) 縦書き版面縦寸法又は横書き版面横寸法の計算式

$$1 \text{ 段の字詰め数} \times \text{文字サイズ} \times \text{段数} + \text{段間} \times (\text{段数} - 1)$$

1.2.2.2) 縦書き版面横寸法又は横書き版面縦寸法の計算式

$$1 \text{ 段の行数} \times \text{文字サイズ} + \text{行間} \times (1 \text{ 段の行数} - 1)$$

2) 基本版面の 1 段組の字詰め数及び多段組の 1 段の字詰め数は、次の範囲とすることが望ましい。

2.1) 縦書きでは、15 字以上 52 字以下の範囲とする。

2.2) 横書きでは、15 字以上 40 字以下の範囲とする。

3) 基本版面の文字サイズは、次の大きさを原則とする。

3.1) 文字サイズの単位をポイント (JIS X 4052 の 5.3.2 b 3) 参照、以降、ポと略記する。) とした場合には、8 ポ、9 ポ又は 10 ポとする。

3.2) 文字サイズの単位を Q (JIS X 4052 の 5.3.2 b) 5) 参照) とした場合には、12Q、13Q、14Q、15Q

又は 16Q とする。

参考 注などのように限られた分量の文章の場合は、7 ポや 10Q 以下の文字が使用されている。また、子ども向けの場合には、12 ポや 18Q 以上の文字が使用されている。

- 4) 仕上がり用紙サイズが B5 以上の大きさで、かつ文字サイズが 8 ポ、9 ポ、12Q 又は 13Q の場合には、基本版面の段数を 2 段以上とすることが望ましい。
- 5) 基本版面の段間は、基本版面の文字サイズの 2 倍アキを既定値とする。既定値以外の段間を指定する場合には、基本版面の文字サイズの 1.5 倍アキ以上で 3 倍アキ以下の範囲とすることが望ましい。
- 6) 基本版面の段間に段間けいを配置する場合は、次による。
 - 6.1) **段間けいの線種** 段間けいの線種及び線幅の既定値は、**4.5** に規定する表けいとする。
 - 6.2) **段間けいの位置** 段間けいを配置する段間は、基本版面の文字サイズの 2 倍アキ以上とすることが望ましく、縦書きでは段間の天地中央、横書きでは段間の左右中央に段間けいを配置する。
 - 6.3) **段間けいの長さ** 段間けいの長さは、縦書きでは版面横寸法と同一とし、横書きでは版面縦寸法と同一とする。これ以外の長さとする場合は、処理系定義とする。
- 7) 基本版面の行間は、基本版面の文字サイズの二分アキ以上で全角アキ以下の範囲とする。ただし、基本版面の 1 段組の字詰め数又は多段組の 1 段の字詰め数が 30 字を超える場合には、行間を基本版面の文字サイズの 70% 以上とし、字詰め数が増加するにともない広くすることが望ましい。

参考 行間にルビ、圏点、注番号などがある場合には、それらの文字サイズを考慮して行間を指定する。

- c) **仕上がり用紙に対する版面の位置** 版面は、仕上がり用紙に対して、天側及び地側の余白が均等で、かつ左側及び右側の余白が均等になる位置に配置することを既定値とする。(図 4.4b-1 参照)。ただし、横書きにおける“天”及び“のど”，又は縦書きにおける“地”及び“のど”の空き量が指定されている場合には、“天”及び“のど”，又は“地”及び“のど”に指定の余白を空けて版面を配置する(図 4.4d 参照)。
- d) 仕上がり用紙サイズ別の基本版面の指定例を、**附属書 二**に示す。
- e) 仕上がり用紙サイズ別の基本版面の組版例を、**附属書 二**に示す。

4.5 けい線の処理 けい線の組版処理は、次による。

- a) 表けい、中細けい及び裏けいの指定があった場合の線幅は、次による。ただし、処理系定義としてこれ以外の線幅としてもよい。
 - 1) 表けいの幅は、0.12 mm とする。
 - 2) 中細けいの幅は、0.25 mm とする。
 - 3) 裏けいの幅は、0.4 mm とする。
- b) けい線は、けい線の中心までの距離を指定された空き量としてけい線を配置する。

4.6 指定行長

- a) 1 段組縦書きでは版面縦寸法を指定行長とし、1 段組横書きでは版面横寸法を指定行長とする。
- b) 多段組縦書きでは縦書き 1 段の縦寸法を指定行長とし、多段組横書きでは横書き 1 段の横寸法を指定行長とする。

4.7 段の配置 縦書きの版面に配置する各段は、上から下に配置し、横書きの版面に配置する各段は、左から右に配置する。

4.8 組版対象領域への行などの配置方法

- a) 組版対象領域への行、段落、中扉、見出し、箇条書き、注、漢文、図・写真等、表などの配置は、指

定がない限り，出現した順番にしたがって前に配置したものに続けて配置する。配置方法の詳細は，この規格の各箇条による。

- b) **行の配置** 文字列をこの規格の各箇条に規定する配置方法で配置し，4.6 の指定行長に基づいて分割した行を組版対象領域に順次配置する。縦書きの組版対象領域では右から左に行を配置し，横書きの組版対象領域では上から下に行を配置する。

5. とじの方向

- a) とじの方向は，縦書きにおいては，右とじとする。横書きにおいては，左とじとする。
- b) 縦書きの右とじにおいて，ブロック類を横向きに回転させて配置する場合には，右回りに 90° 回転させて配置する（**図 9** 参照）。

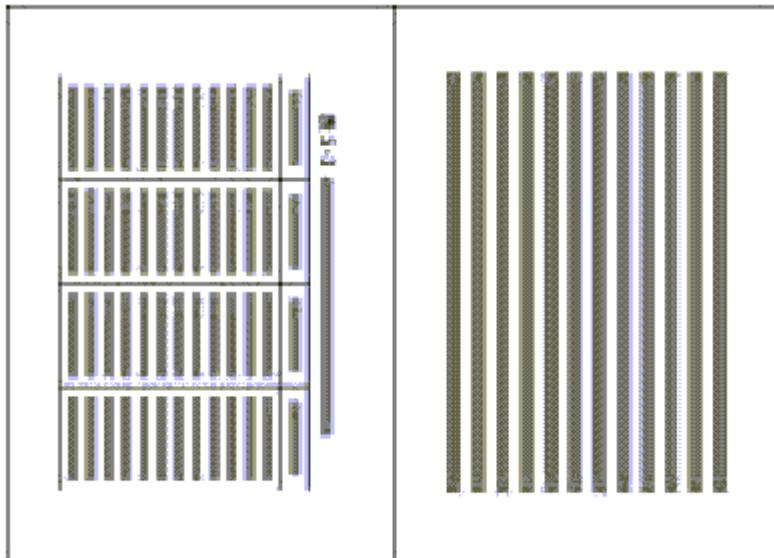


図 9 横向きに回転させて配置する（右とじの場合）

- c) 横書きの左とじにおいて，ブロック類を横向きに回転させて配置する場合には，左回りに 90° 回転させて配置する（**図 10** 参照）。

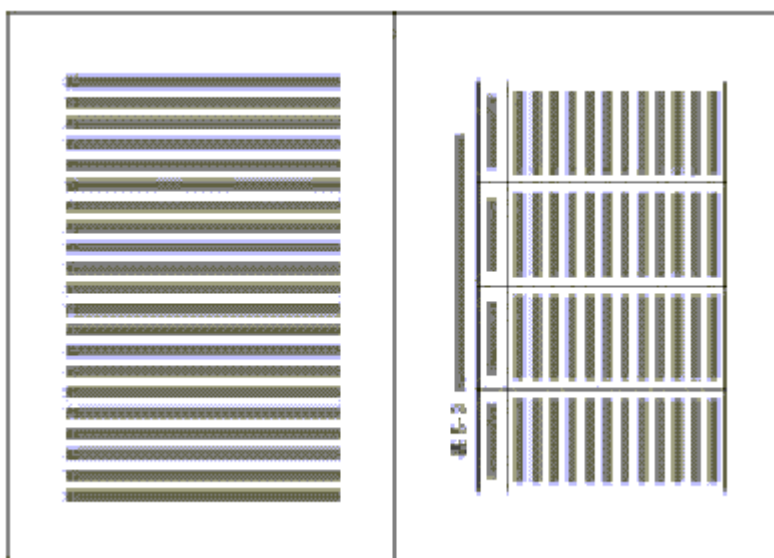


図 10 横向きに回転させて配置する（左とじの場合）

6. ノンブル及び柱の処理

6.1 ノンブルの処理 ノンブルの処理は、次による。

a) **ノンブルの構成** ノンブルは、ページ番号及びページ番号前後の括弧類、記号などの文字列で構成する。ただし、ページ番号前後の括弧類、記号などの文字列は、つけなくてもよい。

b) ページ番号

1) ページ番号は、アラビア数字表記を既定値とする。

備考 ページ番号には、位取り用のコンマ及び位取り用の空きを使用しない。

2) ページ番号は、本文の最初の紙葉表面のページを“1”とし、順次1ずつ増加する。

備考 ノンブルは紙葉の表面を“1”として開始するので、縦書きの見開きにおいては、右ページは偶数ページ、左ページは奇数ページとなり、横書きの見開きにおいては、左ページは偶数ページ、右ページは奇数ページとなる。

c) ノンブルの掲げ方

1) ノンブルは、**3)**の規定の中でノンブルを表示しないとしたページ又は**2)**に規定したページのいずれかに該当するページを除く各ページに一つ掲げる。ただし、本文の流れに従ったノンブルとは異なるノンブルを別に各ページに掲げてもよい。

備考 本文の流れに従ったノンブルとは異なるノンブルを掲げる例には、次のようなものがある。

定期刊行物や分冊して刊行されるそう（叢）書などで、各号ごとや分冊ごとにつけるノンブルとともに全体を通して一連のノンブルをつける。

1冊の本の中に組方向が異なる要素が入る場合、基本版面の組方向とは異なる要素に1冊を通してのノンブルとともに、その要素のみのノンブルをつける。

2) 次のページにおいては、ページ番号は加算するが、ノンブルは、表示しない。

2.1) ノンブルの配置領域が、ブロック類と重なったページ

2.2) 白ページ

3) 次のページにおいては、ページ番号は加算するが、ノンブルは、表示しなくてもよい。

3.1) 中扉

3.2) 横書きにおいてノンブルを天側の余白に配置した場合で、改丁・改ページ等で見出しが始まるページ

d) ノンブルの文字サイズ及び配置位置

1) ノンブルの文字サイズは、基本版面の文字サイズより1段階又は2段階小さくすることが望ましい。ただし、B5以上の仕上がり用紙サイズの場合は、基本版面の文字サイズと同一又は基本版面の文字サイズより1段階大きくしてもよい。

2) 基本版面の組方向に関わらず、ノンブルの組方向は、横書きとする。ただし、基本版面が縦書きで、ページ番号に漢数字を使用する場合は、ノンブルの組方向を縦書きとしてもよい。

備考 基本版面が縦書きで、ページ番号に漢数字を使用し、組方向を縦書きとした場合は、ページ番号の天地の文字サイズを50%縮小することが望ましい。この場合において、ノンブルは基本版面の小口側に、基本版面の下端の延長線から基本版面の文字サイズで5倍アキくらい上がった位置にノンブルの末尾をそろえ、基本版面とノンブルとの空き量は、基本版面の行間の空き量以上とする（ 11 参照）。

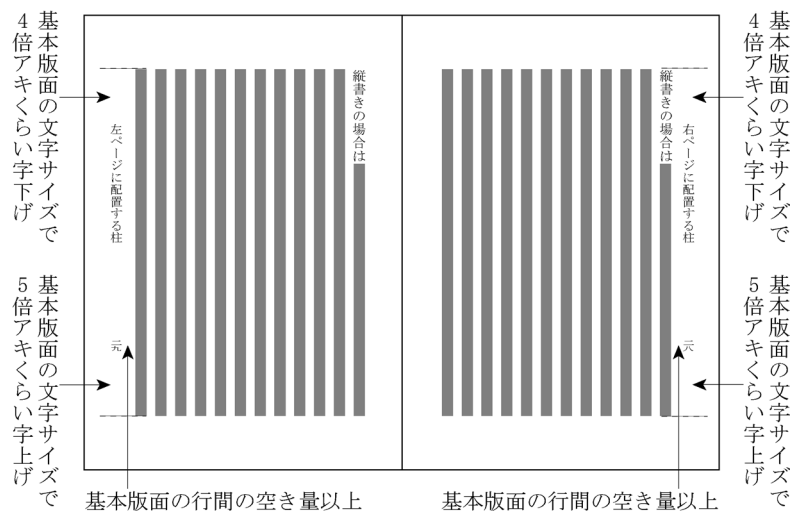


図 11 基本版面が縦書きで、ノンブルと柱を縦書きとした例

3) ノンブルのページ内の配置位置

3.1) 基本版面の組方向が縦書きの場合

- 3.1.1) ノンブルは、仕上がり用紙サイズに基本版面を配置した余白の中で、地側の余白の小口側に寄った位置に配置する（図 12 参照）。ただし、天側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の基本版面に対して左右中央の位置に配置してもよい。
- 3.1.2) ノンブルと基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキを既定値とする。ただし、ノンブルと基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキ未満としてはならない。
- 3.1.3) ノンブルを地側の余白の小口側に寄った位置又は天側の余白の小口側に寄った位置に配置する場合の左右位置は、次による。
- 3.1.3.1) 左ページでは、基本版面の左端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ右に寄せた位置にノンブルの先頭をそろえて配置する（図 12 参照）。ただし、基本版面の左端の延長線にノンブルの先頭をそろえて配置してもよい。
- 3.1.3.2) 右ページでは、基本版面の右端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ左に寄せた位置にノンブルの末尾をそろえて配置する（図 12 参照）。ただし、基本版面の右端の延長線にノンブルの末尾をそろえて配置してもよい。

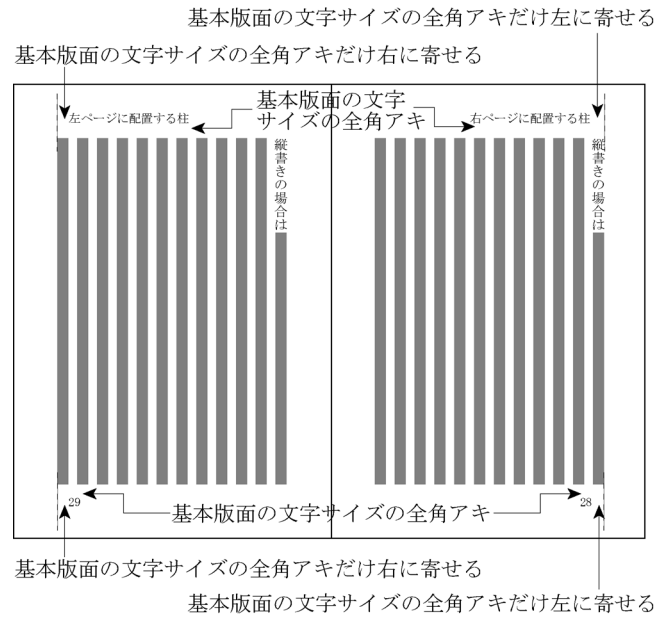


図 12 基本版面が縦書きの場合で、ノンブルを地側の余白の小口側に寄った位置、両柱方式の柱を地側の余白の小口側に寄った位置に配置した例

3.2) 基本版面の組方向が横書きの場合

- 3.2.1)** ノンブルは、仕上がり用紙サイズに基本版面を配置した余白の中で、天側の余白の小口側に寄った位置に配置する（図 13 参照）。ただし、地側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の基本版面に対して左右中央の位置に配置してもよい。
- 3.2.2)** ノンブルと基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキよりは少なくとも 1 ポくらい広くすることが望ましい。
- 3.2.3)** ノンブルを天側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の小口側に寄った位置に配置する場合の左右位置は、次による。
- 3.2.3.1)** 左ページでは、基本版面の左端の延長線にノンブルの先頭をそろえて配置する（図 13 参照）。ただし、基本版面の左端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ右に寄せた位置にノンブルの先頭をそろえて配置してもよい。
- 3.2.3.2)** 右ページでは、基本版面の右端の延長線にノンブルの末尾をそろえて配置する（図 13 参照）。ただし、基本版面の右端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ左に寄せた位置にノンブルの末尾をそろえて配置してもよい。

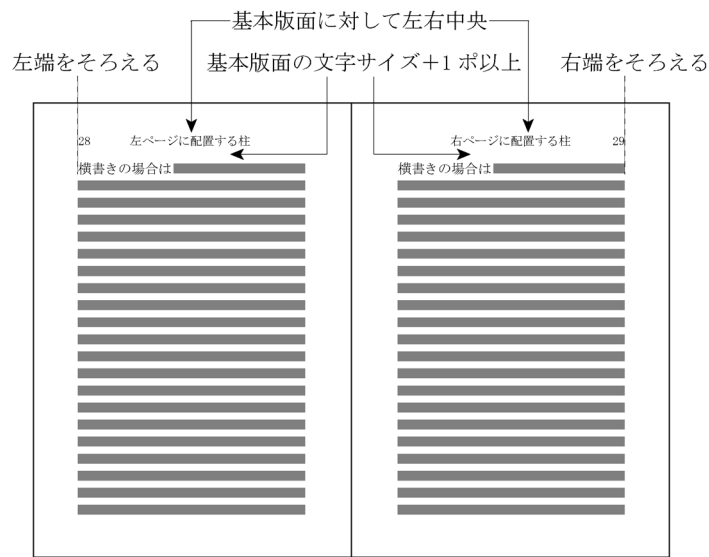


図 13 基本版面が横書きの場合で、ノンブルを地側の余白の小口側に寄った位置、両柱方式の柱を地側の余白の小口側に寄った位置に配置した例

6.2 柱の処理 柱の処理は、次による。

- a) 柱の構成 柱は、柱番号及び柱文字列で構成する。柱番号は、ラベル名及び番号で構成する。柱番号は、必須要素ではなく、省略できる。
- b) 柱の掲げ方 柱を掲げる場合には、次に示す片柱方式又は両柱方式とする。
 - 1) 片柱方式 奇数ページに、次のいずれかの内容の柱を一つ配置する。
 - 1.1) 柱文字列：中扉の標題
 - 1.2) 柱番号のラベル名：大見出しのラベル名
柱番号の番号：大見出しの番号
柱文字列：大見出しの見出し文字列
 - 1.3) 柱番号のラベル名：中見出しのラベル名
柱番号の番号：中見出しの番号
柱文字列：中見出しの見出し文字列
 - 1.4) 柱番号のラベル名：小見出しのラベル名
柱番号の番号：小見出しの番号
柱文字列：小見出しの見出し文字列
 - 2) 両柱方式 偶数ページ及び奇数ページに、次のいずれかの組み合わせの内容の柱を一つ配置する。
 - 2.1) 奇数ページの柱の内容が 1.1) の場合には、偶数ページの柱の内容を書名とする。
 - 2.2) 奇数ページの柱の内容が 1.2) の場合には、偶数ページの柱の内容を 1.1) とする。
 - 2.3) 奇数ページの柱の内容が 1.3) の場合には、偶数ページの柱の内容を 1.2) とする。
 - 2.4) 奇数ページの柱の内容が 1.4) の場合には、偶数ページの柱の内容を 1.3) とする。

備考 柱に掲げる書名、中扉の標題並びに見出しのラベル名、番号及び見出し文字列は、その一部を省略又は執筆者名などの文字列を追加し、表記方法を変更してもよい。見出しの番号が漢数字表記の場合は、横書きにする柱ではアラビア数字表記に修正することが望ましい。また、約物は横書きの表記法に修正する。

- 3) 柱に掲げる見出しは、見出しが出現したページ以降とする。ただし、同一ページに同位レベルの見出しが複数出現した場合は、最後に出現した見出しを掲げる。

備考 両柱方式において、掲げる見出しなどの種類が1種類しかないページでは、偶数ページ及び奇数ページに同じ見出しなどを掲げる。偶数ページ又は奇数ページいずれかのページの柱を表示しない方法はとらないことが望ましい。

- 4) 柱は、次のページには表示しない。
- 4.1) 中扉
- 4.2) 柱の配置領域が、ブロック類と重なったページ
- 4.3) 白ページ
- 5) 柱は、次のページでは表示しなくてもよい。
- 5.1) 柱の配置領域に隣接してブロック類が配置されているページ
- 5.2) 改丁・改ページ等で始まる見出しが偶数ページに掲げられているページ
- 5.3) 横書きにおいて、柱を天側の余白に配置した場合で、改丁・改ページ等で始まる見出しが奇数ページに掲げられているページ

e) 柱の文字サイズ及び配置位置

- 1) 柱の文字サイズは、基本版面の文字サイズより1段階又は2段階小さくすることが望ましい。
- 2) 基本版面の組方向に関わらず、柱の組方向は、横書きとする。ただし、基本版面が縦書きで、柱を小口側の余白に配置する場合は、柱の組方向を縦書きとしてもよい。

備考 基本版面が縦書きで、柱を小口側の余白に縦書きで配置する場合には、基本版面上端の延長線から基本版面の文字サイズで4倍アキくらい字下げした位置に柱の先頭をそろえる。また、基本版面と柱との空き量は、基本版面とノンブルとの空き量にそろえ、基本版面の行間の空き量以上とする（**図 11** 参照）。

- 3) 柱番号と柱文字列との間の空き量は、柱文字列の文字サイズの全角アキとする。ただし、柱番号の末尾に終わり括弧類又は句点類が位置する場合は、柱文字列との間の空き量の既定値を柱文字列の文字サイズの二分アキとする。
- 4) 柱番号は、ベタ組とする。ただし、横書きの柱でラベル名に和文、番号に欧文又は連数字を使用する場合は、ラベル名と番号との空き量は、四分アキとする。
- 5) 柱の字間を空ける場合には、柱文字列の字間のみを空け、柱番号の配置は **4)** に従う（柱の字間を空ける例は、**附属書 =**を参照）。
- 6) **柱文字列の文字の配置方法** 柱文字列の文字の配置方法は、**7.**の規定による。ただし、始め括弧類の前及び終わり括弧類の後ろは、四分アキとしてもよく、中点類の前後は八分アキとしてもよい。

7) 柱のページ内の配置位置

7.1) 基本版面の組方向が縦書きの場合

7.1.1) 柱は、仕上がり用紙サイズに基本版面を配置した余白の内で、天側の余白の小口側に寄った位置に配置する（**図 12** 参照）。ただし、地側の余白の小口側に寄った位置又は天側の余白の基本版面に対して左右中央の位置に配置してもよい。

7.1.2) 柱と基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキを既定値とする。ただし、柱と基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキ未満としてはならない。

なお、ノンブル及び柱をともに天側又は地側に配置する場合は、柱と基本版面との上下方向の

空き量を **6.1d) 3.1.2)** と同一にする。

7.1.3) 柱を天側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の小口側に寄った位置に配置する場合の左右位置は、次による。

7.1.3.1) 左ページでは、基本版面の左端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ右に寄せた位置に、柱の先頭をそろえて配置する (**図 12** 参照)。ただし、基本版面の左端の延長線に柱の先頭をそろえて配置してもよい。

7.1.3.2) 右ページでは、基本版面の右端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ左に寄せた位置に、柱の末尾をそろえて配置する (**図 12** 参照)。ただし、基本版面の右端の延長線に柱の末尾をそろえて配置してもよい。

7.1.4) 柱及びノンブルをともに同一の天側の余白の小口側に寄った位置、又はともに同一の地側の余白の小口側に寄った位置とする場合は、ノンブルと柱との空き量を柱に使用する文字サイズの 2 倍アキ又は 1.5 倍アキとし、柱とノンブルの位置を次のようにする。

7.1.4.1) 左ページでは、左側にノンブル、右側に柱を配置する。

7.1.4.2) 右ページでは、右側にノンブル、左側に柱を配置する。

7.2) 基本版面の組方向が横書きの場合

7.2.1) 柱は、仕上がり用紙サイズに基本版面を配置した余白の内で、天側の余白の基本版面に対して左右中央の位置に配置する (**図 13** 参照)。ただし、天側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の小口側に寄った位置に配置してもよい。

7.2.2) 柱と基本版面との上下方向の空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキよりは少なくとも 1 ポくらい広くすることが望ましい。

なお、ノンブル及び柱をともに天側又は地側に配置する場合は、柱と基本版面との上下方向の空き量を **6.1 d) 3.2.2)** と同一にする。

7.2.3) 柱を天側の余白の小口側に寄った位置又は地側の余白の小口側に寄った位置に配置する場合の左右位置は、次による。

7.2.3.1) 左ページでは、基本版面の左端の延長線に柱の先頭をそろえて配置する (**図 13** 参照)。ただし、基本版面の左端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ右に寄せた位置に、柱の先頭をそろえて配置してもよい。

7.2.3.2) 右ページでは、基本版面の右端の延長線に柱の末尾をそろえて配置する (**図 13** 参照)。ただし、基本版面の右端の延長線より基本版面の文字サイズの全角アキだけ左に寄せた位置に、柱の末尾をそろえて配置してもよい。

7.2.4) 柱及びノンブルをともに同一の天側の余白の小口側に寄った位置、又はともに同一の地側の余白の小口側に寄った位置とする場合は、ノンブルと柱との空き量を柱に使用する文字サイズの 2 倍アキ又は 1.5 倍アキとし、柱とノンブルの位置を次のようにする。

7.2.4.1) 左ページでは、左側にノンブル、右側に柱を配置する。

7.2.4.2) 右ページでは、右側にノンブル、左側に柱を配置する。

6.3 ノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズ例 仕上がり用紙サイズ別のノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズの指定例を、**附属書 =** に示す。

6.4 ノンブル及び柱の組版例 仕上がり用紙サイズ別の配置位置及び文字サイズの組版例を、**附属書 =** に示す。

7. 行組版規則

7.1 行に配置する文字列の基本的な配置位置 行に配置する文字列の基本的な配置位置は、次による。

- a) 行送り方向は、それぞれの文字の外枠の中心をそろえて文字を配置する。詳細な配置方法は、この規格の各箇条による。
- b) 字詰め方向は、行頭、行末及び隣接する文字の字間に表 3 に規定する空き量を確保して文字を配置する。詳細な配置方法は、この規格の各箇条による。

7.2 約物の基本的な用法 約物の基本的な用法は、次による。ただし、“原則とする”と規定している空き量は、7.15 の調整対象とする。空き量に対応する文字は、表 3 による。

a) 字幅

- 1) 始め括弧類、終わり括弧類、中点類及び句点類の字幅は、半角とする。縦書きで漢数字の位取り記号として使われる読点“、”及び小数点として使われる中点“・”の字幅は半角とするが、これらは終わり括弧類及び中点類とは異なる。

参考 縦書きの数字表記における位取り用の読点及び小数点用の中点は、次のように使用する。

※図版制作中

図 14 縦書きの数字表記における位取り用の読点及び小数点用の中点

位取りの読点を使用する場合、上の例のように 3 けたごとに入れる方法と 4 けたごとに入れる方法がある。

4 けたごとに読点を入れる代わりに単位語（万、億、兆など）を入れる表記法もある。通常、単位語のすぐ後に続く一つ以上の〇は、省略する。

縦書き・横書きとも単位語と位取り用の読点又はコンマとは混在しない。

※図版制作中

図 15 縦書きの数字表記における単位語

- 2) 区切り約物の字幅は、全角とする。
- b) 行中での括弧類及び句点類の基本的な配置法
- 1) 始め括弧類の前及び終わり括弧類の後ろは、二分アキを原則とする。ただし、縦書きで漢数字の位取り記号として使われた読点は、後ろを空けずベタ組とする。
 - 2) 句点類の後ろは、二分アキとする。

例 この「日本語組版規則」は、文字の配置法を規定する。

c) 行中での中点類の基本的な配置法

- 1) 中点類の前後では、四分アキを原則とする。ただし、縦書きで漢数字の小数点として使われた中点は、前後を空けずベタ組とする。
- 2) 中点類の次に始め括弧類が続く場合は、中点類と始め括弧類との間は四分アキを原則とする。終わり括弧類の次に中点類が続く場合は、終わり括弧類と中点類との間は四分アキを原則とする。

例 東京・大阪・名古屋などの大都市圏における
男子（成人だけ）；（18歳以上の）女子の

d) 括弧類が連続する場合の配置法

- 1) 始め括弧類が続く場合又は終わり括弧類が続く場合は、ベタ組とする。
- 2) 終わり括弧類の次に始め括弧類が続く場合、終わり括弧類と始め括弧類との間は、二分アキを原則とする。

とする。

例 この「(日本語)」(組版)(規則)では

e) 句点類と括弧類が連続する場合の配置法

- 1) 句点類の次に終わり括弧類が続く場合は、ベタ組とする。
- 2) 終わり括弧類の次に句点類が続く場合は、ベタ組とする。
- 3) 句点類の次に始め括弧類が続く場合、句点類と始め括弧類との間は、二分アキとする。

例 これは「日本語です。」とのこと、
また「組版です」。「原則的規則」を

f) 行末での配置法

- 1) 終わり括弧類が行末又は割注行末にきた場合、終わり括弧類と行末又は割注行末との間は、ベタ組とする。ただし、ベタ組とする代わりに、7.1.2 = 備考 2.の処理系定義によって二分アキを原則としてもよい。
- 2) 中点類が行末又は割注行末にきた場合は、中点類の前は四分アキを原則とし、中点類の後ろはベタ組とする。ただし、ベタ組とする代わりに、7.1.2 = 備考 2.の処理系定義によって四分アキを原則としてもよい。

g) 段落の始まり及び行頭での配置法 段落の始まり、行頭又は割注行頭に始め括弧類がきた場合は、ベタ組とする。ただし、ベタ組とする代わりに、7.1.2 = 備考 2.の処理系定義によって、段落の始まり、行頭又は割注行頭と始め括弧類との間を、二分アキとしてもよい。

例 「段落の始まり」は全角下がり、
「折り返し」はベタ組が原則。

7.3 行頭禁則処理 終わり括弧類、行頭禁則和字、句切り約物、中点類及び句点類が、行頭又は割注行頭にきてはならない。

また、縦書きで漢数字の位取り記号として使われる読点及び小数点として使われる中点が行頭又は割注行頭にきてはならない。

行頭禁則処理は、次による。

a) 前行に中点類、括弧類、欧文間隔、和文と欧文との間の空き量、和文と連数字との間の空き量又は和文と単位記号との間の空き量のいずれかがあり、詰め処理が可能な場合は、詰め処理で禁則文字を前行に追い込む。

なお、割注処理では処理系定義によって詰め処理を行ってもよい。

詰め処理による行の調整方法の詳細は、7.15 = (1) = による。

例 この「日本語組版規則」では
、1行を組み上げるために必要
な最低限の規則について

↓

この「日本語組版規則」では、
1行を組み上げるために必要な
最低限の規則について

備考 “「”の前の二分アキと“””の後ろの二分アキを、それぞれ四分アキとする。

b) a) の詰め処理が不可能な場合又は割注処理の場合は、延ばし処理で行末の文字を追い出す。延ばし処

理による行の調整方法の詳細は、7.15 = (2) = 及び (3) = による。

例

こ	の	日	本	語	組	版	規	則	の	例	で	は
,	1	行	を	組	み	上	げ	る	た	め	に	必
要	な	最	低	限	の	規	則	に	つ	い	て	

↓

こ	の	日	本	語	組	版	規	則	の	例	で	は
は	,	1	行	を	組	み	上	げ	る	た	め	に
必	要	な	最	低	限	の	規	則	に	つ	い	て

備考 “こ” から “で” までの字間に、全体で1文字分の空き量を均等に入れる。

7.4 行末禁則処理 始め括弧類が行末又は割注行末にきてはならない。

行末禁則処理は、次による。

- a) 同一行内に禁則文字を含めて、中点類，括弧類，欧文間隔，和文と欧文との間の空き量，和文と連数字との間の空き量又は和文と単位記号との間の空き量のいずれかがあり，詰め処理が可能な場合は，詰め処理で次行行頭の文字を追い込む。

なお，割注処理では処理系定義によって詰め処理を行ってもよい。

詰め処理による行の調整方法の詳細は，7.15 = (1) = による。

例

日	本	語	の	「	横	書	き	」	と	「	縦	書	き	」	で	は	，	組	版	規	則	が	異	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

↓

日	本	語	の	「	横	書	き	」	と	「	縦	書	き	」	で	は	，	組	版	規	則	が	異	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

備考 “「” の前の二分アキと “”” 後ろの二分アキを，それぞれ三分アキの半分とする。

- b) a) の詰め処理が不可能な場合又は割注処理の場合は，延ばし処理で禁則文字を次行に追い出す。延ばし処理による行の調整方法の詳細は，7.15 = (2) = 及び (3) = による。

例

ビ	ジ	ネ	ス	で	用	い	る	日	本	語	の	「	横	書	き	」	と	「	縦	書	き	」	で	は	，	組	版	規	則	が	異	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

↓

ビ	ジ	ネ	ス	で	用	い	る	日	本	語	の	「	横	書	き	」	と	「	縦	書	き	」	で	は	，	組	版	規	則	が	異	な	る	。
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

備考 “ビ” から “の” までの字間に、全体で1文字分の空き量を均等に入れる。

7.5 分離禁止処理

7.5.1 分割禁止 分離禁止文字の組を構成する文字間では，分割してはならない。ただし，連数字と欧文間隔以外の欧文用文字との間を分割可とするか否かは，処理系定義とする。

- a) 次行行頭の文字を追い込むことが可能な場合は，7.4 = (1) = の詰め処理に従って文字を配置し，分離禁止文字の組を構成する文字間では分離しない。

なお、割注処理では処理系定義によって詰め処理を行ってもよい。

例

	今	年	，	売	上	は	，	前	年	比	1	1	0
	%	で	あ	る	。								

↓

	今	年	，	売	上	は	，	前	年	比	1	1	0	%
	で	あ	る	。										

備考 “，”の後ろの二分アキを八分アキにする。

- b) a) の詰め処理が不可能な場合又は割注処理の場合は、同一行の行末の文字を追い出す **7.4 = (2) =** の延ばし処理に従って文字を配置し、分離禁止文字の組を構成する文字間では分割しない。

例

	今	年	の	売	上	は	前	年	比	で	1	1	0
	%	で	あ	る	。								

↓

	今	年	の	売	上	は	前	年	比	で	1	1	0	%
	で	あ	る	。										

備考 “今”から“で”までの字間に、全体で2文字分の空き量を均等に入れる。

7.5.2 分離禁止 延ばし処理によって行を調整する場合も、分離禁止文字の組を構成する文字間には延ばし処理による空き量を入れてはならない。ただし、連数字と欧文間隔以外の欧文用文字との間を延ばし可とするか否かは、処理系定義とする。

7.6 連数字の配置法 連数字の配置法は、次による。ただし、“原則とする”と規定している空き量は、**7.15** の調整対象とする。空き量に対応する文字は、**表 3** による。

- a) 連数字の文字間では分割してはならない。

また、延ばし処理によって行を調整する場合も、連数字の文字間には延ばし処理による空き量を入れてはならない。

- b) 連数字の位取りとして使われるコンマ、及び小数点として使われるピリオドの字幅は四分角とし、いずれも前後を空けずベタ組とする。
- c) 連数字内の位取りの空白は、四分アキとする。
- d) 横書きでは、連数字と和文との間の空き量は、連数字の前後で四分アキを原則とする。ただし、行頭、割注行頭、行末及び割注行末は、空けない。詳細は、**表 3** による。
- e) 横書きでは、連数字と単位記号との間の空き量は、四分アキとする。単位記号と和文との間の空き量は、四分アキを原則とする。ただし、行頭、割注行頭、行末及び割注行末は、空けない。詳細は、**表 3** による。
- f) 縦書きの行中で、連数字及び単位記号の文字の向きを右回りに 90° 回転して横書きにした場合は、**d)** 及び **e)** に従う。
- g) 縦書きの行中で、連数字及び単位記号を縦書きの文字の向きのまま横書きにした場合は、連数字及び単位記号の前後は、ベタ組とする。

例 ※図版制作中

7.7 和欧文混植処理 和欧文混植処理は、次による。ただし、“原則とする”と規定している空き量は、**7.15**の調整対象とする。空き量に対応する文字は、**表 3**による。

備考 和文と欧文を区別する方法は、処理系定義とする。

- a) 横書きでは、和文と欧文との間の空き量は、四分アキを原則とする。ただし、行頭、割注行頭、行末及び割注行末には、この空き量を入れない。
- b) 縦書きの行中では、欧文の文字の向きを右回りに 90° 回転して欧文を横書きにし、**a)**に従う。

例 ※図版制作中

備考 縦書きの欧字又は数字を和字として扱う場合は、ベタ組とし、次のように配置する。

また、**7.10 = (4) =**の許容で、添え字付きの欧字を縦中横を使用して配置する場合も、ベタ組とする。

例 ※図版制作中

- c) 欧文間隔は、三分アキを原則とする。ただし、行頭、割注行頭、行末及び割注行末の欧文間隔は、空き量を 0 とする。
- d) 欧文中の単語は、同一行内の中点類の空き量、括弧類の空き量、和文と欧文との間の空き量、和文と連数字との間の空き量、和文と単位記号との間の空き量及び欧文間隔を **7.15**に従って調整して追込み又は追出しを行い、分割しないことを原則とする。

また、延ばし処理によって行を調整する場合も、一つの欧文単語の文字間には延ばし処理による空き量を入れない。ただし、欧文間隔以外の欧文用文字の字間を、延ばし可とするか否かは処理系定義とする。

- e) **d)**によって調整できない場合には、一つの欧文単語を、ハイフネーション (hyphenation) 可能な箇所分割する。ハイフネーション可能な箇所以外で分割してはならない。ハイフネーション処理が可能な欧文の種類及びその処理は、処理系定義とする。

7.8 縦中横処理 縦中横処理は、縦書きの行中で、縦書きの字の向きのまま横書きになるように文字列を中央に配置する。

例 ※図版制作中

7.9 ルビ処理

7.9.1 ルビ文字の文字サイズ ルビ文字の文字サイズは、親文字の文字サイズの 1/2 とする。ただし、文字サイズの大きな見出しなどにつくルビ文字の場合は、親文字の文字サイズの 1/2 以下でもよい。

備考1. この規格では、欧文用文字や連数字のようにルビ文字が固有の字幅をもつことを許している。

2. 三分ルビを使用するかどうかは、指定による。

7.9.2 ルビ文字列の位置 ルビ文字列の位置は、縦書きでは親文字列の外枠の右側に接して配置することを既定値とし、横書きでは親文字列の外枠の上部に接して配置することを既定値とする。指定により、縦書きでは親文字列の外枠の左側又は左右の両側に接して配置してもよく、横書きでは親文字列の外枠の下部又は上下の両側に接して配置してもよい。

例 ※図版制作中

7.9.3 ルビ文字列を片側にのみ配置する場合の処理 縦書きにおいて親文字列の外枠の右側又は左側に配置する場合、及び横書きにおいて親文字列の外枠の上部又は下部に配置する場合の処理は、次による。

- a) **モノルビの処理** モノルビの処理は、次による。

- 1) ルビ文字列は、ベタ組とする。ルビ文字列が欧文用文字又は連数字の場合は、ルビ文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置する。
- 2) ルビ文字列の中心を親文字の中心に合わせて配置する。

例 ※図版制作中

ただし、処理系定義として、縦書きにおいて、親文字が表 2 に規定する(1)~(11)以外の和字又は平仮名であり、ルビ文字が 1 字の場合は、親文字の先頭とルビ文字列の先頭をそろえる配置方法としてもよい。また、親文字列長がルビ文字列長未満で 5.2.1) 及び 5.2.2) の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合には、5.2.1) 又は 5.2.2) の許容に従って配置する。

例 ※図版制作中

3) **親文字群とその前後に配置する本文文字列** 親文字列長がルビ文字列長未満の場合において、次のようにルビ文字を親文字群の前後の文字にかけて配置する。ただし、処理系定義として、ルビ文字を前又は後ろの文字にかけずに配置してもよい。

3.1) 親文字群の前の文字が空き、平仮名、分離禁止文字又は和字間隔のいずれかの場合、ルビ文字を最大でルビ文字の文字サイズまで前の文字にかけて配置する。ただし、処理系定義として、親文字群の前の文字が表 2 に規定する(1)~(11)以外の和字の場合、ルビ文字を最大でルビ文字の文字サイズの 1/2 までかけて配置してもよい。

例1. ルビ文字の文字サイズまで前の文字にかけて配置する例

2. ルビ文字を前の文字にかけないで配置する例

3. 表 2 に規定する(1)~(11)以外の和字にルビ文字をかけて配置する例

3.2) 親文字群の後ろの文字が空き、平仮名、終わり括弧類、句点類、分離禁止文字又は和字間隔のいずれかの場合、ルビ文字を最大でルビ文字の文字サイズまで後ろの文字にかけて配置する。ただし、処理系定義として、親文字群の後ろの文字が表 2 に規定する(1)~(11)以外の和字の場合、ルビ文字を最大でルビ文字の文字サイズの 1/2 までかけて配置してもよい。

例1. ルビ文字の文字サイズまで後ろの文字にかけて配置する例

2. ルビ文字を後ろの文字にかけないで配置する例

3. 表 2 に規定する(1)~(11)以外の和字にルビ文字をかけて配置する例

4) 親文字群は、複数行に分割してはならず、= の調整対象とはしない。

5) 親文字群が行頭又は行末に位置した場合、次のとおりに配置する。

5.1) 親文字列長がルビ文字列長以上の場合。

5.1.1) 親文字群が行頭に位置した場合は、親文字の先頭を行頭に合わせる。

5.1.2) 親文字群が行末に位置した場合は、親文字の最後尾を行末に合わせる。

例 ※図版制作中

5.2) 親文字列長がルビ文字列長未満の場合

5.2.1) 親文字群が行頭に位置した場合は、ルビ文字列の先頭を行頭に合わせる。ただし、ルビ文字列の先頭を行頭に合わせる代わりに、親文字の先頭とルビ文字列の先頭をそろえて行頭に合わせてもよい。親文字の先頭とルビ文字列の先頭を行頭に合わせるオプションは、5.2.2) = 及び b) 4.2) = のオプションと同時に使用し、処理系定義とする。

5.2.2) 親文字群が行末に位置した場合は、ルビ文字列の最後尾を行末に合わせる。ただし、ルビ文字列の最後尾を行末に合わせる代わりに、親文字の最後尾とルビ文字列の最後尾をそろえて行末に合わせてもよい。親文字の最後尾とルビ文字列の最後尾を行末に合わせるオプションは、5.2.1) = 及び b) 4.2) = のオプションと同時に使用し、処理系定義とする。

例1. =

2. オプション（行頭及び行末）の場合

b) **グループルビの処理** グループルビの処理は、次による。

1) 親文字列長がルビ文字列長以上の場合、文字列は次のとおりに配置する。

1.1) 親文字列は、ベタ組とする。親文字列が欧文用文字又は連数字の場合は、親文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置する。

1.2) ルビ文字列が2文字以上で欧文用文字でもなく連数字でもない場合は、 $x:y:z=1:2:1$ の比率でルビ文字間を空けて配置する。 x 、 y 及び z は、次による。

x :親文字列の先頭からルビ文字列の先頭までの空き量。

y :ルビ文字間の空き量。

z :ルビ文字列の最後尾から親文字列の最後尾までの空き量。

例 ※図版制作中

ただし、これ以外の比率の空き量とすることは、処理系定義とする。

1.3) ルビ文字列が1文字、欧文用文字又は連数字の場合は、ルビ文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置し、ルビ文字列の中心を親文字列の中心に合わせて配置する。

例 ※図版制作中

2) 親文字列長がルビ文字列長未満の場合、文字列は次のとおりに配置する。

2.1) ルビ文字列は、ベタ組とする。ルビ文字列が欧文用文字又は連数字の場合は、ルビ文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置する。

2.2) 親文字列が欧文用文字でもなく連数字でもない場合は、 $X:Y:Z=1:2:1$ の比率で親文字間を空けて配置する。 X 、 Y 及び Z は、次による。

X :ルビ文字列の先頭から親文字列の先頭までの空き量。

Y :親文字間の空き量。

Z :親文字列の最後尾からルビ文字列の最後尾までの空き量。

ただし、**4.2.1)** **=**の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合、親文字列の先頭とルビ文字列の先頭をそろえて配置する。この場合は、 $Y:Z=1:1$ の比率で親文字間を空けて配置する。

4.2.2) **=**の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合、親文字列の最後尾とルビ文字列の最後尾をそろえて配置する。この場合は、 $X:Y=1:1$ の比率で親文字間を空けて配置する。

例1. 標準の場合

バケーション 休暇	バケーション 休暇	バケーション 休暇
行頭		行末

例2. オプション（行頭及び行末）の場合

バケーション 休暇	バケーション 休暇	バケーション 休暇
行頭		行末

ただし、これ以外の比率の空き量とすることは、処理系定義とする。

2.3) 親文字列が欧文用文字又は連数字の場合は、親文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置し、親文字列の中心をルビ文字列の中心に合わせて配置する。

ただし、**4.2.1)** **=**の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合、親文字列の先頭とルビ文字列の先頭をそろえて配置する。**4.2.2)** **=**の許容を処理系定義のオプションとして提供する

場合、親文字列の最後尾とルビ文字列の最後尾をそろえて配置する。

例1. 標準の場合

こころざし 志	こころざし 志	こころざし 志
行頭		行末

例2. オプション（行頭及び行末）の場合

こころざし 志	こころざし 志	こころざし 志
行頭		行末

2.4) 親文字群とその前後に配置する本文文字列との関係は、**a) 3)**による。

3) 親文字群は、複数行に分割してはならず、**==**の調整対象とはしない。

4) 親文字群が行頭又は行末に位置した場合、次のとおりに配置する。

4.1) 親文字列長がルビ文字列長以上の場合。

4.1.1) 親文字群が行頭に位置した場合は、親文字列の先頭を行頭に合わせる。

4.1.2) 親文字群が行末に位置した場合は、親文字列の最後尾を行末に合わせる。

例 ※図版制作中

4.2) 親文字列長がルビ文字列長未満の場合

4.2.1) 親文字群が行頭に位置した場合は、ルビ文字列の先頭を行頭に合わせる。ただし、ルビ文字列の先頭を行頭に合わせる代わりに、親文字列の先頭とルビ文字列の先頭をそろえて行頭に合わせてもよい。親文字列の先頭とルビ文字列の先頭を行頭に合わせるオプションは、**4.2.2)** 及び **a) 5.2)** のオプションと同時に使用し、処理系定義とする。**2.2)** の**例 2** 及び **2.3)** の**例 2** を参照のこと。

4.2.2) 親文字群が行末に位置した場合は、ルビ文字列の最後尾を行末に合わせる。ただし、ルビ文字列の最後尾を行末に合わせる代わりに、親文字列の最後尾とルビ文字列の最後尾をそろえて行末に合わせてもよい。親文字列の最後尾とルビ文字列の最後尾を行末に合わせるオプションは、**4.2.1)** 及び **a) 5.2)** のオプションと同時に使用し、処理系定義とする。**2.2)** の**例 2** 及び **2.3)** の**例 2** **==**を参照のこと。

c) **熟語ルビの場合** 熟語ルビの処理は、次による。

1) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群のすべてにおいて、親文字列長がルビ文字列長以上の場合の親文字列とルビ文字列の配置方法は、次による。

1.1) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群のすべてにおいて、親文字列とルビ文字列との配置方法は、**a)**による。

例 ※図版制作中

1.2) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群と親文字群との間は、ベタ組とし、**==.==**の調整対象にはしない。

1.3) 熟語ルビを構成するモノルビがついた 1 つの親文字群を複数行に分割してはならないが、モノルビがついた親文字群と親文字群の間では、複数行に分割してよい。

2) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群のすべてにおいて、親文字列長がルビ文字列長未満の親文字群を含む場合の親文字列とルビ文字列の配置方法は、次による。

2.1) 熟語ルビを行中に配置する場合

- 2.1.1) モノルビがついた親文字群のすべての親文字列を1つにまとめて新たな親文字列とし、モノルビがついた親文字群のすべてのルビ文字列を1つにまとめて新たなルビ文字列とする。
- 2.1.2) 新たな親文字列長が新たなルビ文字列長以上の場合における新たな親文字列と新たなルビ文字列との配置方法は、**b) 1)** 及び **b) 4.1)** による。この方法で配置した新たな親文字群は **=.= =** の調整対象にはしない。
- 2.1.3) 新たな親文字列長が新たなルビ文字列長未満の場合における新たな親文字列と新たなルビ文字列との配置方法は、**b) 2)** 及び **b) 4.2)** による。この方法で配置した新たな親文字群は **=.= =** の調整対象にはしない。
- 2.2) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群と親文字群との間で複数行に分割した場合
 - 2.2.1) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群の内の1つだけが行頭又は行末に位置した場合、その親文字群の親文字列とルビ文字列との配置方法は、**a)** による。
 - 2.2.2) 熟語ルビを構成するモノルビがついた親文字群の内、2つ以上の親文字群が行頭及び行末に位置した場合、それらの親文字群の親文字列とルビ文字列との配置方法は、**2.1)** による。
- 2.3) 熟語ルビの親文字群とその前後に配置する本文文字列との関係は、**a) 3)** による。

例 ※図版制作中

7.9.4 ルビ文字列を両側に配置する場合の処理 縦書きにおいて親文字列の外枠の左側及び右側の両側にルビ文字列を配置する場合、又は横書きにおいて親文字列の外枠の上側及び下側の両側にルビ文字列を配置する場合の処理は、次による。

a) この規格では、次の場合について規定する。また、**7.9.3** の各箇条に規定された各種の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、両側に配置するルビ文字列の両方を許容に従って配置する。

- 1) 両側にモノルビがつく場合。

例 ※図版制作中

- 2) 両側にグループルビがつく場合。

例 ※図版制作中

- 3) 片側にモノルビがついた連続する複数の親文字群の全体に、モノルビの反対側にグループルビがつく場合。

例 ※図版制作中

b) 両側にモノルビがつく場合における親文字と両側のルビ文字列との配置方法は、次による。

- 1) 両側のルビ文字列において、欧文用文字又は連数字のルビ文字列は固有の字幅に応じたピッチ処理を行い、欧文用文字及び連数字以外のルビ文字列はベタ組とし、そのルビ文字列の中心を親文字の中心に合わせて親文字の両側に配置する。
- 2) **1)** によって配置した親文字群が行頭又は行末に位置し、かつ親文字列長が両側のルビ文字列長以上の場合には、行頭においては親文字の先頭を行頭に合わせて配置し、行末においては親文字の最後尾を行末に合わせて配置する。
- 3) **1)** によって配置した親文字群が行頭に位置し、かつ親文字列長が両側又は片側のルビ文字列長未満の場合には、両側のルビ文字列のうちルビ文字列長が長いルビ文字列の先頭を行頭に合わせる。ルビ文字列長が短いルビ文字列の先頭は、行頭に合わせない。ただし、**7.9.3 a) 5.2.1)** の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、ルビ文字列長が親文字列長以上であるすべてのルビ文字列の先頭と親文字の先頭とをそろえて行頭に合わせる。
- 4) **1)** によって配置した親文字群が行末に位置し、かつ親文字列長が両側又は片側のルビ文字列長未満

の場合には、両側のルビ文字列のうちルビ文字列長が長いルビ文字列の最後尾を行末に合わせる。ルビ文字列長が短いルビ文字列の最後尾は、行末に合わせない。ただし、**7.9.3 a) 5.2.2)** の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、ルビ文字列長が親文字列長以上であるすべてのルビ文字列の最後尾と親文字の最後尾とをそろえて行末に合わせる。

- c) 両側にグループルビがつく場合における親文字列と両側のルビ文字列との配置方法は、次による。
- 1) 親文字列長が、両側のルビ文字列長以上の場合は、**7.9.3 b) 1)** に従って親文字列及び両側のルビ文字列を配置する。この配置方法によって両側にグループルビがついた親文字群が行頭又は行末に位置した場合は、**7.9.3 b) 4.1)** に従って配置する。
 - 2) 親文字列長が、両側のいずれか又は両方のルビ文字列長未満の場合は、次による。
 - 2.1) 両側のルビ文字列において、ルビ文字列長が長いほうのルビ文字列及び親文字列を **7.9.3 b) 2)** 及び **7.9.3 b) 4.2)** に従って配置し、その配置した親文字列に対してルビ文字列長が短いほうのルビ文字列を、次に従って配置する。
 - 2.1.1) 配置した親文字列の先頭から最後尾までの長さが、ルビ文字列長が短いほうのルビ文字列長以上の場合は、ルビ文字列長が短いほうのルビ文字列を **7.9.3 b) 1.2)** 又は **7.9.3 b) 1.3)** に従って配置する。
 - 2.1.2) 配置した親文字列の先頭から最後尾までの長さが、ルビ文字列長が短いほうのルビ文字列長未満の場合は、ルビ文字列をベタ組とし、配置した親文字列の先頭から最後尾までの長さの中心にルビ文字列の中心を合わせて配置する。ただし、**2.1)** においてルビ文字列長が長いほうのルビ文字列及び親文字列を **7.9.3 b) 4.2.1)** の許容に従って配置した場合は、ルビ文字列長の短いルビ文字列をベタ組とし、親文字列の先頭とルビ文字列の先頭をそろえて行頭に合わせて配置する。また、**2.1)** においてルビ文字列長が長いほうのルビ文字列及び親文字列を **7.9.3 b) 4.2.2)** の許容によって配置した場合は、ルビ文字列長の短いルビ文字列をベタ組とし、親文字列の最後尾とルビ文字列の最後尾をそろえて行末に合わせて配置する。
 - 2.2) **2.1)** に従って親文字列の両側にグループルビをつけた親文字群とその前後に配置する本文文字列との関係は、**7.9.3 a) 3)** による。
 - 3) **1)** 又は **2)** に従って親文字列の両側にグループルビをつけた親文字群は、複数行に分割してはならず、**=. =** の調整対象とはしない。
- d) 片側にモノルビがついた連続する複数の親文字群の全体に、モノルビの反対側にグループルビがつく場合における親文字列と両側のルビ文字列との配置方法
- 1) 行頭でもなく行末でもない位置での配置方法は、次による。
 - 1.1) 片側に **1.1.1)** 及び **1.1.2)** に従ってモノルビを配置し、そのモノルビがついた複数の親文字群をベタ組で配置する。ここで、**n** 及び **m** は次による。

n : 片側にモノルビがついた連続する複数の親文字群の全体において、先頭の親文字群の先頭から最後尾の親文字群の最後尾までの長さ。

m : 片側にモノルビがついた連続する複数の親文字群の全体において、先頭の親文字群における親文字の先頭から最後尾の親文字群における親文字の最後尾までの長さ。
 - 1.1.1) ルビ文字列は、ベタ組とする。ルビ文字列が欧文用文字又は連数字の場合は、ルビ文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置する。
 - 1.1.2) ルビ文字列の中心を親文字の中心に合わせて配置する。
 - 1.2) **1.1)** によって配置した複数の親文字群の全体に、次のようにグループルビを配置する。

- 1.2.1)** グループルビのルビ文字列長 $< m$ の場合のグループルビの配置は、次による。
- 1.2.1.1)** グループルビのルビ文字列が2文字以上で欧文用文字でもなく連数字でもない場合は、 $xr:yr:zr = 1:2:1$ の比率でルビ文字間を空けてグループルビを配置する。 xr 、 yr 及び zr は、次による。
- xr ：先頭の親文字群における親文字の先頭からルビ文字列の先頭までの空き量。
- yr ：ルビ文字間の空き量。
- zr ：ルビ文字列の最後尾から最後尾の親文字群における親文字の最後尾までの空き量。
- 1.2.1.2)** グループルビのルビ文字列が1文字、欧文用文字又は連数字の場合は、固有の字幅に応じたピッチ処理で配置したルビ文字列の中心を、 m の中心に合わせて配置する。
- 1.2.2)** グループルビのルビ文字列長 $= m$ の場合は、ベタ組としたグループルビの中心を m の中心に合わせて配置する。
- 1.2.3)** $m <$ グループルビのルビ文字列長 $\leq n$ の場合は、ベタ組としたグループルビの中心を n の中心に合わせて配置する。
- 1.2.4)** $n <$ グループルビのルビ文字列長の場合は、グループルビのルビ文字列はベタ組とし、 $XR:YR:ZR = 1:2:1$ の比率で求められた YR の合計値を、隣り合う親文字群と親文字群との間に割り振る。割り振る空き量は、隣り合う親文字群の親文字間の空き量が多いほど少なくし、親文字間の空き量が少ないほど多くして、できるだけ隣り合う親文字群の親文字間の空き量が均等になるようにする。ここで、 XR 、 YR 及び ZR は、次による。
- XR ：グループルビのルビ文字列の先頭から、先頭の親文字群の先頭までの空き量。
- YR ：モノルビがついた親文字群と親文字群との間に割り振る平均の空き量。
- ZR ：最後尾の親文字群の最後尾から、グループルビのルビ文字列の最後尾までの空き量
- 2) 1.1) 及び 1.2)** で配置した複数の親文字群が行頭に位置した場合の配置方法は、次による。
- 2.1)** グループルビのルビ文字列長 $\leq n$ で、先頭の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長以上の場合は、先頭の親文字群における親文字の先頭を行頭に合わせる。
- 2.2)** グループルビのルビ文字列長 $\leq n$ で、先頭の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長未満の場合は、先頭の親文字群におけるモノルビの先頭を行頭に合わせる。ただし、**7.9.3 a) 5.2.1)**の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合には、先頭の親文字群において親文字の先頭とモノルビの先頭とをそろえて行頭に合わせる。
- 2.3)** $n <$ グループルビのルビ文字列長の場合は、グループルビの先頭を行頭に合わせる。ただし、**7.9.3 b) 4.2.1)**の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、次による。この場合、グループルビの配置において、 $YR:ZR = 1:1$ の比率で求められた YR の合計値を、隣り合う親文字群と親文字群との間に割り振る。割り振る空き量は、隣り合う親文字群の親文字間の空き量が多いほど少なくし、親文字間の空き量が少ないほど多くして、できるだけ隣り合う親文字群の親文字間の空き量が均等になるようにする。 YR 及び ZR は、**1.2.4)**による。
- 2.3.1)** 先頭の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長以上の場合は、先頭の親文字群における親文字の先頭とグループルビの先頭とをそろえて行頭に合わせる。
- 2.3.2)** 先頭の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長未満の場合は、先頭の親文字群における親文字の先頭及びモノルビの先頭、並びにグループルビの先頭の3つをそろえて行頭に合わせる。
- 3) 1.1) 及び 1.2)** で配置した複数の親文字群が行末に位置した場合の配置方法は、次による。
- 3.1)** グループルビのルビ文字列長 $\leq n$ で、最後尾の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字

列長以上の場合は、最後尾の親文字群における親文字の最後尾を行末に合わせる。

- 3.2)** グループルビのルビ文字列長 $\leq n$ で、最後尾の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長未満の場合は、最後尾の親文字群におけるモノルビの最後尾を行末に合わせる。ただし、**7.9.3 a) 5.2.1)** の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、最後尾の親文字群において親文字の最後尾とモノルビの最後尾とをそろえて行末に合わせる。
- 3.3)** $n <$ グループルビのルビ文字列長の場合は、グループルビの最後尾を行末に合わせる。ただし、**7.9.3 b) 4.2.2)** の許容を処理系定義のオプションとして提供する場合は、次による。この場合、グループルビの配置において、 $XR:YR=1:1$ の比率で求められた YR の合計値を、隣り合う親文字群と親文字群との間に割り振る。割り振る空き量は、隣り合う親文字群の親文字間の空き量が多いほど少なくし、親文字間の空き量が少ないほど多くして、できるだけ隣り合う親文字群の親文字間の空き量が均等になるようにする。 XR 及び YR は、**1.2.4)** による。
- 3.3.1)** 最後尾の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長以上の場合は、最後尾の親文字群における親文字の最後尾とグループルビの最後尾とをそろえて行末に合わせる。
- 3.3.2)** 最後尾の親文字群において親文字列長がモノルビのルビ文字列長未満の場合は、最後尾の親文字群における親文字の最後尾及びモノルビの最後尾、並びにグループルビの最後尾の3つをそろえて行末に合わせる。

7.10 添え字処理 添え字処理は、次による。ただし、数式などに見られる入れ子になった添え字処理は、規定しない。

- a)** 添え字文字列の文字サイズ及び親文字に対する添え字文字列の上下位置については、処理系定義とする。
- b)** 添え字は、親文字の右側及び/又は左側に一つ又は二つの添え字列をつける。
- c)** 横書きの行中では、添え字列の位置は親文字の外枠の右側及び/又は左側とし、上付き文字の場合は親文字の外枠の右側上部及び/又は左側上部に、下付きの場合は親文字の右側下部及び/又は左側下部に、添え字列を横書きでピッチ処理して配置する。また、親文字と添え字の字間はベタ組とする。

なお、親文字の右側及び/又は左側に複数の添え字をつける場合は、添え字を含む親文字群の文字の出現した順に、それぞれの文字を横書きでピッチ処理して配置する。

例 PO_4^{3-}

ただし、右側につく上付き文字及び下付き文字を同位置につける指定があった場合は、親文字と右側につく二つの添え字との字間をともにベタ組にする。また、左側につく上付き文字及び下付き文字を同位置につける指定があった場合は、親文字と左側につく二つの添え字との字間をともにベタ組にする。

例 D3 h

- d)** 縦書きの行中では、添え字を含む親文字群の文字の向きを右回りに 90° 回転して横書きにする。

例1. 望ましい例 ※図版制作中

例2. 望ましくない例 ※図版制作中

ただし、添え字を含む親文字群の長さが短い場合は、縦中横を使用して配置してもよい。

- e)** 添え字を含む親文字群中の文字の字間は、分離も分割もしてはならない。

7.11 圏点処理 圏点処理は、次による。

- a) 圏点の文字サイズは、親文字の文字サイズの 1/2 とする。
- b) 圏点は、親文字 1 文字に 1 文字だけつける。
- c) 圏点の位置は、縦書きでは親文字の外枠の右側とし、横書きでは親文字の外枠の上部とし、親文字の外枠に接した中心に配置する。
- d) 圏点がついた親文字列は、元の親文字の文字クラスに従う。
- e) 圏点クラスの文字種は、JIS X 4052 の附属書（規定）による。

7.12 下線・傍線・抹消線処理 下線・傍線・抹消線処理は、次による。

- a) 下線・傍線処理 下線・傍線処理は、指定により、横書きの場合は文字又は親文字群の下又は上に、縦書きの場合は文字又は親文字群の右又は左に、文字又は親文字群の大きさに合わせた長さだけ指定の線を引く。
- b) 抹消線処理 抹消線処理は、指定により、横書きの場合は文字又は親文字群の外枠の上下中央に、縦書きの場合は文字又は親文字群の外枠左右中央に、文字又は親文字群の大きさに合わせた長さだけ指定の線を引く。

7.13 割注処理 割注処理は、次による。

- a) 割注文字列の文字サイズは、指定による。
- b) 割注文字列は、7.1 = ~7.8 = に従って配置する。
- c) 割注は、割注文字列長の半分に最も近い割注文字列の分割可能点を割注文字列の分割点として、割注行 1 行目と割注行 2 行目とに分割し、割注行 2 行目の割注行頭位置を、割注行 1 行目の割注行頭位置にそろえて配置する。

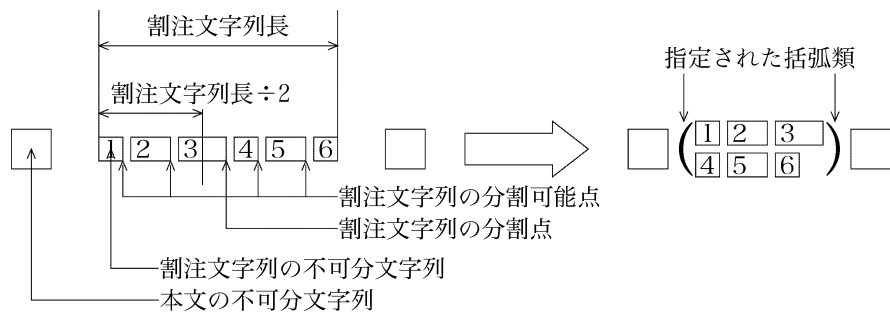


図 16 割注文字列の分割

- d) 1 行の中に割注が収まらない場合には、指定行長内に収まる位置を行の分割点として、割注を行に分割する（図 17 参照）。

なお、割注文字列が多い場合には、中部の割注を更に 2 行以上に分割することもある。

- e) 割注に括弧類をつけるか又は空きを入れるかは、指定による。指定された場合は、次の 1) 又は 2) に従い、指定された括弧類又は空き量を含めて割注という。
 - 1) 割注に括弧類をつけるように指定された場合は、次の 1.1) ~1.8) に従って、割注始め括弧類及び割注終わり括弧類を付ける。
 - 1.1) 割注始め括弧類は、割注行の前に、割注行 1 行目及び割注行 2 行目の全体を囲むようにつける。
 - 1.2) 割注終わり括弧類は、割注行の後ろに、割注行 1 行目及び割注行 2 行目の全体を囲むようにつける。

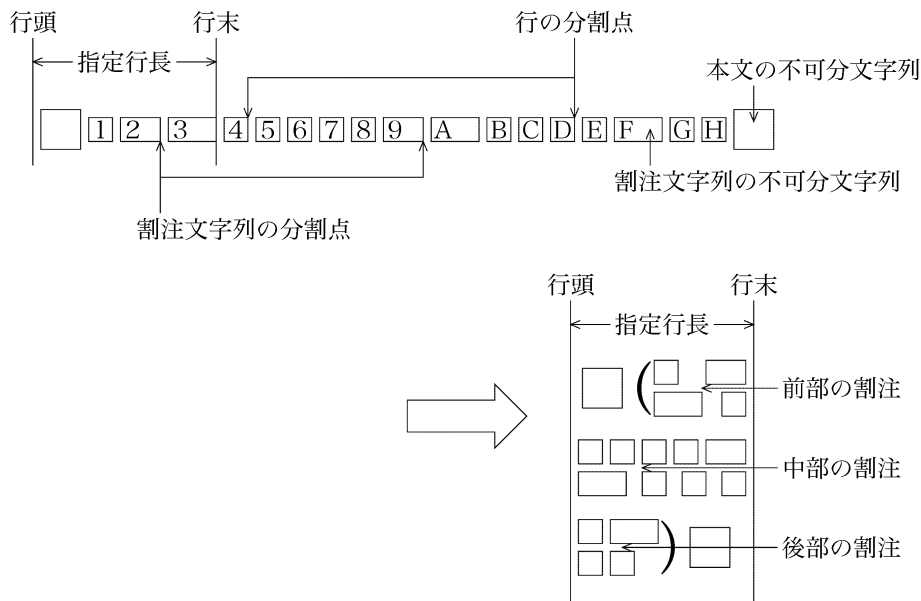


図 17 割注の行の分割

- 1.3) 割注始め括弧類と割注終わり括弧類とは、同種の括弧を使う。
- 1.4) 割注始め括弧類及び割注終わり括弧類の、文字サイズ及び字幅は、指定による。
- 1.5) 割注始め括弧類及び割注終わり括弧類と割注行との間は、ベタ組とする。
- 1.6) 割注始め括弧類と割注の前の文字との間、及び割注終わり括弧類と割注の後ろの文字との間は、ベタ組とする。
- 1.7) 行に分割した割注における前部の割注及び中部の割注には、割注終わり括弧類をつけない。
- 1.8) 行に分割した割注における中部の割注及び後部の割注には、割注始め括弧類をつけない。
- 2) 割注に空きを入れるように指定された場合は、次の 2.1) ~2.8) に従って、割注始め空き量及び割注終わり空き量を入れる。
 - 2.1) 割注始め空き量は、割注行の前に、割注行 1 行目及び割注行 2 行目の両方に入れる。
 - 2.2) 割注終わり空き量は、割注行の後ろに、割注行 1 行目及び割注行 2 行目の両方に入れる。
 - 2.3) 割注始め空き量と割注終わり空き量とは、指定された同量の空き量とする。指定された空き量は、0 以上とする。
 - 2.4) 割注始め空き量及び割注終わり空き量と割注行との間は、ベタ組とする。
 - 2.5) 割注が行頭から始まるときは、割注始め空き量を入れない。
 - 2.6) 割注が行末で終わるときは、割注終わり空き量を入れない。
 - 2.7) 行に分割した割注における前部の割注及び中部の割注には、割注終わり空き量を入れない。
 - 2.8) 行に分割した割注における中部の割注及び後部の割注には、割注始め空き量を入れない。
- f) 割注行 1 行目と割注行 2 行目の間の行間は、空けない。
- g) 行送り方向の割注の配置位置は、割注行 1 行目と割注行 2 行目の行の幅を合計した中心及び割注始め括弧類並びに割注終わり括弧類の外枠の中心を、その段落で指定された文字サイズの外枠の中心にそろえる。
- h) 割注は、7.15 の (1), (3) 又は (4) に従った行の調整を行った後、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに 7.15 (5) の割注行の調整を行う。

7.14 文字の位置調整処理

7.14.1 字詰め方向の位置調整処理 そろえ指定、文字間の空き量指定、字取り指定又は字送り指定による字詰め方向の文字の配置方法は、次による。

a) **そろえ処理** そろえ指定による文字の配置方法は、次による。

- 1) **中央そろえ** 中央そろえは、表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組とし、行頭側と行末側の空き量が均等になるように行の中央に配置する。
- 2) **行頭そろえ** 行頭そろえは、行頭側から表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組とし、1 行に満たないときは行末側を空ける。
- 3) **行末そろえ** 行末そろえは、行末側に表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組とし、1 行に満たないときは行頭側を空ける。
- 4) **均等割り** 均等割りは、行頭及び行末に文字がぴったり組まれるように字間を 7.15 の方法で調整する。表 5 の延ばし可能条件に合致する箇所が一つもない文字列だけであった場合には、行頭側及び行末側を均等に空ける。

b) **文字間の空き量処理** 文字間の空き量指定による隣接する文字の配置方法は、次による。

- 1) 指定した空き量が負（－）の場合は、その指定した空き量だけ隣接する文字の外枠を重ねて配置する。

ただし、隣接する文字間に表 3 の空き量を挿入する場合は、和文と欧文用文字との間の空き量及び和文と連数字との間の空き量を除き、次の式で新たな空き量を算出する。

$$\text{新たな空き量} = (\text{表 3 の空き量}) - (\text{文字間の空き量の指定値})$$

新たな空き量が負（－）の場合は、その新たな空き量だけ隣接する文字を重ねて配置する。新たな空き量が正（＋）の場合は、その新たな空き量を隣接する文字間に挿入し、文字を配置する。和文と欧文用文字との間の空き量及び和文と連数字との間の空き量は、文字間の空き量指定に関わらず、四分アキとする。

- 2) 指定した空き量が正（＋）の場合は、その指定した空き量を隣接する文字の字間の空き量として挿入し、文字を配置する。

ただし、隣接する文字間に表 3 の空き量を挿入する場合は、次の式で算出した新たな空き量を挿入する。

$$\text{新たな空き量} = (\text{表 3 の空き量}) + (\text{文字間の空き量の指定値})$$

c) **字取り処理** 字取り指定による隣接する文字の配置方法は、字取り指定をした文字列の中で表 4 の分割可能条件に合致した箇所に、次の式で算出した分割可能箇所の空き量を挿入し、文字を配置する。

$$\text{分割可能箇所の空き量} = [(\text{字取り指定長}) - (\text{字取り文字列長})] \div (\text{分割可能箇所数})$$

ここで、字取り指定長及び字取り文字列長は、次による。

字取り指定長：字取り文字列を配置する、字取り指定で指定した字詰め方向の長さ。

字取り文字列長：字取り文字列を指定の文字サイズで、表 3 の空き量を挿入する以外はベタ組で配置したときの字取り文字列の先頭から最後尾までの長さ。

ただし、分割可能条件と合致する箇所が 1 つもない字取り文字列の場合には、字取り文字列の先頭文字を字取り指定長の先頭に接して配置し、字取り指定長と字取り文字列長との差は、字取り文字列の末尾文字の後に空ける。

7.14.2 行方向の位置調整処理 行送り方向の位置調整処理は、次による。

a) **文字そろえ指定による位置調整** 隣接する文字において、文字そろえ指定による行送り方向の文字の

配置方法は、次による。

- 1) 縦書きの場合
 - 1.1) 文字そろえ指定で **middle** を指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を、文字の並びの縦軸に平行な直線上に配置する。
 - 1.2) 文字そろえ指定で右そろえを指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の右端を、文字の並びの縦軸に平行な直線上に配置する。
 - 1.3) 文字そろえ指定で左そろえを指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の左端を、文字の並びの縦軸に平行な直線上に配置する。
 - 1.4) 文字そろえ指定で行送り方向の移動量を指定した場合
 - 1.4.1) 指定した移動量が正 (+) の場合には、前後の文字の外枠の中心線に対して、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を指定された量だけ左に寄せる。
 - 1.4.2) 指定した移動量が負 (-) の場合には、前後の文字の外枠の中心線に対して、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を指定された量だけ右に寄せる。
 - 1.5) 文字そろえ指定で **baseline** を指定した場合には、指定対象の文字列に含まれる欧文用文字の欧文ベースラインを処理系により定義された欧文ベースラインの位置にそろえて配置する。
- 2) 横書きの場合
 - 2.1) 文字そろえ指定で **middle** を指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を、文字の並びの横軸に平行な直線上に配置する。
 - 2.2) 文字そろえ指定で上そろえを指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の上端を、文字の並びの横軸に平行な直線上に配置する。
 - 2.3) 文字そろえ指定で下そろえを指定した場合には、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の下端を、文字の並びの横軸に平行な直線上に配置する。
 - 2.4) 文字そろえ指定で行送り方向の文字列の移動量を指定した場合には、次による。
 - 2.4.1) 指定した移動量が正 (+) の場合には、前後の文字の外枠の中心線に対して、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を指定された量だけ下に寄せる。
 - 2.4.2) 指定した移動量が負 (-) の場合には、前後の文字の外枠の中心線に対して、その対象となる文字列の個々の文字に指定された文字サイズの外枠の中心を指定された量だけ上に寄せる。
 - 2.5) 文字そろえ指定で **baseline** を指定した場合には、指定対象の文字列に含まれる欧文用文字の欧文ベースラインを処理系により定義された欧文ベースラインの位置にそろえて配置する。
- b) 欧文ベースライン調整指定による位置調整 欧文ベースライン調整指定で行送り方向の欧文ベースライン調整量を指定した場合の欧文用文字の配置方法は、次による。
 - 1) 縦書きの場合
 - 1.1) 指定した欧文ベースライン調整量が正 (+) の場合には、**7.1 a)** 又は **7.14.2 a) 1)** により配置した欧文ベースラインに対し、指定した欧文ベースライン調整量だけ行送り方向で左側に離れた直線を新たな欧文ベースラインとして欧文用文字を配置する。
 - 1.2) 指定した欧文ベースライン調整量が負 (-) の場合には、**7.1 a)** 又は **7.14.2a) 1)** により配置した欧文ベースラインに対し、指定した欧文ベースライン調整量だけ行送り方向で右側に離れた直線を新たな欧文ベースラインとして欧文用文字を配置する。
 - 2) 横書きの場合
 - 2.1) 指定した欧文ベースライン調整量が正 (+) の場合には、**7.1 a)** 又は **7.14.2 a) 2)** により配置し

た欧文ベースラインに対し、指定した欧文ベースライン調整量だけ行送り方向で下側に離れた直線を新たな欧文ベースラインとして欧文用文字を配置する。

- 2.2) 指定した欧文ベースライン調整量が正 (+) の場合には、**7.1 a)** 又は **7.14.2 a) 2)** により配置した欧文ベースラインに対し、指定した欧文ベースライン調整量だけ行送り方向で上側に離れた直線を新たな欧文ベースラインとして欧文用文字を配置する。

7.15 行の調整処理 行の調整処理は、次による。空き量に対応する文字は、**表 3**による。

割注行 1 行目の長さや割注行 2 行目の長さやとを比較し、長さが等しい場合は割注行 1 行目を、長さが等しくない場合は長いほうの割注行を長い割注行という。長い割注行以外の割注行を短い割注行という。

- a)** 指定行長より行長が長く、詰め処理によって行を調整する場合には、次の順に詰める。ただし、割注文字列を対象としない。

なお、割注処理において、割注文字列を **7.1**~**7.8** に従って配置し、割注行 1 行目と割注行 2 行目とに分割するときには、処理系定義によって詰め処理を行ってもよい。

- 1) 欧文間隔を、最小で四分アキまで文字サイズ比で均等に詰める。
 - 2) 中点類の前後の四分アキを、最小でベタ組まで文字サイズ比で均等に詰める。
 - 3) 始め括弧類の前側及び終わり括弧類の後ろ側の二分アキを、最小でベタ組まで文字サイズ比で均等に詰める。
 - 4) 和文と欧文用文字との間の四分アキ、和文と連数字との間の四分アキ及び和文と単位記号との間の四分アキを、最小で八分アキまで文字サイズ比で均等に詰める。
 - 5) **1)**, **2)**, **3)** 及び **4)** による詰め処理の後、その行内に含まれているすべての割注について、個々の割注ごとに **e)** の割注行の調整を行う。
- b)** 割注を含まない行で指定行長より行長が短く、延ばし処理によって行を調整する場合、又は割注行の延ばし処理の場合には、次の順に空ける。ただし、段落最終行の行長が指定行長より短い場合、その段落最終行についてはこの延ばし処理を行わない。
- 1) 欧文間隔を、最大で二分アキまで文字サイズ比で均等に空ける。
 - 2) 和文と欧文用文字との間の空き量、和文と連数字との間の空き量及び和文と単位記号との間の空き量を、最大で二分アキまで文字サイズ比で均等に空ける。ただし、この処理は、処理系定義により行わないことにしてもよい。
 - 3) **7.1.4** の延ばし可能条件に合致した箇所の字間を、最大で四分アキまで文字サイズ比で均等に空ける。
 - 4) **1)**, **2)** 及び **3)** によって調整できない場合は、**1)**, **2)** 及び **3)** の空き量に加えて、**7.1.3** の分割可能条件に合致した分割可能文字間を均等に空ける。ただし、分割可能文字間に加えて欧文用文字の字間を含め、均等に空けるかどうかは処理系定義とする。
- c)** 割注を含む行で指定行長より行長が短く、延ばし処理によって行を調整する場合には、その行内の割注以外の本文文字列及び長い割注行を対象に、**b)** に従い延ばし処理を行う。この延ばし処理の後、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに **e)** の割注行の調整を行う。ただし、段落最終行の行長が指定行長より短い場合、その段落最終行についてはこの延ばし処理を行わず、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに **e)** の割注行の調整を行う。
- d)** 指定行長と行長とが等しい場合、その行については詰め処理による行の調整も、延ばし処理による行の調整も行わず、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに **e)** の割注行の調整を行う。
- e)** **a)**, **c)** 又は **d)** のいずれかによる行の調整の後、その行内に含まれるすべての割注について、個々の

割注ごとに、次の **1)**、**2)** 又は **3)** のいずれかによる割注行の調整を行う。

- 1) 行に分割した割注における前部の割注及び中部の割注の場合は、短い割注行について **b)** によって延ばし処理を行い、当該割注に割り振られた **c)** の延ばし量を含めた長い割注行の長さに合わせる。
- 2) 行に分割した割注における後部の割注又は行に分割しなかった割注で、かつ割注行 1 行目が短い割注行の場合は、割注行 1 行目を **b)** に従い延ばし処理を行い、当該割注に割り振った **c)** の延ばし量を含めた割注行 2 行目の長さに合わせる。
- 3) 行に分割した割注における後部の割注又は行に分割しなかった割注で、かつ割注行 1 行目が長い割注行の場合は、当該割注に割り振った **c)** の延ばし量の総量分だけ、割注行 2 行目を **b)** に従い延ばし処理を行う。

7.16 タブ処理 タブ処理は、タブ処理対象文字列を設定されたタブ属性に応じて配置する。設定されたタブ属性は、次に設定又は解除されるまで有効とする。

7.16.1 タブ属性 タブ属性は、タブ種、タブ位置及び指定文字とする。

横書きのタブ種は、左そろえタブ、右そろえタブ、中央そろえタブ及び指定文字そろえタブとする。縦書きのタブ種は、上そろえタブ、下そろえタブ、中央そろえタブ及び指定文字そろえタブとする。

タブ位置は、行頭からの距離で指定する。

指定文字は、タブ種が指定文字そろえタブの場合に、タブ位置に合わせて配置するタブ処理対象文字列中の特定の文字（列）とする。

- a) **左（上）そろえタブ** タブ処理対象文字列の先頭をタブ位置に合わせて配置する指定。
- b) **右（下）そろえタブ** タブ処理対象文字列の最後尾をタブ位置に合わせて配置する指定。
- c) **中央そろえタブ** タブ処理対象文字列の中心をタブ位置に合わせて配置する指定。
- d) **指定文字そろえタブ** タブ処理対象文字列の中の指定文字（列）の先頭をタブ位置に合わせて配置する指定。

7.16.2 タブ処理対象文字列の配置法 行頭から順番に、タブ属性と対応をとってタブ処理対象文字列を、**7.1～7.15** に従って配置する。タブ処理対象文字列が行の最初の文字列であれば、行頭に一番近いタブ位置にあるタブ属性がそのタブ処理対象文字列に対応する。タブ処理対象文字列が行の 2 番目以降の文字列である場合には、直前の文字列の最後尾以降にある最初のタブ属性が対応する。

例	↓	↓	↓	↓	左そろえタブ位置
	A A	B B B B B B B B	C		
	D D D	E E	F F F	G G G G	

e) タブ処理対象文字列に対応するタブ属性がある場合、次のように配置する。

- 1) **左（上）そろえタブ** タブ処理対象文字列の先頭をタブ位置に合わせて配置する。

例1. 左そろえタブ（横書き）

タブ位置

↓

1.23

123.45

例2. 上そろえタブ（縦書き）


```

一  ←タブ位置
二  一
三  二
四  三
五

```

タブ処理対象文字列の先頭が重なることはない。

2) 右 (下) そろえタブ タブ処理対象文字列の最後尾をタブ位置に合わせて配置する。

例1. 右そろえタブ (横書き)

```

      タブ位置
      ↓
    1.23
   123.45

```

例2. 下そろえタブ (縦書き)

```

一
二
三  ←   タブ位置
四  一
五  二
      三

```

タブ処理対象文字列の先頭が、直前の文字列と重なる場合には、タブ処理対象文字列を直前の文字列の最後尾に続けて配置する。

```

例      ↓      ↓      ↓      ↓
      A A B B B B B B B B C   D D D
      E E   F F F   G G G G   H H

```

3) 中央そろえタブ タブ処理対象文字列の中心をタブ位置に合わせて配置する。

例1. 中央そろえタブ (横書き)

```

      タブ位置
      ↓
    1.23
   123.45

```

例2. 中央そろえタブ (縦書き)

```

一
二
三  ←   タブ位置
四  一
五  二
      三

```

タブ処理対象文字列の先頭が、直前の文字列と重なる場合には、タブ処理対象文字列を直前の文字列の最後尾に続けて配置する。

```

例      ↓      ↓      ↓      ↓
      A A B B B B B B B B C   D D D
      E E   F F F   G G G G   H H

```

4) 指定文字そろえタブ タブ処理対象文字列の中の指定文字 (列) の先頭をタブ位置に合わせて配置

する。

例1. 指定文字そろえタブ（横書き）指定文字：.

タブ位置
↓
1.23
123.45
12345

例2. 指定文字そろえタブ（縦書き）指定文字：.

タブ位置
↓
1.23
123.45
12345

タブ処理対象文字列の先頭が、直前の文字列と重なる場合には、タブ処理対象文字列を直前の文字列の最後尾に続けて配置する。

例 ↓ ↓ ↓ ↓
 12.341, 234, 678, 345. 567 56.789
 345.897 5,367.678 23.56 3.67

f) タブ処理対象文字列に対応するタブ属性がない場合は、次行の先頭タブから順番に対応をとって配置する。

例 ↓ ↓ ↓ 左そろえタブ位置
 A A B B B B B B B
 C
 D D D E E F F F

7.17 囲み文字処理 囲み文字処理は、次による。

- a)** 囲み文字は、外枠文字及び内部文字で構成する。
- b)** 囲み文字の文字サイズ及び書体は、指定による。
- c)** 外枠文字の文字種は、表 1 に規定する丸印又は四角とする。これ以外の文字種の指定は、処理系定義とする。

表 1 外枠文字の文字種

X 0221-1	ブロック名	名前	X 0213 の面区点番号	日本語通用名称（参考）	字形
25CB	GEOMETRIC SHAPE	WHITE CIRCLE	1-1-90	丸印	○
25A1	GEOMETRIC SHAPE	WHITE SQUARE	1-2-2	四角	□

- d)** 内部文字は、半角 1 文字、半角 2 文字又は全角 1 文字とする。
- e)** 内部文字の字面は外枠文字の字面よりはみ出してはならない。また、内部文字の字面と外枠文字の字面との天地及び左右の中心をそろえる。ただし、内部文字の文字サイズ及び配置方法は、処理系依存とする。
- f)** 囲み文字の文字クラスは、漢字と同じ文字クラスとする。

7.18 結合文字処理 結合文字処理は、次による。

- g) 結合文字処理では、基底文字一つとそれに続く連続するすべての結合文字からなる結合文字の合成列を処理する。
- h) 合成列に対応する字形が指定された書体に準備されている場合は、この字形を用いる。
- i) 合成列に対応する字形がない場合は、基底文字と結合文字を次のように合成する。
 - 1) 結合文字のもっている位置属性に従い、基底文字又はすでに合成した合成列の上、下、右上、左下などに配置する（JIS X 0221-1 の 24. [結合文字] 参照）。基底文字の直後に複数の結合文字が連続する場合は、基底文字の直後に続く結合文字の順序に従い、結合文字を一つずつ基底文字又はすでに合成した合成列と組み合わせる。

例 上に位置する結合文字が二つある場合には、二つ目を一つ目の上に配置する。

- 2) 結合文字は、基底文字の大きさに合わせて配置することが望ましい。

例 大文字の ‘A’の上にくる結合文字は、小文字の ‘a’の上にくる結合文字より高く配置する。

- 3) 基底文字が斜体の場合は、斜めになっている基底文字の縦軸に合わせて結合文字の位置をずらすことが望ましい。

例 *Tökyö Français smårgasbord* (スウェーデン語)

- 4) ‘i’及び ‘j’の上に結合文字を配置する場合は、基底文字の点を削除するのがよい。

例 *bīru ĵus* (エスペラント)

7.19 具体字形処理 具体字形処理は、次による。

- a) 具体字形の表示 具体字形の指定があった場合は、指定された具体字形データに置換して表示する。ただし、具体字形データを表示できない処理系の場合は、指定された文字列を表示する。
具体字形データのデータ領域、データ領域内の具体字形ボディーの位置及び具体字形ボディーの大きさは、指定による。
- b) 具体字形の大きさ・位置 具体字形の大きさ及び位置は、次による。
 - 1) 文字の正立方向の具体字形ボディーの大きさは、具体字形の指示が出現した時点で指示されている文字サイズとする。
 - 2) 置換した具体字形データは、具体字形の指示が出現した時点で指示されている文字サイズにおけるトップセンタとそろえて配置する。指定により、これ以外の配置にしてもよい。
- c) 具体字形の文字クラス 具体字形の文字クラスは、漢字と同じ文字クラスとする。指定により、これ以外の文字クラスとしてもよい。

8. 行組版モデル

8.1 文字の組版属性

8.1.1 文字クラス 文字を、字幅、字間及び禁則条件による分割可能性によって、表 2 のとおりクラス分けする。(1) 始め括弧類、(2) 終わり括弧類、(5) 中点類及び (6) 句点類は、字幅を半角として扱う。

表 2 = 文字クラス

文字クラス	横書き用文字
(1) 始め括弧類	““((([{<<[[[【
(2) 終わり括弧類	,,’”)]]}}]》】
(3) 行頭禁則和字	ヽゞ>ゞターあいうえおつやゆよわ アイウエオツヤユヨワカケ
(4) 区切り約物	?!

(5) 中点類	・ ; ;
(6) 句点類	。・
(7) 分離禁止文字	—……
(8) 前置省略記号	¥ \$ £
(9) 後置省略記号	° ' " %‰ ¢
(10) 和字間隔	
(11) 平仮名	あいう …… ん
(12) (1) ~ (11) 以外の和字	
(13) 添え字付き親文字群中の文字	
(14) ルビ付き親文字群中の文字	
(15) 連数字中の文字	
(16) 単位記号中の文字	
(17) 欧文間隔	
(18) 欧文間隔以外の欧文用文字	
(19) 割注始め括弧類	([[
(20) 割注終わり括弧類)]]

【縦書き用文字】 入る

備考1. (15) 連数字中の文字とは、連数字として扱われる連続した数字及び小数点のピリオド、並びに位取りのコンマ及び空白をいう。

2. (16) 単位記号中の文字とは、JIS Z 8202 に規定される単位記号をいう。片仮名単位字を含む全角単位字及び JIS X 0208 における単位記号は、この規格では省略記号として扱う。

3. (19) 割注始め括弧類とは、割注を囲む始め括弧類及び割注の前側の空きをいう。

4. (20) 割注終わり括弧類とは、割注を囲む終わり括弧類及び割注の後ろ側の空きをいう。

5. ここに挙げた文字以外を、それぞれの文字クラスに追加するか否かは、処理系定義とする。

6. 行頭禁則和字の長音記号及びよう（拗）促音を含む仮名の小文字を、行頭禁則和字から外すことは、処理系定義とする。行頭禁則和字からはずしたよう（拗）促音を含む平仮名の小文字は、平仮名の文字クラスとする。

7. 各文字クラスに属する文字を、その文字クラスの文字として扱わない場合、その指定方法及び扱い方は、処理系定義とする。

8.1.2 空き量 文字間の空き量は、表 3 のとおりとする。

表 3 = 空き量

※表制作中

備考1. 【略】

2. 段落の始まり、行頭及び割注行頭と始め括弧類 (1) との間に二分アキを入れるか否か、終わり括弧類 (2) と行末及び割注行末との間に二分アキを入れるか否か、並びに中点類 (5) と行末及び割注行末との間に四分アキを入れるか否かは、処理系定義とする。

参考 空き量に対応する文字を設定しているのは、同一行中の異サイズ混植のためである。

8.1.3 分割可能条件 文字間の分割が可能かどうかは、表 4 による。

表 4 = 分割可能条件

※表制作中

備考1. 【略】

- 連数字中の文字（15）の次に欧文間隔以外の欧文用文字（18）が続く場合、連数字中の文字（15）と欧文間隔以外の欧文用文字（18）との間を分割可とするか否かは、処理系定義とする。

8.1.4 延ばし可能条件 文字間の延ばしが可能かどうかは、表 5 による。

表 5 = 延ばし可能条件

※表制作中

備考1. 【略】

- 連数字中の文字（15）の次に欧文間隔以外の欧文用文字（18）が続く場合、連数字中の文字（15）と欧文間隔以外の欧文用文字（18）との間を延ばし可とするか否かは、処理系定義とする。
- 欧文間隔以外の欧文用文字（18）の字間を、延ばし可とするか否かは、処理系定義とする。

8.2 行の構成アルゴリズム この規格に適合する処理系では、ここで規定する行の構成アルゴリズムとは異なったアルゴリズム及び処理方法で行の構成を行ってもよい。ただし、ここで規定する行の構成アルゴリズムによって処理した場合と同一の処理結果が得られなければならない。

参考 行の構成アルゴリズム例を、**附属書 = (参考 1) =** に示す。

8.2.1 処理の流れ 行組版処理の流れを、図 18 に示す。

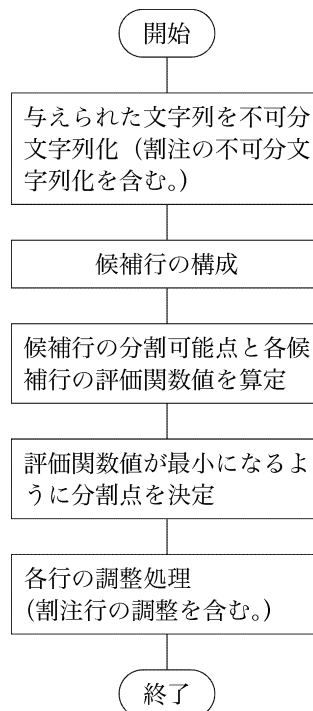


図 18 処理の流れ

8.2.2 割注文字列を除いた本文文字列の不可分文字列化 8.1.3 に従って、分割できない本文文字列を一つの不可分文字列とし、文字列全体を不可分文字列に分ける（図 19 参照）。

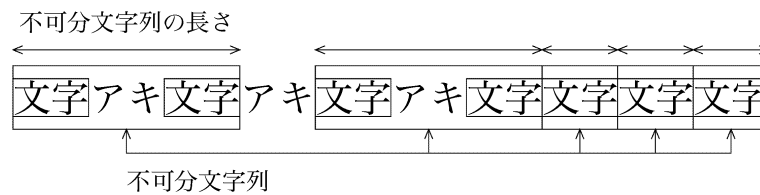


図 19 不可分文字列化

8.2.3 割注の不可分文字列化 割注は、次の順に不可分文字列に分ける。

- a) 8.1.3 に従って、分割できない割注文字列を一つの不可分文字列とし、割注文字列全体を不可分文字列に分ける。
- b) 割注文字列長の半分に最も近い割注文字列の分割可能点を、割注文字列の分割点として割注行 1 行目及び割注行 2 行目に分割し、指定された割注始め括弧類及び割注終わり括弧類、又は割注始め空き量及び割注終わり空き量を加え、行に分割しない割注とする (図 19 参照)。a) で作った不可分文字列の数が 8 個未満の場合は、すべて行に分割しない割注とする。このようにして作った割注と割注の前後の文字との分割の可否を 8.1.3 に従って判定し、分割可となる文字までを一つの不可分文字列とする。
- c) a) で作った不可分文字列の数が 8 個以上の場合には、b) で作った行に分割しない割注に加えて、次の不可分文字列化も行う。
 - 1) 割注文字列の先頭から 4 番目以降で、かつ最後から 4 番目以前の分割可能点すべてを行の分割可能点として割注を行に分割し、割注文字列の先頭から行の分割可能点までの割注文字列長を求める。求めた割注文字列長の半分に最も近い割注文字列の分割可能点を、割注文字列の分割点として割注行 1 行目及び割注行 2 行目に分割し、指定された割注始め括弧類又は割注始め空き量を加え、前部の割注とする (図 20 参照)。このようにして作った前部の割注とその割注の前の文字との分割の可否を 8.1.3 に従って判定し、分割可となる文字までを一つの不可分文字列とする。
 - 2) 1) で行の分割可能点とした割注文字列の分割可能点の後ろに続く割注文字列それぞれについて割注文字列長を求め、その半分に最も近い割注文字列の分割可能点を、割注文字列の分割点として割注行 1 行目及び割注行 2 行目に分割し、指定された割注終わり括弧類又は割注終わり空き量を加え、後部の割注とする (図 20 参照)。このようにして作った後部の割注とその割注の後ろの文字との分割の可否を 8.1.3 に従って判定し、分割可となる文字までを一つの不可分文字列とする。

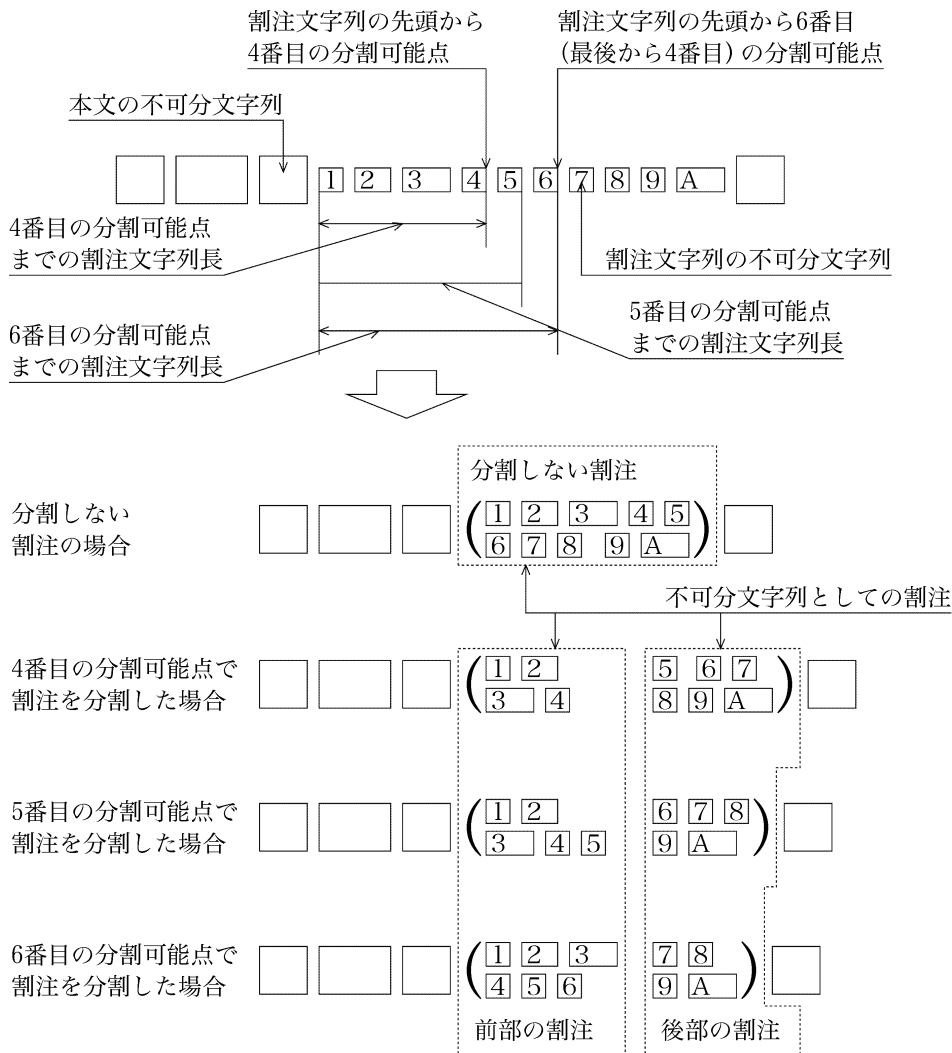


図 20 割注を 2 行に分割する場合の不可分文字列化

- 3) 1) で行の分割可能点とした割注文字列の分割可能点の後ろに続く割注文字列それぞれについて、不可分文字列の数が 8 個以上の場合には、2) で作った後部の割注に加えて、次の不可分文字列化も行う。
- 3.1) 1) で行の分割可能点とした割注文字列の分割可能点の後ろに続く割注文字列の先頭から 4 番目以降で、かつ最後から 4 番目以前の分割可能点すべてを行の分割可能点として割注を行に分割し、1) で行の分割可能点とした割注文字列の分割可能点の後ろに続く割注文字列の先頭から、行の分割可能点までの割注文字列長を求める。求めた割注文字列長の半分に最も近い割注文字列の分割可能点を割注文字列の分割点として、割注行 1 行目及び割注行 2 行目に分割し中部の割注とする。このようにして作った中部の割注を、それぞれ一つの不可分文字列とする (図 22 参照)。
- 3.2) 3.1) で作った中部の割注の不可分文字列の数が 8 個以上の場合には、中部の割注の割注文字列について、先頭から 4 番目以降で最後から 4 番目以前の分割可能点すべてを行の分割可能点として中部の割注を行に分割し、中部の割注の割注文字列の先頭から行の分割可能点までの割注文字列長、及び行の分割可能点から中部の割注の最後までの割注文字列長をそれぞれ求める。行の分割可能点で行に分割した中部の割注文字列それぞれについて、求めた割注文字列長の半分に最も近

い割注文字列の分割可能点を割注文字列の分割点として、割注行 1 行目及び割注行 2 行目に分割しそれぞれ中部の割注とする。ここで作った中部の割注の割注文字列について、不可分文字列の数が 8 個以上の場合には、不可分文字列の数が 8 個以下になるまでこの 3.2) を繰り返す。このようにして作った中部の割注を、それぞれ一つの不可分文字列とする。

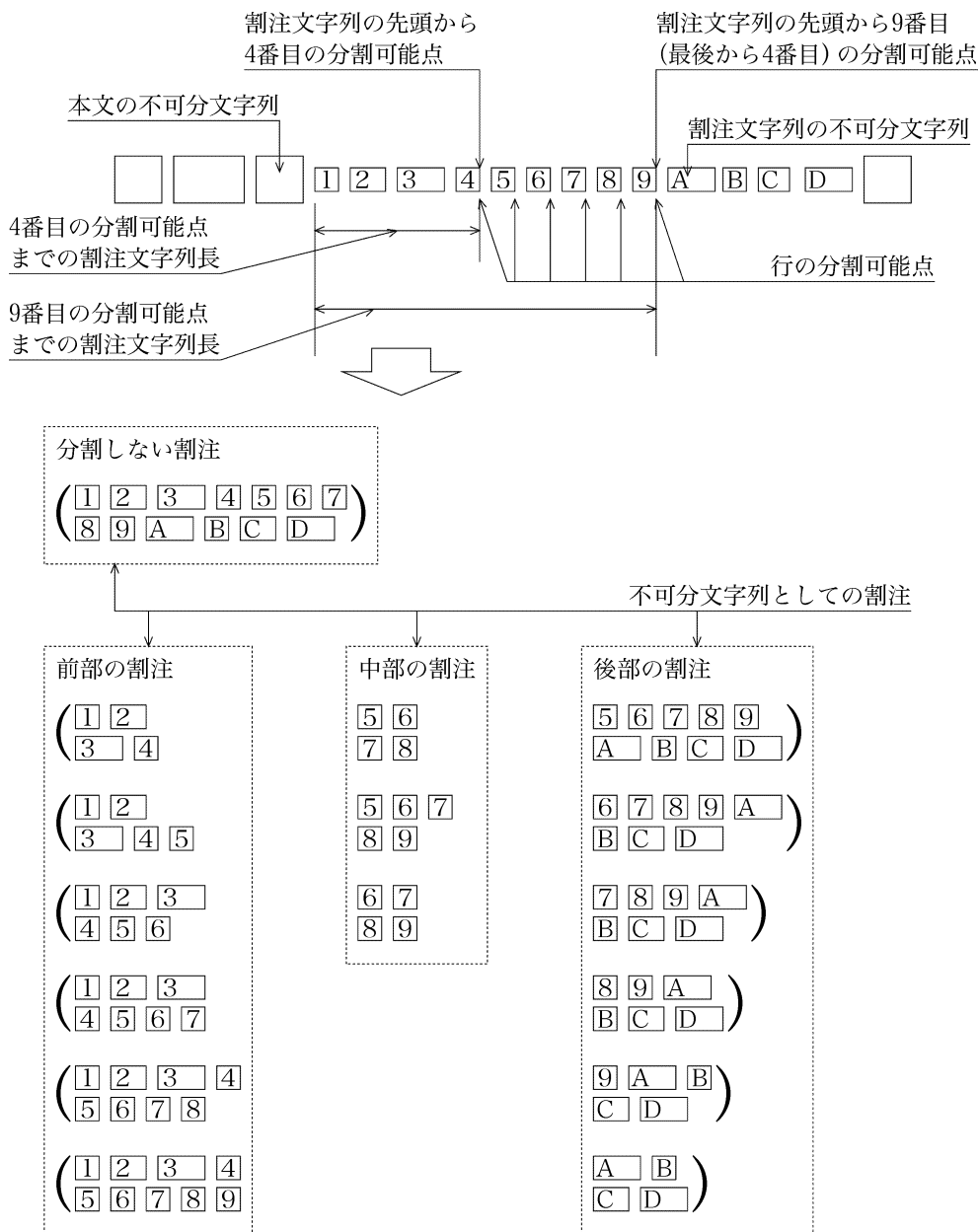


図 21 割注を 3 行に分割する場合の不可分文字列化

8.2.4 不可分文字列の長さの計算 8.1.1=及び 8.1.2=に従って、不可分文字列内の文字間の空き量を含めて各不可分文字列の長さを計算する。不可分文字列の前後の空き量は含めない。ただし、不可分文字列の中に割注、ルビ付き親文字群又は縦中横が含まれるときには、割注の長さは 8.2.5=に従い、ルビ付き親文字群の長さは 8.2.6=に従い、縦中横の文字列の長さは 8.2.7=に従いそれぞれ計算する。

8.2.5 割注の長さの計算 割注行の長さを次の a) に従って計算し、それをもとに、次の b) ~e) に従って割注の長さを計算する。

- a) 割注行 1 行目及び割注行 2 行目について、割注行内の不可分文字列間の空き量を含めて、それぞれの割注行の長さを計算する。ただし、割注行内に縦中横が含まれるときには、縦中横の文字列の長さは **8.2.7 =** に従って計算する。次の **1) ~5)** は割注行の長さの計算に含めない。

- 1) 割注行頭又は割注行末に位置した欧文間隔。
- 2) 割注行頭に位置した連数字と和文との間の四分アキ、連数字と単位記号との間の四分アキ、和文と単位記号との間の四分アキ及び和文と欧文用文字との間の四分アキ。
- 3) 割注行末に位置した連数字と和文との間の四分アキ、連数字と単位記号との間の四分アキ、和文と単位記号との間の四分アキ、和文と欧文用文字との間の四分アキ及び中点類の後ろの四分アキ。
- 4) 割注行頭に位置した始め括弧類の前の二分アキ。
- 5) 割注行末に位置した終わり括弧類の後ろの二分アキ。

備考 4) 及び 5) については、**8.1.2 = 備考 2. =** の処理系定義で二分アキを入れた場合には、割注行の長さの計算に含める。

また、**3)** の中点類の後ろの四分アキについては、**8.1.2 = 備考 2. =** の処理系定義で四分アキを入れた場合には、割注行の長さの計算に含める。

- b) **8.2.3 = (2) =** で作った行に分割しない割注の場合で、割注に括弧類を付けるように指定されているときは、割注始め括弧類及び割注終わり括弧類の字幅と長い割注行の長さとの和を加え、行に分割しない割注の長さとする。割注に空きを入れるように指定されているときは、割注始め空き量及び割注終わり空き量と長い割注行の長さとの和を加え、行に分割しない割注の長さとする。

また、割注に括弧類もつけず空きも入れない場合は、長い割注行の長さを、行に分割しない割注の長さとする。

- c) **8.2.3 = (3.1) =** で作った前部の割注の場合で、割注に括弧類を付けるように指定されているときは、割注始め括弧類の字幅と長い割注行の長さとの和を加え、前部の割注の長さとする。割注に空きを入れるように指定されているときは、割注始め空き量と長い割注行の長さとの和を加え、前部の割注の長さとする。

また、割注に括弧類もつけず空きも入れない場合は、長い割注行の長さを、前部の割注の長さとする。

- d) **8.2.3 = (3.2) =** で作った後部の割注の場合で、割注に括弧類を付けるように指定されているときは、割注終わり括弧類の字幅と長い割注行の長さとの和を加え、後部の割注の長さとする。割注に空きを入れるように指定されているときは、割注終わり空き量と長い割注行の長さとの和を加え、後部の割注の長さとする。

また、割注に括弧類もつけず空きも入れない場合は、長い割注行の長さを、後部の割注の長さとする。

- e) **8.2.3 = (3.3) =** で作った中部の割注の場合は、長い割注行の長さを、中部の割注の長さとする。

8.2.6 ルビ付き親文字群の長さの計算

- a) ルビ文字列長が親文字列長より短い又は等しい場合は、親文字列長をルビ付き親文字群の長さとする。
- b) ルビ文字列長が親文字列長より長い場合は、次の **1) ~4)** に従ってルビかけ長を計算する。計算したルビかけ長をもとに、次の **5) ~8)** に従ってルビ付き親文字群の長さを計算する。 l , L , N , r , R , S 及び s は、次による。

l : ルビ文字列長。

L : 親文字列長。

N : 親文字数。

r : ルビかけ長。

R : ルビ付き親文字群の長さ。

S : 親文字の文字サイズ。

s : ルビ文字の文字サイズ。

参考 親文字列長がルビ文字列長未満の場合、**7.9 = (4) (e) =**によって親文字群の前後の文字にルビ文字を、最大でルビ文字の文字サイズまでかけて配置することから、ルビ付き親文字群の長さの計算には、親文字の文字サイズ及びルビ文字の文字サイズを使用する。

- 1) 親文字が欧文でもなく連数字でもなく、かつ $l-L < N \cdot S$ の場合のルビかけ長は、

$$r = (l-L) / 2N$$

で計算する。

参考 ルビ文字列長が親文字列長より長く、親文字が欧文でもなく連数字でもない場合には、 $X:Y:Z = 1:2:1$ の比率で親文字間を空けて配置する [7.9 = (4) 参照]。

- 2) 親文字が欧文でもなく連数字でもなく、かつ $l-L \geq N \cdot S$ の場合のルビかけ長は、

$$r = l$$

とする。

- 3) 親文字が欧文又は連数字で、かつ $l-L < S$ の場合のルビかけ長は、

$$r = (l-L) / 2$$

で計算する。

参考 親文字が欧文又は連数字の場合は、親文字列をそれぞれの文字の固有の字幅に応じたピッチ処理で配置し、親文字の字間は空けない。

- 4) 親文字が欧文又は連数字で、かつ $l-L \geq S$ の場合のルビかけ長は、

$$r = l$$

とする。

- 5) ルビ付き親文字群の前が、行の分割点であるか又はルビかけ対象でないかのいずれかで、かつルビ付き親文字群の後ろがルビかけ対象の場合のルビ付き親文字群の長さは、

$$R = l - r$$

で計算する。

- 6) ルビ付き親文字群の前がルビかけ対象で、かつルビ付き親文字群の後ろが、行の分割点であるか又はルビかけ対象でないかのいずれかの場合のルビ付き親文字群の長さは、

$$R = l - r$$

で計算する。

- 7) ルビ付き親文字群の前及び後ろが、ルビかけ対象の場合のルビ付き親文字群の長さは、

$$R = l - 2r$$

で計算する。

- 8) ルビ付き親文字群の前が、行の分割点であるか又はルビかけ対象でないかのいずれかで、ルビ付き親文字群の後ろが、行の分割点であるか又はルビかけ対象でないかのいずれかの場合のルビ付き親文字群の長さは、

$$R = l$$

とする。

8.2.7 縦中横の文字列の長さの計算 縦中横の文字列の長さは、縦中横の文字列の最大文字サイズとする。

8.2.8 候補行の構成 候補行の構成方法は、次による。空き量に対応する文字は、表 3 による。

- a) 不可分文字列間に空きが入る場合、8.1.2 ㉓に従って空き量を入れる。
- b) 行頭から分割可能点までの不可分文字列の長さ及び不可分文字列間の空き量を加えて、行長を計算する(図 22 参照)。ただし、次の 1) ~7) は、行長計算に入れない。

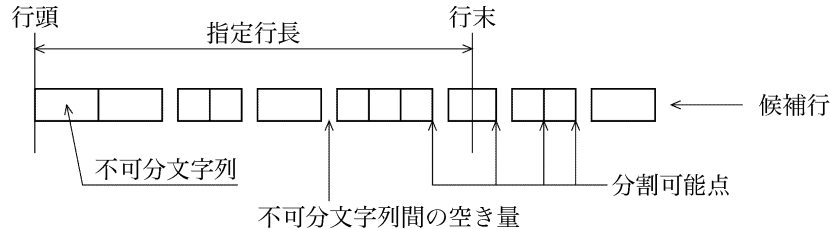


図 22 分割可能点

- 1) 行頭又は行末に位置した欧文間隔。
- 2) 行頭に位置した連数字と和文との間の四分アキ、連数字と単位記号との間の四分アキ、和文と単位記号との間の四分アキ及び和文と欧文用文字との間の四分アキ。
- 3) 行末に位置した連数字と和文との間の四分アキ、連数字と単位記号との間の四分アキ、和文と単位記号との間の四分アキ、和文と欧文用文字との間の四分アキ及び中点類の後ろの四分アキ。
- 4) 行頭に位置した始め括弧類の前の二分アキ。
- 5) 行末に位置した終わり括弧類の後ろの二分アキ。
- 6) 行頭に位置した割注始め空き量。
- 7) 行末に位置した割注終わり空き量。

備考 4) 及び 5) については、8.1.2 備考 2.の処理系定義で二分アキを入れた場合には、行長計算に含める。

また、3) の中点類の後ろの四分アキについては、8.1.2 備考 2.の処理系定義で四分アキを入れた場合には、行長計算に含める。

8.2.9 分割点の決定 各候補行の行の分割点は、次による。

- a) **評価関数** 次の条件を満足するように評価関数を定める。
 - 1) 指定行長より行長が短く、延ばし処理で行を調整する場合よりも、指定行長より行長が長く、詰め処理で行を調整するほうが、評価関数値が小さくなること。
 - 2) 詰め処理で行を調整する場合、詰め可能位置の詰め量が少ない分割可能点の評価関数値が、小さくなること。
 - 3) 延ばし処理で行を調整する場合、延ばし可能位置の延ばし量が少ない分割可能点の評価関数値が、小さくなること。
 - 4) 段落の最終行が、指定された文字数未満になると評価関数値が、大きくなること。
 - 5) 割注を行に分割する場合の評価関数値は、次による。
 - 5.1) 7.15 (2) の (a) ㉓及び (b) ㉓については、最大まで延ばし、7.15 (2) (c) ㉓については八分アキまで延ばして処理するときの評価関数値と同じ値を加える。
 - 5.2) 割注を行に分割する分割可能点の中では、割注行 1 行目の長さとの割注行 2 行目の長さの差分が小さい分割可能点の評価関数値が、小さくなること。

b) **分割点の決定** 評価関数値が最小になる分割可能点を行の分割点とする。

参考 評価関数の一例を**参考 1**に示す。

8.2.10 行の調整処理 行の調整処理は、次による。

- a) **詰め処理** 行の分割点を決定した行で、行長が指定行長より長い場合には、**7.15 (1)**に従って詰め可能位置を詰めて行を調整した後、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに**7.15 (5)**に従って割注行の調整を行う。
- b) **延ばし処理** 行の分割点を決定した行で、行長が指定行長より短い場合には、**7.15 (2)**又は**c)**に従って延ばし処理可能な字間を延ばして行を調整した後、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに**7.15 (5)**に従って割注行の調整を行う。ただし、段落最終行の行長が指定行長より短い場合には、延ばし処理を行わず、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに**7.15 (5)**に従って割注行の調整を行う。
- c) 行の分割点が決定した行で、行長が指定行長と等しい場合には、詰め処理及び延ばし処理を行わずに、その行内に含まれるすべての割注について、個々の割注ごとに**7.15(5)**に従って割注行の調整を行う。

8.2.11 そろえ そろえは、**7.14**による。

9. 段落整形対象要素の組版規則

9.1 行の基本的な配置方法並びに段落整形処理及び段落末尾処理

9.1.1 行の基本的な配置方法 行の基本的な配置方法は、次による。

a) 組版対象領域の先頭に配置する行の配置方法

- 1) 縦書きの場合は、その段落で指定された文字サイズの外枠の右端を組版対象領域の行送り方向の先頭に接して配置する。
- 2) 横書きの場合は、その段落で指定された文字サイズの外枠の上端を組版対象領域の行送り方向の先頭に接して配置する。
- 3) その段落で指定された文字サイズの外枠より縦書きでは右側にはみ出した文字列、又は横書きでは上側にはみ出した文字列を含む場合、そのはみ出した部分を先頭行に接する行送り方向の組版対象領域の外側にはみ出して配置する。

はみ出しがでる例としては、次のような場合がある。

- 3.1) **7.8**に規定する縦中横処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.2) **7.10**に規定する添え字処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.3) **7.13**に規定する割注処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.4) **7.14.2** 行方向の位置調整処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.5) **7.18**に規定する結合文字処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.6) **7.19**に規定する文字の具体字形処理を行った文字列を配置した場合
 - 3.7) その段落で指定された文字サイズより大きい文字サイズの文字列を配置した場合
 - 4) 文字に接して行間に配置する次の場合においては、先頭行に接する行送り方向の組版対象領域の外側に配置する。
 - 4.1) **7.9**に規定するルビ文字列が含まれている場合
 - 4.2) **7.11**に規定する圏点が含まれている場合
 - 4.3) **7.5.2**に規定する行間に配置する合印が含まれている場合
- b) 隣接する行と行との配置方法
- 1) 行と行との間には、行間として指定された空き量を配置する。

- 2) 行中にその段落で指定された文字サイズと異なる文字サイズの文字列、並びにその段落で指定された文字サイズの外枠より縦書きでは右側又は左にはみ出した文字列、又は横書きでは上側又は下側はみ出した文字列を含む場合、次による。
- 2.1) 1行全体の文字サイズが、その段落で指定された文字サイズより小さい場合は、その段落で指定された文字サイズの外枠を基準とし、その外枠と小さな文字サイズの外枠との差は、**1)** で確保した空きに追加して配置する (図 23 参照)。

※図版制作中

図 23

- 2.2) 段落で指定された文字サイズの外枠より行送り方向にはみ出しがある場合 (はみ出しの例は **a) 3)** 参照) は、その段落で指定された文字サイズの外枠を基準とし、その外枠より行送り方向にはみ出した部分を **1)** で確保した部分にはみ出して配置する (図 24 参照)。なお、**7.18** で規定する結合文字処理を行った文字列が含まれている場合、又は **7.19** で規定する文字の具体字形処理を行った文字列が含まれている場合において、その段落で指定された文字サイズの外枠より行送り方向にはみ出した部分があるときも同様とする。

※図版制作中

図 24

ただし、その段落で指定された文字サイズの外枠間の距離とし、その外枠より行送り方向にはみ出した部分を **1)** で確保した部分にはみ出して配置する代わりに、指定された行間の量を、隣接する行の最も大きな文字サイズの文字又は文字位置を移動した文字の外枠間の距離としてもよい (図 25 参照)。隣接する行の最も大きな文字サイズの文字又は文字位置を移動した文字の外枠間の距離とするオプションは、処理系定義とする。

- 3) 次のものは、行間に含めない。
- 3.1) **5.9** に規定するルビ文字列
- 3.2) **5.11** に規定する圏点
- 3.3) **5.12** 定する下線及び傍線
- 3.4) **8.5.2** に規定する行と行との間に配置する合印
- c) 組版対象領域の末尾に配置する行の配置方法
- 1) 縦書きの場合は、**9.2.1 c)**、**9.2.2 d)** 及び **9.11** の規定により組版対象領域の行送り方向の末尾を空けた場合を除き、その段落で指定された文字サイズの外枠の左端を組版対象領域の行送り方向の末尾に接して配置する。
- 2) 横書きの場合は、**9.2.1 c)**、**9.2.2 d)** 及び **9.11** の規定により組版対象領域の行送り方向の末尾を空けた場合を除き、その段落で指定された文字サイズの外枠の下端を組版対象領域の行送り方向の末尾に接して配置する。
- 3) その段落で指定された文字サイズの外枠より縦書きでは左側にはみ出した文字列、又は横書きでは下側はみ出した文字列を含む場合、そのはみ出した部分を末尾行に接する行送り方向の組版対象領域の外側にはみ出して配置する (はみ出しがでる例としては、**a) 3)** 参照)。
- 4) 文字に接して行間に配置する次の場合においては、末尾行に接する行送り方向の組版対象領域の外側

に配置する。

4.1) 7.9に規定するルビ文字列が含まれている場合

4.2) 7.12に規定する下線、傍線及び抹消線が含まれている場合

9.1.2 段落整形処理 設定された段落字下げ、字下げ及び字上げは、次に設定されるまで有効とする。通常、段落字下げの空き量は全角アキとし、字下げ及び字上げは行わない。

ただし、字下げ及び字上げの指定があった場合は、次による。

a) 縦書きの場合

1) 字下げの指定があった場合は、1 段組においては版面の上端から指定された字下げ量だけ下げた位置を行頭とし、多段組においては1 段の領域の上端から指定された字下げ量だけ下げた位置を行頭とする。

2) 字上げの指定があった場合は、1 段組においては版面の下端から指定された字上げ量だけ上げた位置を行末とし、多段組においては1 段の領域の下端から指定された字上げ量だけ上げた位置を行末とする。

b) 横書きの場合

1) 字下げの指定があった場合は、1 段組においては版面の左端から指定された字下げ量だけ下げた位置を行頭とし、多段組においては1 段の領域の左端から指定された字下げ量だけ下げた位置を行頭とする（**図 25** 参照）。

2) 字上げの指定があった場合は、1 段組においては版面の右端から指定された字上げ量だけ上げた位置を行末とし、多段組においては1 段の領域の右端から指定された字上げ量だけ上げた位置を行末とする（**図 25** 参照）。

※図版制作中

図 25

9.1.3 段落末尾処理 段落末尾処理は、段落の最終行が処理系定義の文字数以上になるように文字を配置する。

9.1.4 段落間処理 段落間処理は、次による。

a) 段落前アキ及び段落後アキの指定がない場合の処理は、次による。

1) 文字サイズ及び行間が同一の段落が連続する場合は、その段落で指定された行間を段落の間の空き量とし、その処理は、**9.1.1** による。

2) 文字サイズ及び行間のいずれか又は両方が異なる場合の段落間の空きは、基本版面の行間を、前の段落で指定された文字サイズの外枠及び後の段落で指定された文字サイズの外枠の間の距離とする。また、この空き量は、**9.11** の調整の対象とする。

b) 段落前アキ及び段落後アキの指定がある場合の処理は、次による。

1) 段落前アキ及び段落後アキの指定が行空き数で行われている場合の指定の空き量は、行の幅と行間が一定のとき、幅を表す M 行は次のように定義する（ M は 1 以上の整数）。

$$M \text{ 行} = (\text{その段落で指定されている文字サイズを基準とした行の幅}) \times M + (\text{その段落で指定されている行間}) \times (M+1)$$

ただし、その段落が見出しの場合は、次による。

$$M \text{ 行} = (\text{基本版面の行の幅}) \times M + (\text{基本版面の行間}) \times (M+1)$$

2) 段落前アキの指定がある場合

2.1) 段落の先頭行が組版対象領域の先頭以外にきた場合、前の段落の最終行とその段落の先頭行との行間を、指定した段落前アキとする（図参照）。

2.2) 段落の先頭行が組版対象領域の先頭にきた場合、組版対象領域の先頭から段落前アキの指定だけ空ける（図参照）。段落前アキを行空き数で指定する場合、行空き数で指定した空き量から1行間分空き量を差し引く。

3) 段落後アキの指定がある場合

3.1) 段落の最終行が組版対象領域の末尾以外にきた場合、その段落の最終行と次の段落の先頭行との行間を、指定した段落後アキとする（図参照）。

3.2) 段落の最終行と組版対象領域の末尾との空き量が指定した段落後アキより小さい場合、末尾の空き量を段落後アキとする。空きをとった後の末尾の空き量の調節は、8.9による。

4) 前の段落で段落後アキが指定され、後の段落で段落前アキが指定された場合の段落間空きは段落後アキと段落前アキとの合計とする。

9.2 改ページ・改段の処理

9.2.1 改ページの処理 改ページの処理は、次による。

a) 右とじ又は左とじの場合の改ページの処理

1) なりゆき なりゆきは、=及び=に規定する段落整形要素の基本的な組版方法に従って配置する。

2) 左・右ページに関わらず改ページ 左・右ページに関わらず改ページは、指定がある見出しなどがどの位置に出現しても、新しいページの版面の先頭に配置する。

3) 左ページおこし 左ページおこしは、指定がある見出しなどがどの位置に出現しても、新しい左ページの版面の先頭に配置する。縦書きで右とじの場合は、左ページおこしが改丁にあたる。

4) 右ページおこし 右ページおこしは、指定がある見出しなどがどの位置に出現しても、新しい右ページの版面の先頭に配置する。横書きで左とじの場合は、右ページおこしが改丁にあたる。

5) 改ページ禁止 改ページ禁止は、指定がある見出しなどを版面の先頭に配置してはならない。前ページの組版対象領域の末尾に配置する1行を追い出して、指定がある見出しなどの前に配置する。この場合の追い出した1行の組版対象領域の行送り方向の領域調整の詳細は、9.11による。

b) a) 2)～4)の処理を行った場合における改ページの指定がある見出しなどを配置するページの前にくるページの処理は、次による。

1) 1段組の場合 行送り方向の組版対象領域の領域調整は行わない。配置する段落整形要素の後は、空けておく。

2) 多段組の場合

2.1) 縦書きの場合は、基本版面で指定された段数のそれぞれの段に配置する行数はそろえないで、上段から下段に行を順次配置していく。段落整形要素を配置する最後の段の行送り方向の組版対象領域の領域調整は行わない。配置する段落整形要素の後は、空けておく。この場合において、段間けいが配置されている場合は、段間けいの長さは、行送り方向の最も長い段の長さにそろえる。

2.2) 横書きの場合は、基本版面で指定された段数のそれぞれの段に配置する行数は同じにそろえる。ただし、行数に半端が出る場合は、その半端の不足行は最も右にくる段末を空ける。それぞれの段の行送り方向の領域調整は行わない。配置する段落整形要素の後は、空けておく。この場合において、段間けいが配置されている場合は、段間けいの長さは、行送り方向の最も長い段の長さにそろえる。

備考 ここでいう行数の半端とは、配分する行数を段数で除し、端数を切り上げた整数（行数）の答を求めた場合に不足する行数のことである。例えば3段組で配分する行が13行、14行、15行の場合は、以下の計算から、行数の半端は2行、1行、0行となる。

13行÷3段=5行……不足2行 1段目及び2段目は各5行、3段目は3行

14行÷3段=5行……不足1行 1段目及び2段目は各5行、3段目は4行

15行÷3段=5行……不足0行 1段目、2段目及び3段目は各5行

参考 縦書きで右ページおこし又は横書きで左ページおこしとする場合、体裁上からは直前のページを白ページにしないほうがよい。段落整形要素の最終部分を指定がある見出しなどを配置する直前のページに配置にすることが望ましい。

9.2.2 改段の処理 多段組における改段の処理は、次による。

- a) **なりゆき** なりゆきは、**=**及び**=**に規定する段落整形要素の基本的な組版方法に従って配置する。
- b) **必ず改段する** 必ず改段するは、指定がある見出しなどがどの位置に出現しても、新しい段の領域の先頭に配置する。
- c) **改段禁止** 改段禁止は、指定がある見出しなどを段の領域の先頭に配置してはならない。前段の末尾に配置する1行を追い出して、指定がある見出しなどの前に配置する。この場合における前段における行送り方向の組版対象領域の領域調整は、**9.11**による。
- d) **必ず改段するの指定がある見出しなどを配置した段の直前にくる段の処理** 必ず改段するの指定がある見出しなどを配置した段の直前にくる段については、行送り方向の組版対象領域の領域調整は行わない。配置する段落整形要素の後は、空けておく。

9.3 中扉処理 中扉処理は、次による。

- a) 中扉は、改丁とする。中扉の裏にくるページは、白ページとする。ただし、指定により中扉の裏にくるページから見出し又は本文文字列を始めてもよい。

参考 中扉は、その裏にくるページを白ページとするのが原則であるが、それを簡略にして裏面から見出しなどを始める方法もある。この方法は、特に半扉と呼ばれている。この方法は、中扉に続く見出し又は本文文字列を見開きで開始する目的から採用される場合がある。なお、欧文の書籍における half title は、ここでいう半扉とは異なる。

- b) 中扉に入る標題の組方向の既定値は、基本版面の組方向と同一とし、その文字サイズは、大見出しより1段階又は2段階大きくすることが望ましい。
- c) 中扉に入る標題は、基本版面が多段組の場合においては、基本版面の段数を使用した段抜きとする。段抜きの処理は**=. =**による。

9.4 見出し処理

9.4.1 見出しの種類 見出しの種類は、上位の見出しから大見出し、中見出し、小見出しと呼ぶ。また、見出しはそれぞれ別行にする別行見出しとする。ただし、小見出しは、指定により同行見出し又は窓見出しとしてもよい。

9.4.2 見出しの構成 大見出し、中見出し及び小見出しは、それぞれラベル名、番号、見出し文字列及び副題で構成する。ただし、ラベル名、番号及び副題は、必須要素ではなく、省略できるものとする。

※図版制作中

図 26

第1部……ラベル名は“第”及び“部”，番号は“1”

3.2.1……ラベル名なし，番号は“3.2.1”

2) ……ラベル名なし，番号は“2”

9.4.3 見出しの組方向 見出しの組方向は，基本版面の組方向と同一にする。

9.4.4 見出しの改ページ・改段の処理 見出しの改ページ・改段の処理は，指定による。ただし，大見出しの既定値は，改丁とする。

9.4.5 別行見出しの処理 別行見出しの処理は，次による。

a) 見出しの文字サイズ及び書体等

- 1) ラベル名，番号及び見出し文字列は，同一文字サイズとし，ラベル名及び番号とその後に続ける見出し文字列との間の空き量は，見出し文字列の文字サイズとする。ただし，見出しのラベル名及び番号の後に終わり括弧類又は句点類が位置した場合は，見出し文字列との間の空き量の既定値は，基本版面の文字サイズの二分アキとする。
- 2) 小見出しに続く本文文字列と同一書体の小見出しの見出し文字列の文字サイズは，基本版面の文字サイズと同一の文字サイズとするか又は1段階大きな文字サイズとし，角ゴシック体の場合は，基本版面の文字サイズと同一の文字サイズとするか又は1段階小さな文字サイズとする。
- 3) 中見出しの見出し文字列の文字サイズは，小見出しの見出し文字列の文字サイズが基本版面の文字サイズより1段階大きな文字サイズの場合は，小見出しの見出し文字列の文字サイズより1段階大きく，小見出しの見出し文字列の文字サイズが基本版面の文字サイズと同一の文字サイズか，又は1段階小さな文字サイズの場合は，基本版面の文字サイズより1段階大きくするのが望ましい。

参考 文字サイズに段階をつける方法としては，次の2つの方法がある。

- 4) **JIS Z 8305** に規定されているポイントの大きさの種類として掲げられている**表2**のうち，左欄に掲げられている種類を基準として段階を選択する方法。
 - 5) 基準となる文字サイズの一定の比率で大きくしていく方法。この場合は，15-20%くらいずつ増大するのがよい。
 - 6) 小見出しにおいて別行としないで見出し文字列の後に副題を続ける場合を除いて，副題の文字サイズは，見出し文字列の文字サイズより2段階くらい小さくすることが望ましい。
 - 7) 見出しの字間を空ける場合は，ラベル名及び番号はベタ組とし，見出し文字列の字間を空ける（見出し文字列の字間を空ける例は，**附属書**=参照）。ただし，横書きでラベル名に和文，番号に欧文又は連数字を用いる場合は，欧文又は連数字との間の空き量は，四分アキとする。
- b) 見出し文字列の文字の配置方法** 見出し文字列の文字の配置方法は，5.の規定による。ただし，始め括弧類の前及び終わり括弧類の後ろは，四分アキ，中点類の前後は八分アキとしてもよい。

c) 見出しの段落整形

1) **縦書きの見出しのそろえと字下げ** 縦書きの見出しのそろえと字下げは，次による。

1.1) 見出しのそろえは，行頭そろえとする。

1.2) 大見出しの字下げの空き量は，基本版面の文字サイズの3倍アキ又は4倍アキとする。

1.3) 中見出しの字下げの空き量は，大見出しの字下げの空き量から更に基本版面の文字サイズの2倍多くする。

1.4) 小見出しの字下げの空き量は，中見出しの字下げの空き量より更に基本版面のサイズの2倍多くする。

2) **横書きの見出しのそろえと字下げ** 横書きの見出しのそろえと字下げは，次による。

- 2.1) 大見出し及び中見出しは、中央そろえとし、小見出しは、行頭そろえとする。
- 2.2) 小見出しの字下げの空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキとする。
- 3) **副題の段落整形** 副題の段落整形は、次による。
 - 3.1) 副題は、横書きの小見出しを除き別行とする。ただし、指定により見出し文字列に続けてもよい。なお、見出し文字列に副題を続ける場合の見出し文字列と副題との間の字間の空き量は、副題の先頭にダッシュをつけるときはベタ組、つけないときは、見出し文字列の文字サイズの全角アキとする。
 - 3.2) 見出し文字列と別行とした副題との行間は、見出し文字列の文字サイズの二分アキとする。
 - 3.3) 縦書きの副題の先頭は、見出し文字列の先頭より字下げし、その空き量は、見出し文字列の文字サイズの全角アキ又は2倍アキとする。
 - 3.4) 横書きの大見出し及び中見出しにおける副題は、中央そろえとする。
- 4) 2行以上の見出し文字列の行間は、見出し文字列の文字サイズの三分アキ又は二分アキとする。ラベル名及び番号、又は番号だけがついた見出し文字列の2行目以降の行頭は、ラベル名及び番号の下端にそろえる。ラベル名及び番号がつかない見出し文字列の2行目以降の行頭は、1行目の見出し文字列の行頭より字下げし、その字下げする空き量は、見出し文字列の文字サイズの全角アキとする。
- 5) 1つの見出しは、その見出し単位で1段組の版面又は多段組の段に配置する。見出しの中で分割し、2つのページ又は2つの段に配置してはならない。また、行取り数、段落前アキ及び／又は段落後アキの指定がある場合も、それらの領域を一体として扱い、2つのページ又は2つの段に配置してはならない。

※図版制作中

図 27

参考 見出しの折り返し箇所の決定は、文章の内容により行う。例えば、固有名詞を途中で分離すること、及び、助詞が行頭にくることは望ましくない。

- d) **別行見出しの行送り方向の配置** 別行見出しの行送り方向の配置は、次による。
 - 1) 別行見出しの行送り方向の幅
 - 1.1) 別行見出しが1行の場合は、見出し文字列の文字サイズの外枠の行送り方向の幅とする。
 - 1.2) 別行見出しに折り返しがある場合は、先頭行の見出し文字列の文字サイズの外枠の行送り方向の前端及び最終行の見出し文字列の文字サイズの外枠の行送り方向の後端間の距離とする。
 - 1.3) 別行の副題がつく場合は、先頭にくる見出し文字列の文字サイズの外枠の行送り方向の前端及び最終行にくる副題文字列の文字サイズの外枠の行送り方向の後端間の距離とする。

※図版制作中

図 28

- 2) 別行見出しの行送り方向の配置方法
 - 2.1) 行取り数による指定がある場合
 - 2.1.1) 指定されている行取り数を別行見出しの行送り方向の領域とする。
 - 2.1.2) 行取り数の指定値は1以上の整数とし、その指定値並びに基本版面の文字サイズ及び行間を基準

として、行取り数 N 行の行送り方向の幅は、次の式から算出する。

$$N \text{ 行の行送り方向の幅} = (\text{基本版面の文字サイズ}) \times N + (\text{基本版面の行間}) \times (N - 1)$$

2.1.3) 別行見出しは、その見出しの行送り方向の幅が行取り数の行送り方向の幅の中央になるように配置する。

2.1.4) 行取り数の指定値は、小見出し、中見出し、大見出しの順に、順次増加することが望ましい。ただし、別行見出しが連続する場合には、連続する別行見出しの組み合わせごとに、別行見出し間の空き量を減ずる方向に行取り数を調整する。

参考 単独の場合の行取り数を連続する場合にそのまま適用すると、別行見出しの前後の空き量が、単独の場合より連続する場合の方が大きくなる。別行見出しの前後の空き量は、できるだけそろえることが望ましい。別行見出しの行取り数及び見出しが連続する場合の行取り数の例を**附属書 = (参考)** に示す。

2.2) 行取り数並びに段落前アキ及び／又は段落後アキの指定がない場合

2.2.1) その別行見出しの行送り方向の幅より大きい行取り数の中で最小の行取り数を別行見出しの行送り方向の領域とする。

2.2.2) 別行見出しは、その別行見出しの行送り方向の幅が **2.2.1)** に規定する行送り方向の領域の中央になるように配置する。

2.3) 段落前アキ及び／又は段落後アキの指定だけの場合

2.3.1) 段落前アキ及び／又は段落後アキが行数で指定されている場合は、その別行見出しの行送り方向の幅より大きい行取り数の中で最小の行取り数を別行見出しの行送り方向の領域とする。また、別行見出しは、その別行見出しの行送り方向の幅が行取り数の行送り方向の幅の中央になるように配置する。

2.3.2) 段落前アキ及び／又は段落後アキが行数で指定されていない場合は、別行見出しの行送り方向の幅を別行見出しの行送り方向の領域とする。

3) 別行見出しの行送り方向の幅と前後に配置する本文段落などとの空き

3.1) 段落前アキ及び／又は段落後アキの指定がない場合には、別行見出しの行送り方向の領域とその前後に隣接する行との行間は、基本版面の行間とする。ただし、組版対象領域の先頭に別行見出しが位置した場合は、別行見出しの行送り方向の領域を、組版対象領域の先頭に行間を空けずに配置する。また、1 段組の縦書きにおいて、偶数ページ末尾に位置した別行見出しは、別行見出しの行送り方向の領域を、組版対象領域の末尾に行間を空けずに配置する。

3.2) 段落前アキ及び／又は段落後アキの指定がある場合は、別行見出しの行送り方向の領域と、その前後に隣接する行との行間は、**=**項の規定による空き量とする。

e) 多段組における段抜きとする別行見出しの処理

1) 段抜きの別行見出しとして段数の指定がある場合は、別行見出しは、指定のある段数を、その別行見出しの字詰め方向の長さとする。ただし、段抜きの別行見出しの開始する段は、次による。

1.1) 指定のある段数が基本版面の段数と同じ場合は、版面の先頭の段とする。

1.2) 指定のある段数が基本版面の段数より少ない場合

1.2.1) 別行見出しの出現した位置が、版面内の先頭の段の場合は、出現した段とする。

1.2.2) 別行見出しの出現した位置が、版面内の 2 段目以降の場合で、かつ、別行見出しの出現した位置が、1 段の領域の行送り方向の 1/2 未満のときは、別行見出しの出現した段の直前に位置する段とする。ただし、別行見出しの字詰め方向の領域が版面からはみ出した場合は、版面内に収まる

ように開始する段を前の段に移動する。

- 1.2.3)** 別行見出しの出現した位置が、版面内の 2 段目以降の場合で、かつ、別行見出しの出現した位置が、1 段の領域の行送り方向の 1/2 以上のときは、別行見出しの出現した段とする。ただし、別行見出しの字詰め方向の領域が版面からはみ出した場合は、版面内に収まるように開始する段を前の段に移動する。
- 1.2.4)** **1.2.3)** 又は **1.2.4)** で配置した結果その別行見出しが段の末尾に配置される場合は、開始する段を 1 段下げる。さらに、下げた結果、版面より別行見出しがはみ出した場合は、次ページの版面の先頭に配置する。
- 2)** 段抜きの別行見出しとする場合は、別行見出しの前に配置する本文文字列は、別行見出しを“かべ”として、その前で折り返す（**図 29** 参照）。また、別行見出しの直前の各段の行数は、同じにそろえる。ただし、行数に半端が出る場合、その半端の不足行は、縦書きでは最下段、横書きでは最右段を空ける（**図 29** 参照）。

※図版制作中

図 29

f) 別行見出しの組版対象領域内での配置

- 1)** 1 段組の縦書きの場合において、別行見出しは、奇数ページの版面の末尾に配置してはならない。偶数ページの版面の末尾に配置してよい。ただし、連続する別行見出しは、一体として扱い、偶数ページから奇数ページの 2 つのページにまたがって配置してはならない。版面末尾に配置してはならない別行見出しは、追い出して次ページの版面の先頭に配置する。
- 2)** 1 段組の横書きの場合において、別行見出しは、奇数ページ・偶数ページともに版面の末尾に配置してはならない。この場合の別行見出しは、追い出して次ページの版面の先頭に配置する。
- 3)** 多段組の縦書き及び横書きの場合において、別行見出しは、1 段の領域の末尾に配置してはならない。別行見出しは、追い出して次段の先頭に配置する。
- 4)** この場合における追い出した組版対象領域の行送り方向の領域調整の詳細は、**9.11** による。

9.4.6 同行見出しの処理 同行見出しの処理は、次による。

a) 同行見出しの文字サイズ及び書体等

- 1)** ラベル名、番号及び見出し文字列は、同一文字サイズとし、ラベル名及び番号とその後に続ける見出し文字列との間の空き量は、見出し文字列の文字サイズの全角アキとする。ただし、見出しのラベル名及び番号の後に終わり括弧類又は句点類がつく場合は、見出し文字列との間の空き量の既定値は、基本版面の文字サイズの二分アキとする。
- 2)** 同行見出しに続く本文文字列と同一書体の同行見出しの見出し文字列の文字サイズは、基本版面の文字サイズと同一の文字サイズとする。角ゴシック体の同行見出しの文字サイズは、基本文字サイズと同一の文字サイズとするか又は 1 段階小さな文字サイズとする。
- 3)** 見出しの字間を空ける場合は、ラベル名及び番号はベタ組とし、見出し文字列の字間を空ける（見出し文字列の字間を空ける例は、**附属書 =** 参照）。ただし、横書きでラベル名に和文、番号に欧文又は連数字を用いる場合は、欧文又は連数字との間の空き量は、四分アキとする。

b) 見出し文字列の文字の配置方法 見出し文字列の文字の配置方法は、**5.**の規定による。

c) 同行見出しの字下げの空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキとし、その後に改行にしないで本

文文字列を続ける。同行見出しの後に続ける本文文字列は 1 行とし、同行見出しとそれに続ける本文文字列との間の空き量の既定値は、基本版面の文字サイズの全角アキとする。

なお、同行見出し及びそれに続く本文文字列の行を処理した結果、同行見出しに続く本文文字列の先頭がその行に配置できないで次行の先頭に位置する場合は、次行に配置する本文文字列の行頭は空けないで、行頭から本文文字列を配置する。この場合、指定行長と同行見出しの行長との差は、同行見出しの下端を空けておくものとする。

- d) 同行見出しとその前にくる本文段落との間の空き量の既定値は、基本版面の行間とする。
- e) 同行見出しは、組版対象領域の末尾に配置してもよい。

9.4.7 窓見出しの処理 窓見出しの処理は、次による。

- a) 窓見出しの文字サイズ及び書体等
 - 1) 窓見出しには、ラベル名及び番号はつけない。
 - 2) 窓見出しの書体は、角ゴシック体とする。
 - 3) 窓見出しの文字サイズの既定値は、基本版面の文字サイズより 1 段階小さくする。
- b) 見出し文字列の文字の配置方法 見出し文字列の文字の配置方法は、5.の規定による。
- c) 窓見出しの行数は、最大 3 行とし、1 行の字数は、最大で 10 字くらいとすることが望ましい。窓見出しの字数に対する窓見出しの行数の関係は、窓見出しの字数が 6 字までは 1 行、20 字までは 2 行、21 字以上は 3 行とすることを既定値とする。

なお、窓見出しを 2 行又は 3 行とする場合には、各行は行頭そろえとし、各行の指定行長は同一とする。行間は、窓見出しの文字サイズの四分アキくらいが望ましい。

備考 2 行又は 3 行にする折り返し位置は、窓見出しの字数を 1/2 又は 1/3 とし、折り返しの位置となる字数は小数点以下切り上げで求め、最終行は不足文字数分末尾を空ける (☒=参照)。ここで求められた字数 (窓見出しの文字サイズ×字数) が、窓見出しの指定行長となる。

例1. 7字は2行とし、1行目は4字、2行目は3字

2. 22 字は 3 行とし、1 行目及び 2 行目は 8 字、3 行目は 6 字

- d) 窓見出しの字下げは、基本版面の文字サイズの二分アキくらいが望ましい。
- e) 窓見出しの行送り方向の配置位置
 - 1) 窓見出しの行送り方向の幅
 - 1.1) 1 行の窓見出しは、見出し文字列の文字サイズの外枠における行送り方向の大きさを、窓見出しの行送り方向の幅とする。
 - 1.2) 2 行又は 3 行の窓見出しは、先頭行の文字サイズの外枠における行送り方向の前端から、最終行の文字サイズの外枠における行送り方向の後端までの距離を、窓見出しの行送り方向の幅とする。
 - 2) 窓見出しの行送り方向の領域並びに窓見出し及び本文文字列の配置方法
 - 2.1) 1 行の窓見出しは、行取り数 2 行を窓見出しの行送り方向の領域とし、窓見出しの行送り方向の幅がその領域の中央に位置するように配置する。行取り数による行送り方向の領域の算出は、9.4.5 d) 2.1.2) による。窓見出しに続く本文文字列は、2 行配置する。
 - 2.2) 2 行又は 3 行の窓見出しは、行取り数 3 行を窓見出しの行送り方向の領域とし、窓見出しの行送り方向の幅がその領域の中央に位置するように配置する。行取り数による行送り方向の領域の算出は、9.4.5 d) 2.1.2) による。窓見出しに続く本文文字列は、3 行配置する。

図 30

- f) 窓見出しの字詰め方向の領域と本文文字列との空き量 窓見出しの1行の指定行長を、窓見出しの字詰め方向の領域とする。この領域とその後に続く本文文字列との空き量は、基本版面の文字サイズの全角アキ以上2倍アキ未満とする。ただし、この空き量、窓見出しの字詰め方向の領域及び窓見出しの字下げ量を加算した長さは、基本版面の文字サイズの整数倍としなければならない。
- また、窓見出しに続く本文文字列の先頭は、段落字下げを行わない。

図 31

- g) 窓見出しとその前にくる本文段落との間の空き量 窓見出しとその前にくる本文段落との間の空き量の既定値は、基本版面の行間とする。
- h) 窓見出しは、組版対象領域の末尾に配置してもよい。ただし、窓見出しは、1段組においては2つのページにまたがって、又は多段組においては2つの段にまたがって配置してはならない。この場合の窓見出しは、追い出して次ページの版面先頭又次段の先頭に配置する。この場合における追い出した組版対象領域の行送り方向の領域調整の詳細は、9.11による。

9.4.8 見出しの組方例 標準的な大見出し、中見出し、小見出し及び窓見出しの組方例は、**附属書=**に掲げる。

9.5 箇条書き処理 箇条書きは、用語定義型の箇条書き及び項目列举型の箇条書きとし、その処理は、次による。

a) 用語定義型の箇条書き

- 1) 用語定義型の箇条書きは、用語及び定義の記述で構成し、用語の直前で改行にする。
- 2) 用語定義型の箇条書きの組方向は、基本版面の組方向と同一とする。
- 3) 用語の書体の既定値は、角ゴシック体とする。
- 4) 用語に同行の指定がない場合は、用語の終わりで改行にする。この場合の用語及び定義の記述の段落字下げの空き量の既定値は、定義の記述の文字サイズの全角アキとする。
- 5) 用語に同行の指定がある場合は、定義の記述は用語の後に続ける。用語と定義の記述との字間の空き量の既定値は、定義の記述の文字サイズの全角アキとする。この場合の段落字下げの空き量の既定値は、定義の記述の文字サイズの全角アキとする。

b) 項目列举型の箇条書き

- 1) 項目列举型の箇条書きは、順序付き列举及び順序なし列举とし、順序付き列举の場合の箇条項目は、順序ラベルと箇条内容で構成する。順序なし列举の場合の箇条項目は、項目ラベルと箇条内容で構成する。それぞれの箇条項目は、改行にする。
- 2) 項目列举型の箇条書きの組方向は、基本版面の組方向と同一とする。
- 3) 順序付き列举の場合は、縦書きのときは行頭に漢数字の順序ラベルをつけ、横書きのときはアラビア数字の順序ラベルをつけることを既定値とする。
- 4) 順序ラベル及び項目ラベルは、行頭より字詰め方向に箇条内容の文字サイズで2倍分の領域に配置し、その領域内では、縦書きの場合は下そろえ、横書きの場合は右そろえとすることを既定値とする。
- 5) 順序ラベルと箇条内容との字間の空き量の既定値は、箇条内容の文字サイズの全角アキとする。
- 6) 順序なし列举の場合は、行頭に項目ラベルとして表6に規定するビュレット“.”をつけることを既

定値とする。

表 6 ビュレット

X 0221-1_ブロック名名前 X 0213 の面区点番号日本語通用名称 (参考) 字形

2022_GENERAL PUNCTUATION_BULLET_1-3-32_ビュレット・

- 7) 項目ラベルと箇条内容との字間の空き量の既定値は、ベタ組とする。

備考 入れ子になった下位の箇条項目の順序ラベル及び項目ラベルは、処理系定義とする。

9.6 注の処理

9.6.1 注と基本版面との関係及びその構成 注と基本版面との関係及びその構成は、次による。

- a) **注と基本版面との関係** この規格では、基本版面の組方向が縦書き又は横書きにおける後注、基本版面の組方向が横書きにおける脚注、及び基本版面の組方向が縦書きにおける傍注を注として規定する。

- b) **注の構成** 注の構成は、次による

- 1) 後注は、注番号及び注文字列で構成する。注番号は、番号及びその前後につける括弧類で構成する。ただし、前後につける括弧類は、必須要素ではなく、省略できるものとする。
- 2) 脚注及び傍注は、区切りけい線、注番号及び注文字列で構成する。注番号は、番号及びその前後につける括弧類で構成する。ただし、前後につける括弧類は、必須要素ではなく、省略できるものとする。

参考 番号にはアラビア数字、漢数字などの数字を用いる方法と記号を用いる方法がある。記号を用いる場合は、*、**、…と“*”の個数で示す方法と次に示し記号の順番で番号を示す方法がある。

*, †, ‡, ¶, §, ||, #

- 3) 後注、脚注及び傍注は、それぞれの注と本文文字列などとの該当箇所を対応させるための合印を、本文文字列などの該当箇所につける。合印は、番号及び前後につける括弧類で構成する。ただし、前後につける括弧類は、必須要素ではなく、省略できるものとする。

9.6.2 合印の処理 合印の処理は、次による。

- a) 基本版面の組方向が縦書きの場合

- 1) 合印の番号は、アラビア数字とし、アラビア数字の前に表 = で規定する“(”をつけ、アラビア数字の後に表 7 で規定する“)”をつけて配置することを既定値とする。

表 7 合印の前後につける括弧類

ブロック名文字の名前 JIS X 0221 による符号位置 JIS X 0213 による符号位置日本語通用名称 (参考) 字形

BASIC LATIN_LEFT PARENTHESIS_0028_1-1-42_始め丸括弧 (

BASIC LATIN_RIGHT PARENTHESIS_0029_1-1-43_終わり丸括弧)

- 2) 合印の組方向は、縦書きとし、字間は、ベタ組とする。
- 3) 合印の番号のアラビア数字の規定値は、連数字とし、連数字は縦中横処理を行い配置する (図 33 参照)。

図 32

- 4) 合印の番号の開始数の既定値は、後注の場合は、大見出しごとに 1 起こしとする。傍注の場合は、見開き単位で 1 起こしとする。

- 5) 合印は、本文文字列の該当する項目の右側に、該当する項目に接して配置することを既定値とする。
合印を本文文字列の該当する項目の直後の行中に配置してもよい。
- 5.1) 本文文字列の該当する項目の右側に、該当する項目に接して配置する場合
- 5.1.1) 合印の文字サイズの既定値は、6 ポとする。
- 5.1.2) 合印の下端（合印の下に“）”がつく場合は、“）”の下端）と該当する項目の文字列の下端とをそろえて配置する（図＝参照、2.12.の図と共通）。ただし、合印は字詰め方向の組版対象領域よりはみ出してならない。この場合は、合印の上端を組版対象領域に上端に接して配置する。
- 5.1.3) 組版対象領域の先頭に位置した行につける合印は、先頭行に接する行送り方向の組版対象領域の外側に配置する。
- 5.2) 合印を該当する項目の直後の行中に配置する場合
- 5.2.1) 合印の文字サイズは、基本版面の文字サイズより1段階又は2段階小さくすることが望ましい。
- 5.2.2) 合印の文字そろえは、右そろえとし、合印の右端を行の右端にそろえて配置する（図＝参照）。
- 5.2.3) 合印の前と本文文字列との字間及び合印の後と本文文字列との字間は、ベタ組とする。
なお、終わり括弧類及び句点に合印が続く場合も、終わり括弧類と合印との字間はベタ組とし、合印の後と本文文字列との字間の空き量は、本文文字列の文字サイズの二分アキとする。
- 参考** 合印を文末の句点、疑問符又は感嘆符の位置につける場合は、通常は文末の句点、疑問符又は感嘆符の前に合印を配置する。
- 5.2.4) 本文文字列と合印との字間では、分離も分割もしてはならない。
- b) 基本版面の組方向が横書きの場合
- 1) 合印の番号は、アラビア数字とし、アラビア数字の後に表7で規定する“）”をつけて配置することを既定値とする。
- 2) 合印の組方向は、横書きとする。
- 3) 合印の番号の開始数の既定値は、後注の場合は、大見出しごとに1起こしとする。脚注の場合は、ページ単位で1起こしとする。
- 4) 合印は、本文文字列の該当する項目の直後の行中に、添え字の上付き文字で配置することを既定値とする。合印を本文文字列の該当する項目の上側に、該当する項目に接して横書きで配置してもよい。
- 4.1) 合印を本文文字列の該当する項目の直後の行中に、上付き文字で配置する場合
- 4.1.1) 合印の前と本文文字列との字間及び合印の後と本文文字列との字間は、ベタ組とする。
なお、終わり括弧類及び句点に合印が続く場合も、終わり括弧類及び句点と合印との間はベタ組とし、合印の後と本文文字列との字間の空き量は、本文文字列の文字サイズの二分アキとする。
- 4.1.2) 本文文字列と合印との字間では、分離も分割もしてはならない。
参考 合印を文末の句点、疑問符又は感嘆符の位置につける場合は、通常は文末の句点、疑問符又は感嘆符の前に合印を配置する。
- 4.2) 合印を本文文字列の該当する項目の上側に配置する場合。
- 4.2.1) 合印の文字サイズの既定値は、6 ポとする。
- 4.2.2) 合印の右端（合印の後に“）”がつく場合は、“）”の右端）と該当する項目の文字列の右端とをそろえて配置する（図＝参照）。ただし、合印は字詰め方向の組版対象領域よりはみ出してならない。この場合は、合印の左端を版面に接して配置する。
- 4.2.3) 組版対象領域の先頭に位置した行につける合印は、先頭行に接する行送り方向の組版対象領域の外

側に配置する。

9.6.3 後注の処理

a) 後注の組方向と配置位置 後注の組方向と配置位置は、次による。

- 1) 後注の組方向は、基本版面と同一の組方向とする。
- 2) 後注は、大見出し、中見出し若しくは小見出しでくくられた内容の最後、段落の後、又は本文の最後にまとめて配置する。また、1 段組においては版面内に配置し、多段組においては 1 段の領域内に配置する。

b) 後注の文字サイズ 後注の文字サイズは、基本版面の文字サイズより 1 段階又は 2 段階程度小さくする。

c) 注番号の処理 注番号の処理は、次による。

- 1) 注番号の番号は、合印と同一番号をアラビア数字で表記し、基本版面が縦書きの場合は、アラビア数字の前に表 = で規定する“(”をつけ、アラビア数字の後に表 = で規定する“)”をつけて配置することを既定値とし、基本版面が横書きの場合は、アラビア数字の後に表 = で規定する“(”をつけて配置することを既定値とする。

なお、縦書きの場合の番号のアラビア数字は、連数字とし、連数字は縦中横処理を行い配置することを規定値とする（図 33 参照）。

図 33

- 2) 注番号と注文字列との間の空き量の既定値は、後注の文字サイズの全角アキとする。

d) 後注の段落整形処理 後注の段落整形処理は、次による。

- 1) 後注の行間 後注の行間は、基本版面の行間より狭くする。
- 2) 縦書きの後注の下端は、1 段組においては版面の下端に接して配置し、多段組においては 1 段の領域の下端に接して配置する。横書きの後注の右端は、1 段組においては版面の右端に接して配置し、多段組においては 1 段の領域の右端に接して配置する。
- 3) 字下げの空き量の既定値は、基本版面の文字サイズの 2 倍アキとする。また、後注の指定行長は、後注の文字サイズの整数倍にする。字下げと後注の指定行長とを加算した長さ、1 段組における字詰め方向の基本版面の長さとの差又は多段組における 1 段の字詰め方向の長さとの差は、行頭側にとり、字下げ量を調整する。
- 4) 後注が 2 行以上となった場合は、2 行目以降の行頭の字下げの空き量の既定値は、注番号の先端より後注の文字サイズで、縦書きのときは 2 倍アキとし、横書きのときは全角アキとする。

e) 後注の本文文字列との行間 後注の前後と本文文字列との間の最小の行間は、基本版面の行間を既定値とする。

この場合における行送り方向の組版対象領域の領域調整の詳細は、9.11 による。

9.6.4 脚注の処理

a) 脚注の組方向と配置位置 脚注の組方向と配置位置は、次による。

- 1) 脚注の組方向は、横書きとする。
- 2) 脚注の基本的な配置 脚注は、1 段組においては合印がある版面内に配置し、多段組においては合印がある段の領域内に配置する。ただし、合印がある版面の末尾又は合印がある段の領域の末尾までに、対応する脚注の全部又は一部が入りきらない場合には、入りきれない脚注部分を、1 段組に

おいては直後のページの版面内に配置し、多段組においては直後の段の領域内に配置する。直後のページ又は直後の段に新たに配置する脚注がある場合には、入りきらない脚注部分を先に配置する。版面内又は段の領域内に脚注を配置する方法は、次による。

- 2.1) 1 段組の場合** 合印がある版面の下端に、その版面内に配置する最後の脚注の最終行の下端を接して配置する。

なお、同一版面に配置する本文文字列、脚注文字列及び区切りけい線のすべてを配置しても、版面に余白がある場合には、その余白分を本文文字列と区切りけい線との間に空ける。区切りけい線がない場合には、その余白分を本文文字列と脚注との間に空ける（**図 35** 参照）。ただし、指定により、区切りけい線がある場合には **e)** 項に規定する本文文字列と区切りけい線との空き量及び区切りけい線と脚注との空き量の既定値を空けて脚注を配置し、区切りけい線がない場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と脚注との行間を空けて脚注を配置し、余白を脚注の後に空けてもよい（**図 34** 参照）。

図 34

- 2.2) 多段組の場合** 合印がある 1 段の領域の下端に、その 1 段の領域内に配置する最後の脚注の最終行の下端を接して配置する。

なお、同一の段の領域に配置する本文文字列、脚注文字列及び区切りけい線のすべてを配置しても、1 段の領域に余白がある場合には、その余白分を本文文字列と区切りけい線との間に空ける。区切りけい線がない場合には、その余白分を本文文字列と脚注との間に空ける。ただし、指定により、区切りけい線がある場合には **e)** 項に規定する本文文字列と区切りけい線との空き量及び区切りけい線と脚注との空き量の既定値を空けて脚注を配置し、区切りけい線がない場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と脚注との行間を空けて脚注を配置し、余白を脚注の後に空けてもよい。

- 3) 2)** に規定する入りきれない脚注部分の処理を行う場合は、そのページの版面又はその段の脚注の最後、及び次のページの版面又は次段に配置する脚注の先頭に矢印などのガイドをつけることが望ましい。特に分割して配置する脚注を偶数ページの版面又は偶数ページの先頭の段に配置する場合は、矢印などのガイドをつけることが望ましい。

なお、矢印などのガイドは、**d) 3)** に規定する指定行長の先頭に配置する。

参考 脚注は、合印があるページ又は段の下端に配置することが望ましいが、合印の付く位置によっては、脚注をそのページ又は段に配置できない場合がある。この場合に、合印をつける項目が複数あるときは、合印をつける位置を変えることにより脚注をそのページの下部に配置することができる。この変更は組版処理ではなく、著者又は編集者の仕事の領域であるといえよう。

- b) 脚注の文字サイズ** 脚注の文字サイズは、基本版面の文字サイズより 1 段階又は 2 段階程度小さくする。
- c) 注番号の処理** 注番号の処理は、次による。
- 1) 注番号の番号は、合印と同一番号をアラビア数字で表記し、アラビア数字の後に**表=**で規定する“)”をつけて配置することを既定値とする。ただし、注番号は、上付き文字にはしない。
 - 2) 注番号と注文字列との間の空き量の既定値は、後注の文字サイズの全角アキとする。
- d) 脚注の段落整形処理** 脚注の段落整形処理は、次による。

- 1) **脚注の行間** 脚注の行間は、基本版面の行間より狭くする。脚注の文字サイズの2分の1より狭くしてもよい。
- 2) 脚注の右端は、基本版面の右端にそろえて配置する。
- 3) 脚注の指定行長は、脚注の文字サイズの整数倍とする。ただし、脚注の指定行長は、1段組においては基本版面の字詰め方向の長さ以下とし、多段組においては基本版面の1段の字詰め数の長さ以下とする。

1段組における脚注の指定行長と基本版面の字詰め方向の長さとの差、又は多段組における脚注の指定行長と基本版面の1段の字詰め数の長さとの差は、行頭の字下げ量とする。

参考 脚注は、ページの末尾にしかも本文文字列との間に区切りのけい線を入れ配置するので、通常は注文字列の文字サイズ以上の字下げは行わない。d) 3) 項で規定した指定行長の長さの差が発生しない場合は、基本版面の指定行長と脚注の指定行長は同じになる。

- 4) 脚注が2行以上となった場合は、2行目以降の行頭の字下げの空き量を、注番号の先端より脚注の文字サイズで全角アキとするか、又は指定行長に対して1行目の行頭の字下げの空き量を全角アキとし、2行目以降の字下げは行わないで、指定行長とする。
- e) **本文文字列と脚注との間の処理** 本文文字列と脚注との間の処理は、次による
- 1) 本文文字列と脚注との間には、表けいの区切りけい線を配置することを既定値とする。1段組における区切りけい線の長さは、基本版面の横寸法の1/3を既定値とし、版面の左端を開始点とする。多段組における区切りけい線の長さは、1段の字詰め数による寸法の1/3を既定値し、1段の領域の左端を開始点とする。
 - 2) 区切りけい線と脚注との間の空き量は、脚注の行間よりやや広くすることが望ましい。
 - 3) 本文文字列と区切りけい線との間の最小の空き量は、基本版面の行間とする。
なお、区切りけい線を配置しない場合、本文文字列と脚注との間の最小の行間は、基本版面の行間よりやや広くすることが望ましい。
この場合における行送り方向の組版対象領域の領域調整の詳細は、9.11による。

9.6.5 傍注の処理

- a) **傍注の組方向と配置位置** 傍注の組方向と配置位置は、次による。
- 1) 傍注の組方向は、縦書きとする。
 - 2) **傍注の基本的な配置** 傍注は、見開きを1つの単位として扱い、その見開きについての合印に対応する傍注を、1段組においてはその見開きにおける奇数ページの版面内に配置し、多段組においてはその見開きにおける奇数ページの最下段の領域内に配置する。ただし、奇数ページの版面の末尾又は最下段の領域の末尾までに、対応する傍注の全部又は一部が入りきれない場合には、入りきれない傍注部分を、1段組においては直後の見開きにおける奇数ページの版面内に配置し、多段組においては直後の見開きにおける奇数ページの最下段の領域内に配置する。直後の見開きに新たな合印に対応した傍注がある場合には、直前の見開きで入りきれない傍注部分を先に配置する。奇数ページの版面内又は奇数ページの最下段の領域内に傍注を配置する方法は、次による。

備考1. 多段組においては合印が奇数ページの最下段の前に配置している場合において、対応する傍注の全部又は一部が入りきれないときには、合印がある直前まで傍注を配置する領域を広げてよい。

2. 1段組の場合において、改丁・改ページ等の指定がある見出しでくられた部分の最後に傍注が配置される場合は、奇数ページ、偶数ページにかかわらず、その部分の最後のページに

配置し、はみ出しは、次ページに配置する。多段組の場合において、改丁・改ページ等又は改段の指定がある見出しでくくられた部分の最後に傍注が配置される場合は、奇数ページ、偶数ページにかかわらず、その部分の最後のページの最終段に配置し、はみ出しは、次段に配置する。

- 2.1) 1 段組の場合** 1つの見開きにある最後の合印に対応する傍注の最終行の左端を、その見開きの奇数ページの版面の左端に接して配置する。

なお、同一の見開きに配置する本文文字列、傍注文字列及び区切りけい線のすべてを配置しても、見開きの領域に余白がある場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と区切りけい線との空き量及び区切りけい線と傍注との空き量の既定値を空けて傍注を配置し、余白を傍注の後に空ける。区切りけい線がない場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と傍注との行間の既定値を空けて傍注を配置し、余白を傍注の後に空ける。ただし、指定により、その見開き領域の余白分を、区切りけい線がある場合には本文文字列と区切りけい線との間に空け、区切りけい線がない場合には本文文字列と傍注との間に空け、傍注の最終行の左端をその見開きの奇数ページの版面の左端に接して配置してもよい。

- 2.2) 多段組の場合** 1つの見開きにある最後の合印に対応する傍注の最終行の左端を、その見開きの奇数ページの最下段の領域の左端に接して配置する。

なお、同一の見開きに配置する本文文字列、傍注文字列及び区切りけい線のすべてを配置しても、見開きの領域に余白がある場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と区切りけい線との空き量及び区切りけい線と傍注との空き量の既定値を空けて傍注を配置し、余白を傍注の後に空ける。区切りけい線がない場合には、**e)** 項に規定する本文文字列と傍注との行間の既定値を空けて傍注を配置し、余白を傍注の後に空ける。ただし、指定によって、その見開き領域の余白分を、区切りけい線がある場合には本文文字列と区切りけい線との間に空け、区切りけい線がない場合には本文文字列と傍注との間に空け、傍注の最終行の左端をその見開きの奇数ページの最下段の領域の左端に接して配置してもよい。

- 3) 2)** に規定する入りきれない傍注部分の処理を行う場合は、その見開きの版面又は段の傍注の最後、及び次の見開きの版面又は段に配置する脚注の先頭に矢印などのガイドをつけることが望ましい。特に分割して配置する傍注を偶数ページの版面又は偶数ページの最下段に配置する場合は、矢印などのガイドをつけることが望ましい。

なお、矢印などのガイドは、**d) 3)** に規定する指定行長の先頭に配置する。

- b) 傍注の文字サイズ** 傍注の文字サイズは、基本版面の文字サイズより 1 段階又は 2 段階程度小さくする。

- c) 注番号の処理** 注番号の処理は、次による。

- 1)** 注番号の番号は、合印と同一番号をアラビア数字で表記し、アラビア数字の前に**表 7**で規定する“(”をつけ、アラビア数字の後に**表 7**で規定する“)”をつけて配置することを既定値とする。

なお、注番号のアラビア数字の規定値は、連数字とし、連数字は縦中横処理を行い配置することを規定値とする（**図 = 参照**）。

- 2)** 注番号と注文字列との間の空き量の既定値は、傍注の文字サイズの全角アキとする。

- d) 傍注の段落整形処理** 傍注の段落整形処理は、次による。

- 1) 傍注の行間** 傍注の行間は、本版面の行間より狭くする。

- 2) 傍注の下端は、基本版面の下端にそろえて配置する。**

- 3) 字下げの空き量の既定値は、基本版面の文字サイズの2倍アキとする。また、傍注の指定行長は、傍注の文字サイズの整数倍にする。字下げと傍注の指定行長とを加算した長さ、1段組における字詰め方向の基本版面の長さとの差又は多段組における1段の字詰め方向の長さとの差は、行頭側にとり、字下げ量を調整する。
- 4) 傍注が2行以上となった場合は、2行目以降の行頭の字下げの空き量の既定値は、注番号の先端より傍注の文字サイズで2倍アキとする。
- e) **本文文字列と傍注との間の処理** 本文文字列と傍注との間の処理は、次による
- 1) 本文文字列と傍注との間には、表けいの区切りけい線を配置することを既定値とする。1段組における区切りけい線の長さは、基本版面の縦寸法の1/3を既定値とし、版面上端を開始点とする。多段組における区切りけい線の長さは、1段の字詰め数による寸法の1/3を既定値し、1段の領域の上端を開始点とする。
- 2) 区切りけい線と傍注との間の空き量は、傍注の行間よりやや広くすることが望ましい。
- 3) 本文文字列と区切りけい線との間の最小の空き量は、基本版面の行間とする。
- なお、区切りけい線を配置しない場合、本文文字列と傍注との間の最小の行間は、基本版面の行間よりやや広くすることが望ましい。
- この場合における組版対象領域の領域調整の詳細は、9.11による。

9.7 図・写真等の処理

9.7.1 図・写真等の構成 図・写真等は、図・写真等の本体、キャプション及び注記で構成する（図 35 参照）。

- a) 図・写真等の本体のサイズは、画像を内包する最小の長方形とする。
- b) キャプションは、図番号及びキャプション文字列で構成し、図番号はラベル名及び番号で構成する。ただし、図番号は、必須要素ではなく、省略できるものとする。
- c) 注記は、注記番号及び注記文字列で構成し、注記番号は、番号及び前後につける括弧類で構成する。
- d) 図・写真等のブロックは、9.7.2に規定する処理方法でキャプション及び注記を組版した結果、並びに図・写真等の本体をすべて内包する最小の長方形とする。

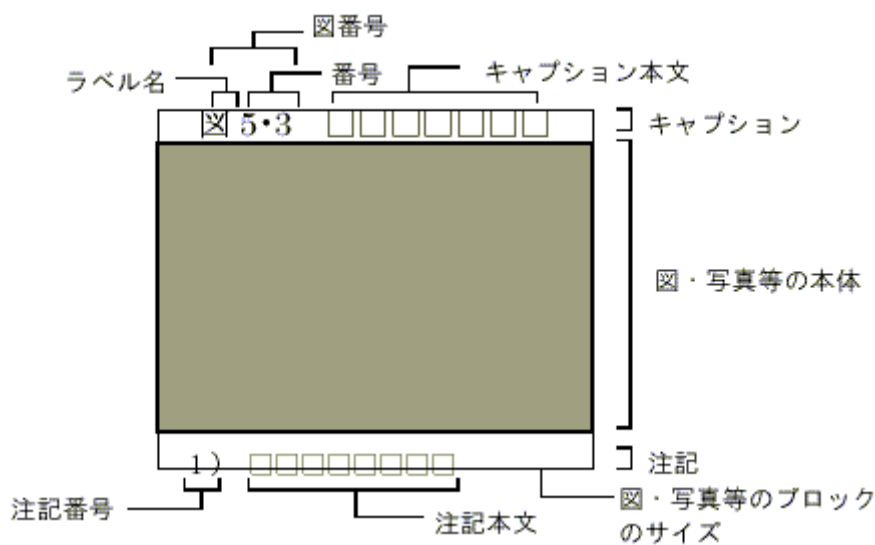


図 35 図・写真等の構成

- e) 見開きの指定がある場合を除いて、図・写真等のブロックは、複数ページに分割をしてはならない。また、多段組に配置する図・写真等のブロックは、行送り方向について、複数段に分割をしてはならない（図 36 参照）。

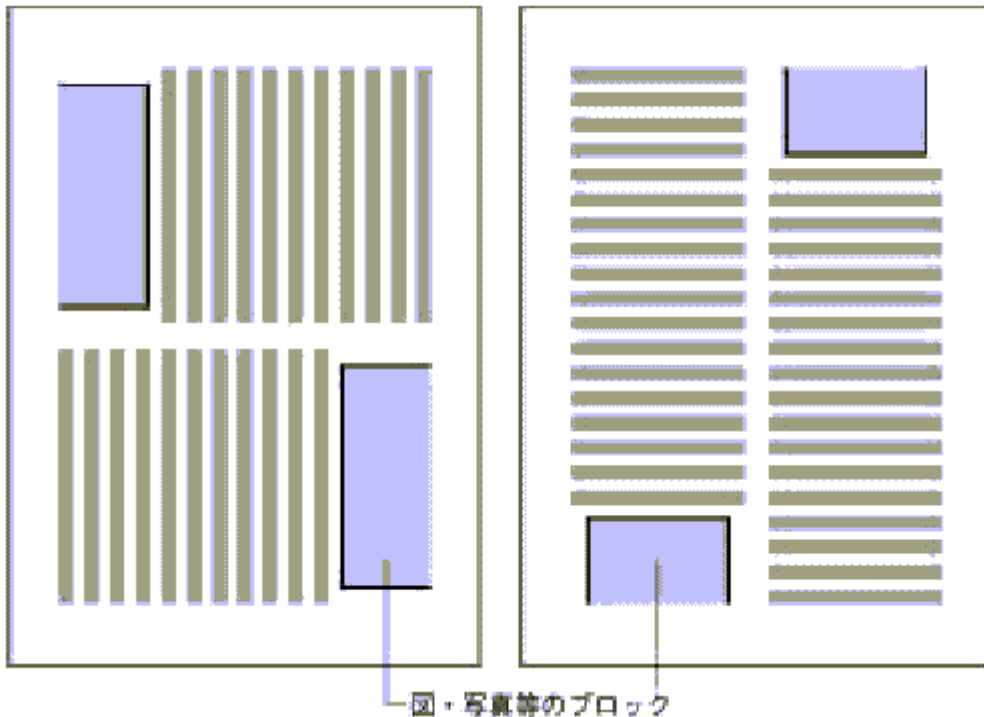


図 36 図・写真等のブロックは、段組では行送り方向に分割しない

備考1. キャプション及び注記は、図・写真等の本体に含ませてもよい。

2. 図・写真等の領域（JIS X 4052 の 6.7 参照）として、図・写真等の本体に限るか、図・写真等の本体、キャプション及び注記をすべて含むか、又は指定によるかは、処理系定義とする。

9.7.2 図・写真等のキャプション及び注記の処理 図・写真等のキャプション及び注記の処理は、次による。

a) キャプション及び注記の配置位置及び組方向

- 1) キャプション及び注記の組方向の既定値は、横書きとする。
- 2) キャプションの配置位置は、全ての図・写真等において注記を含まない場合は図・写真等の本体の下側とし、注記を含む図・写真等がある場合は図・写真等の本体の上側に配置することを既定値とする。
- 3) 注記の配置位置の既定値は、図・写真等の下側とする。
- 4) キャプション及び注記の組方向を横書きとした場合は、キャプション及び注記の指定行長は、図・写真等の本体の左右サイズよりは短くする。
- 5) 図・写真等の本体とキャプション及び注記との間の空き量は、キャプションに使用する文字サイズの全角アキ以下二分アキ以上とする。

b) キャプション及び注記の文字サイズ、書体、段落整形等

1) キャプション

- 1.1) キャプションの文字サイズは、基本版面の文字サイズよりは 1 段階小さくすることが望ましい。
- 1.2) 横書きとするキャプションの図番号のラベル名及び番号の既定値は、次による。

- 1.2.1) 図番号のラベル名は，“図”とし，書体は角ゴシック体とする。
- 1.2.2) 図番号の番号は，アラビア数字表記による大見出しの番号及び図・写真等の番号とし，大見出しの番号と図・写真等の番号との字間に，表 8 に規定する中点をベタ組で配置する。なお，アラビア数字の書体は，サンセリフ系とする。

表 8 中点

X 0221-1_ブロック名名前 X 0213 の面区点番号日本語通用名称（参考）字形
30FB_KATAKANA_KATAKANA MIDDLENT_1-1-6_中点・

- 1.2.3) 図番号のラベル名と番号との字間の空き量は，キャプションの文字サイズの四分アキとする。
- 1.3) 図番号がある場合の図番号とキャプション文字列との字間の空き量は，キャプションの文字サイズの全角アキとする。
- 1.4) キャプションを 2 行以上にする場合の処理は，次による。
 - 1.4.1) 行間は，キャプションに使用する文字サイズの二分アキ以下四分アキ以上とする。
 - 1.4.2) 2 行目以降の行頭位置の既定値は，図番号がある場合は，1 行目の図番号の後端にそろえ，図番号がない場合は，1 行目の行頭より 2 行目以降の行頭を下げ，その下げる空き量はキャプションに使用する文字サイズの全角アキとする。

2) 注記

- 2.1) 注記の文字サイズは，キャプションと同じか又は 1 段階小さくすることが望ましい。
- 2.2) 横書きとする注記番号の番号と前後につける括弧類の既定値は，次による。
 - 2.2.1) 注記番号の番号は，アラビア数字表記とし，その後には表 7 で規定する“)”をつける。
 - 2.2.2) 番号と“)”との字間は，ベタ組とする。
- 2.3) 注記番号と注文字列との間の空き量の既定値は，注記の文字サイズの全角アキとする。
- 2.4) 注記を 2 行以上にする場合の処理は，次による。
 - 2.4.1) 行間は，注記に使用する文字サイズの二分アキ以下四分アキ以上とする。
 - 2.4.2) 注記の 2 行目以降の行頭位置の既定値は，1 行目の行頭より 2 行目以降の行頭を下げ，その下げる空き量はキャプションに使用する文字サイズの全角アキとする。

9.7.3 図・写真等のブロックのページ内での配置 図・写真等のブロックのページ内での配置は，絶対位置指定による配置又は相対位置指定による配置とする。

a) 絶対位置指定による図・写真等のブロック配置

- 1) 絶対位置指定による図・写真等のブロックは，ページ内のどこに指定が出現しても，指定が出現した版面又は指定が出現した見開きをユニットとする領域からの絶対的な位置に図・写真等のブロックを配置する。
- 2) 版面を基準とする絶対位置指定による図・写真等のブロックの配置
 - 2.1) 小口又はのどからの位置指定がない場合は，次の指定位置に図・写真等のブロックを配置する（JIS X 4052 の 6.7 の b) 参照）。
 - 2.1.1) 上下の配置位置は，次にいずれかとする。
 - 2.1.1.1) 版面の上端から図・写真等のブロックの上端までの距離について指定された位置
 - 2.1.1.2) 版面の下端から図・写真等のブロックの下端までの距離について指定された位置
 - 2.1.2) 左右の配置位置は，次にいずれかとする。
 - 2.1.2.1) 版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの距離について指定された位置
 - 2.1.2.2) 版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの距離について指定された位置

- 2.2) 右とじ又は左とじの場合において、左右の配置位置について小口又はのどからの位置指定があったときは、次の版面の端からの指定位置に図・写真等のブロックを配置する。上下の配置位置は、2.1.1) による。
- 2.2.1) 縦書きの場合で小口からの指定のとき
- 2.2.1.1) 右ページ（偶数ページ）の場合は、版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの指定された距離について位置
- 2.2.1.2) 左ページ（奇数ページ）の場合は、版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの指定された距離について位置
- 2.2.2) 縦書きの場合で“のど”からの指定のとき
- 2.2.2.1) 右ページ（偶数ページ）の場合は、版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの指定された距離について位置
- 2.2.2.2) 左ページ（奇数ページ）の場合は、版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの指定された距離について位置
- 2.2.3) 横書きの場合で小口からの指定のとき
- 2.2.3.1) 右ページ（奇数ページ）の場合は、版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの指定された距離について位置
- 2.2.3.2) 左ページ（偶数ページ）の場合は、版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの指定された距離について位置
- 2.2.4) 横書きの場合で“のど”からの指定のとき
- 2.2.4.1) 右ページ（奇数ページ）の場合は、版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの指定された距離について位置
- 2.2.4.2) 左ページ（偶数ページ）の場合は、版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの指定された距離について位置
- 2.3) 絶対位置指定による図・写真等のブロックを配置するページは、A 及び B の図・写真等の指定がある行の出現位置、並びに a 及び b の距離により決定する。A 及び B、並びに a 及び b は、次による。
- A : 図・写真等のブロックを配置する以前に出現した図・写真等の指定がある行の位置。
- a : A の場合における指定の出現位置から、1 段組では版面の末尾までの行送り方向の距離、多段組では最終段の領域の末尾までの行送り方向の距離（図 37 参照）。

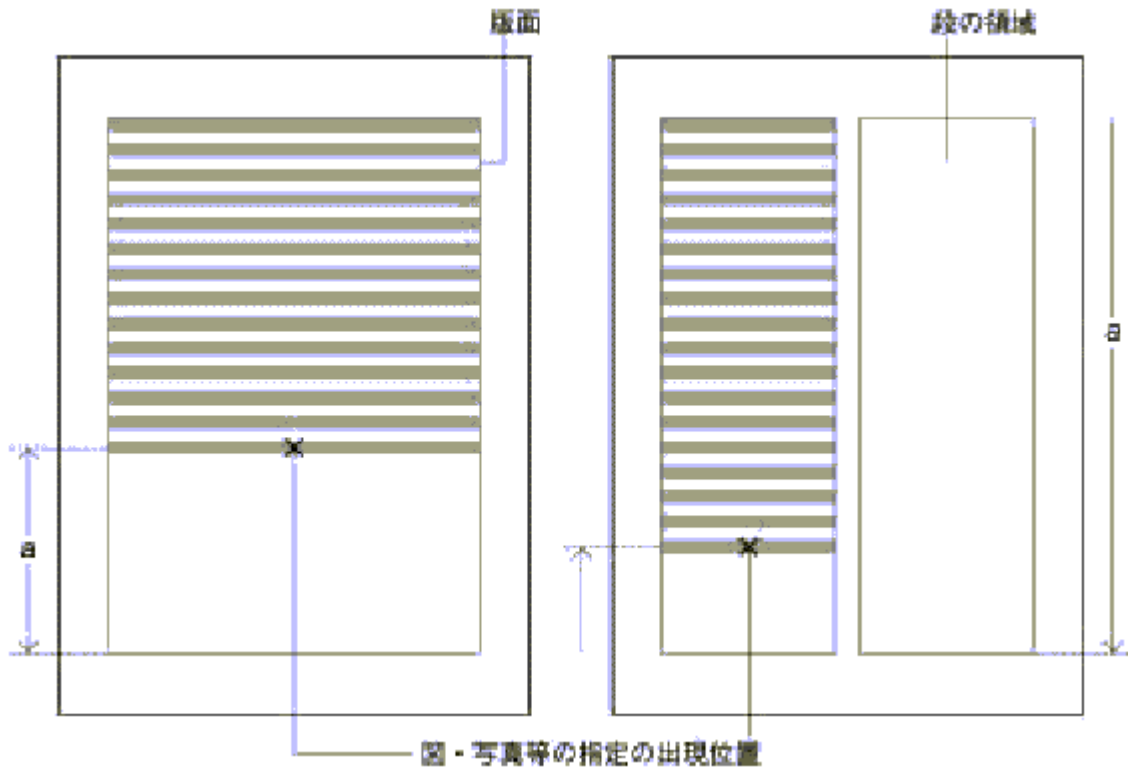


図 37 A の位置と距離 a

B : 図・写真等の指定が出現したページの指定位置に図・写真等のブロックを配置し，そのうえで本文文字列を再配置した場合の図・写真等の指定がある行の位置。

b : B の場合における指定の出現位置から，1 段組では版面の先頭までの行送り方向の距離，多段組では先頭の段の領域の先頭までの距離（図 38 参照）。

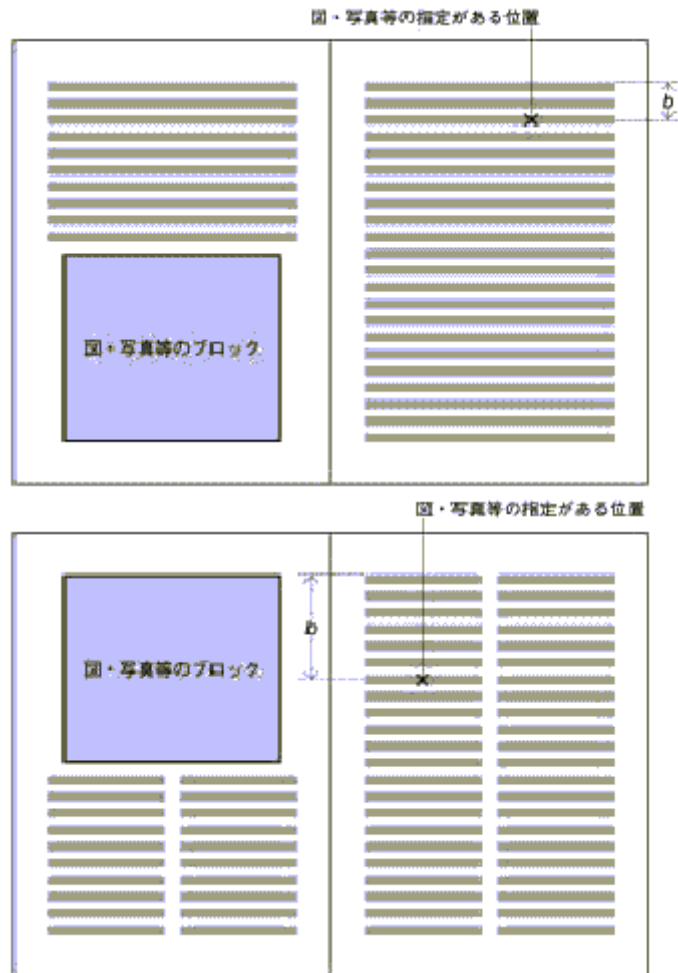


図 38 B の位置と距離 b

備考1. a 及び b の距離を計算する場合の図・写真等の指定がある行の位置は、行の中心からとする。

2. a 及び b の距離の計算においては、すでに配置してある絶対配置の図・写真等のブロックがあった場合は、その領域を除外して計算する。

2.3.1) B の位置と A の位置が同一ページの場合は、そのページに図・写真等のブロックを配置する。

2.3.2) B の位置が A の位置の次ページの場合

2.3.2.1) a と b との関係が次の場合は、A の出現位置のページに図・写真等のブロックを配置する。

$$a \geq 2b$$

2.3.2.2) a と b との関係が次の場合は、B の出現位置のページに図・写真等のブロックを配置する。

$$a < 2b$$

3) 見開きをユニットとする領域を基準とする絶対位置指定による図・写真等のブロックの配置

3.1) 見開きをユニットとする領域を基準として、次の指定位置に図・写真等のブロックを配置する。

3.1.1) 上下の配置位置は、**2.1.1)** による。

3.1.2) 左右の配置位置は、次にいずれかとする。

3.1.3) 左ページの版面の左端から図・写真等のブロックの左端までの距離について指定された位置

3.1.4) 右ページの版面の右端から図・写真等のブロックの右端までの距離について指定された位置

3.2) 絶対位置指定による図・写真等のブロックを配置する見開きのユニットのページは、A 及び B の

図・写真等の指定がある行の出現位置，並びに a 及び b の距離により決定する。A 及び B，並びに a 及び b は，次による。

A : 図・写真等のブロックを配置する以前に出現した図・写真等の指定がある行の位置。

a : A の場合における指定の出現位置から，縦書きの 1 段組では左ページの末尾までの行送り方向の距離，横書きの 1 段組では右ページの末尾までの行送り方向の距離，縦書きの多段組では左ページの最終段の領域の末尾までの行送り方向の距離，横書きの多段組では右ページの最終段の領域の末尾までの行送り方向の距離（図 39 参照）。

図 39

B : 図・写真等の指定が出現した見開きユニットの指定位置に図・写真等のブロックを配置し，そのうえで本文文字列を再配置した場合の図・写真等の指定がある行の位置。

b : B の場合における指定の出現位置から，縦書きの 1 段組では右ページの先頭までの行送り方向の距離，横書きの 1 段組では左ページの先頭までの行送り方向の距離，縦書きの多段組では右ページの先頭の段の領域の先頭までの行送り方向の距離，横書きの多段組では左ページの先頭の段の領域の先頭までの行送り方向の距離（図 40 参照）。

図 40

備考 a 及び b の距離を計算する場合の図・写真等の指定がある行の位置は，行の中心からとする。

3.2.1) B の位置と A の位置が同一見開きのユニットの場合は，その見開きのユニットに図・写真等のブロックを配置する。

3.2.2) B の位置が A の位置の次の見開きのユニットの場合

3.2.2.1) a と b との関係が次の場合は，A の出現位置の見開きのユニットに図・写真等のブロックを配置する。

$$a \geq 2b$$

3.2.2.2) a と b との関係が次の場合は，B の出現位置の見開きのユニットに図・写真等のブロックを配置する。

$$a < 2b$$

4) 図・写真等のブロックを配置する場合の回り込みは，次による。

4.1) 回り込みは，図・写真等のブロックの片側だけに行う。

4.2) 図・写真等のブロックと回り込みする本文文字列との間の字詰め方向の最小の空き量は，基本版面の文字サイズの全角アキとする。ただし，図・写真等のブロックと回り込みする本文文字列との間の字詰め方向の最小の空き量が指定されている場合は，それによる。

4.3) 回り込みする本文文字列の指定行長は，回り込みの最初に配置される本文文字列の文字サイズの整数倍とし，組版対象領域の回り込みの余白と，回り込みする本文文字列の指定行長との差は，図・写真等のブロックと回り込みする本文文字列との間の字詰め方向の最小の空き量に追加する。

4.4) 回り込みする本文文字列の前後に配置する行は，その段落属性で指定された行間で，回り込みする本文文字列に連続して配置する。ただし，図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の空き量は，基本版面の行間又は図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量の指定がある場合はその空き量を最小限確保する。

- 4.5) 回り込みする本文文字列の指定行長が基本版面で指定した指定行長の1/4以下又は9字以下のいずれかに該当する場合は、回り込みを行ってはならない。
- 5) 回り込みを行わない図・写真等のブロックを配置する場合、又は複数の段にまたがって図・写真等のブロックを配置する場合の本文文字列は、図・写真等のブロックを飛び越して流れるように配置する。
- 6) 回り込みを行わない場合の図・写真等のブロックとその前及び後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は、基本版面の行間とする。ただし、図・写真等のブロックとその前及び後に配置する行との行送り方向の最小の空き量が指定されている場合は、それによる。

なお、図・写真等のブロックの後に配置する行の位置は、行間若しくは指定された最小の空き量で配置する方法、又は行間若しくは指定された最小の空き量を確保したうえで最初に配置される基本版面の行の配置位置に配置する方法のいずれかとする（＝参照）。この場合における組版対象領域の領域調整の詳細は、9.11による。

備考1. 図・写真等のブロックと行送り方向に並べて配置する図・写真等のブロック及び表のブロックとの空き量も4.4)及び6)と同様とする。

2. 図・写真等のブロックと回り込みする本文文字列との間の字詰め方向の空き量は、図・写真等のブロックの端と隣接する本文文字列の文字の外枠の端との距離とする。図・写真等のブロックの前後に配置する行との間の行送り方向の空き量は、図・写真等のブロックの端と隣接する行の段落で指定された文字サイズの外枠の端との距離とする。b)の相対位置指定の場合においても同様とする。

参考 図・写真等のブロックと回り込みする本文文字列との間の字詰め方向の空き量及び図・写真等のブロックの前後に配置する行との間の行送り方向の空き量は、基本版面の行間及び図・写真等の内容により異なるが、通常は基本版面の文字サイズの1.5倍くらいにすることが望ましい。一般に図・写真等のサイズについては、数ミリ程度の修正は簡単に行える場合も多いので、この空き量を考慮して設計段階で図・写真等のサイズを決定するのがよい。これはb)の相対配置の場合でも同じである。

b) 相対位置指定による配置

- 1) 相対位置指定による図・写真等のブロックは、本文段落などの流れとともに出現した指定の場所に追従して配置し（JIS X 4052の6.7のb)参照）、その配置位置の基準は、次による。
- 1.1) 配置位置の基準は、図・写真等の指定が出現した行とする。ただし、本文段落などとは独立して図・写真等を指定した場合は、直前に位置する行とする。
- 1.2) 縦書きにおいては配置の基準とする行の左側に、横書きにおいては配置の基準とする行の下側に、4)に規定する空き量を確保し、図・写真等のブロックを配置する。
- 2) 相対位置指定における行送り方向の図・写真等のブロックのサイズは、行送り方向の版面寸法を超えてはならない。字詰め方向の組版対象領域を超えてはならず、また、字詰め方向の組版対象領域をはみ出して配置してはならない。
- 3) 回り込みは、a) 4) 4.1) 4.2) 4.3)による。
- 4) 図・写真等のブロックとその前及び後に配置する行との間の行送り方向の空き量は、次による。
- 4.1) 回り込みする本文文字列の前後に配置する行は、その段落で指定された行間で、回り込みする本文文字列に連続して配置する。図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は、配置する本文文字列に指定されている行間、若しくは本文文字列に行間が

指定されていない場合には基本版面の行間，又は図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量が指定がある場合にはその指定された最小の空き量を最小限確保する。

なお，図・写真等のブロックとその前及び後に配置する行との間の行送り方向の空き量が異なる場合には，図・写真等のブロックの位置を調整し，前の空き量と後の空き量とを均等にする（図41参照）。

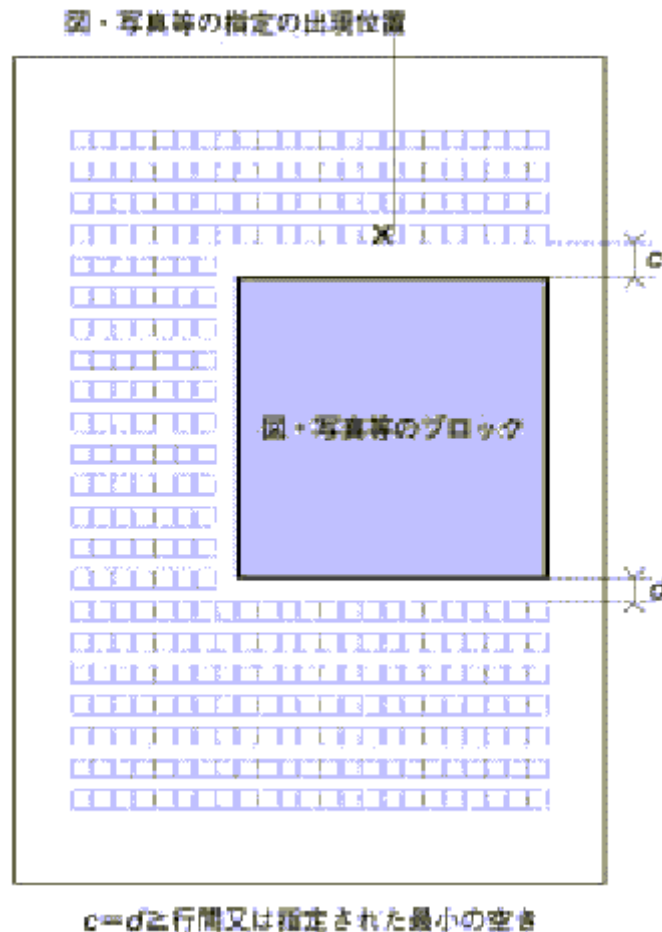


図 41 回り込みが行われる場合の図・写真等のブロックと前後の行との空き

- 4.2) 回り込みを行わない場合は，次のいずれかとする。
- 4.2.1) 図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は，配置する本文文字列に指定されている行間，若しくは本文文字列に行間が指定されていない場合には基本版面の行間，又は図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量が指定がある場合にはその指定された最小の空き量とする。この場合における組版対象領域の領域調整の詳細は，9.11による。
- 4.2.2) 図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は，配置する本文文字列に指定されている行間，若しくは本文文字列に行間が指定されていない場合には基本版面の行間，又は図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量が指定がある場合にはその指定された最小の空き量とする。ただし，後に配置する行は，その最小の空き量以上で，かつ基本版面の行の配置位置に最も近い行の位置に配置する。また，図・

写真等のブロックの前の空き量と後の空き量とが異なった場合には、図・写真等のブロックの位置を調整し、前の空き量と後の空き量とを均等にする（**図 42** 参照）。

図 42

参考 回り込みを行わない場合は、横書きでは通常左右中央に図・写真等のブロックを配置する。

4.3) 組版対象領域の先頭又は末尾における図・写真等のブロックの配置

4.3.1) 図・写真等の指定が、組版対象領域の最終行に出現した場合には、次の組版対象領域の先頭に図・写真等のブロックを接して配置する。

4.3.2) 組版対象領域の末尾近傍に位置した図・写真等のブロックの末尾と組版対象領域の末尾との間の余白が、図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量と 1 行の幅とを加算した値未満の場合には、版面の末尾に図・写真等のブロックを接して配置し、余白は図・写真等のブロックの前に追加する。

4.3.3) 本文の先頭、又は改丁・改ページ等若しくは改段の指定がある箇所の直後に図・写真等の指定が出現する場合において直前に位置する行がないときは、組版対象領域の行送り方向の先端を基準として図・写真等のブロックを配置する。

備考 図・写真等のブロックと行送り方向に並べて配置する図・写真等のブロック、表のブロックとの空き量も **4.1)** 及び **4.2)** と同様とする。

参考 組版対象領域の先頭一杯又は組版対象領域の末尾一杯にそろえて図・写真等のブロックを配置する場合は、図・写真等のブロックの絵柄によっては、図・写真等のブロックと組版対象領域の先頭との間又は組版対象領域末尾との間に 1mm 程度の空き量をとった方が体裁がよい場合がある。

5) 1), 2), 3) 4.1) 及び 4.2) により配置した結果、図・写真等のブロックが行送り方向の組版対象領域からはみ出した場合は、はみ出した C 又は D の位置、並びに e 及び f の距離により決定する。C 及び D、並びに e 及び f は、次による。

C の位置 : $e \geq 2f$

D の位置 : $e < 2f$

e : 版面の領域内に配置される図・写真等のブロックの行送り方向の寸法。

f : 版面の領域から行送り方向にはみ出した図・写真等のブロックの寸法。

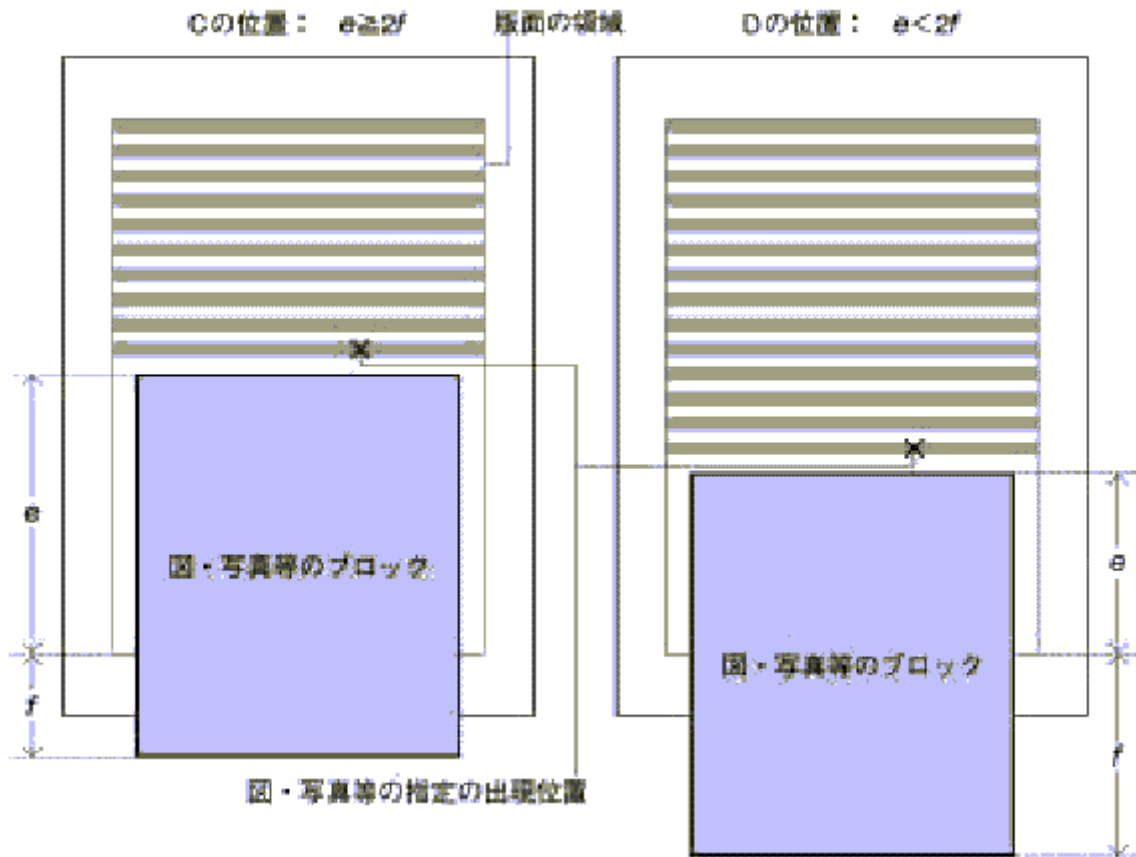


図 43 相対配置の図・写真等のブロックが版面よりはみ出した場合

- 5.1) 図・写真等のブロックが C の位置にある場合は (図 44 参照), 指定が出現したページ又は指定が出現した段の組版対象領域の末尾に図・写真等のブロックを接して配置する。この図・写真等の移動によって図・写真等のブロック又は図・写真等のブロックとその前後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量と重なる行は, 1 段組においては次ページに, 多段組においては次段に追い出す。
- 5.2) 図・写真等のブロックが D の位置にある場合は (図 43 参照), 図・写真等のブロックを組版対象領域の先頭に接して配置し, 空いた部分には, 指定が出現した行に続く本文文字列を配置する。
- 備考** 5) により組版対象領域の先頭又は組版対象領域の末尾に配置する場合も, 4.3.1) 及び 4.3.2) の規定による。
- 6) 1), 2) 及び 3) により配置した結果, 図・写真等のブロックの前又は後に本文文字列が 1 行だけ配置された場合は, 次による。
- 6.1) 前に 1 行だけ配置された場合は, 図・写真等のブロックを組版対象領域の先頭に接して配置し, 前に位置した 1 行は, 図・写真等のブロックの後に配置する。
- 6.2) 後に 1 行だけ配置された場合は, 図・写真等のブロックを 1 組版対象領域の末尾に接して配置し, 後に位置した 1 行は, 図・写真等のブロックの前に配置する。
- 6.3) 前及び後に 1 行だけ配置された場合は, 図・写真等のブロックを組版対象領域の先頭に接して配置し, 前に位置した 1 行及び後に位置した 1 行は, 図・写真等のブロックの後に配置する。
- 6.4) 組版対象領域に図・写真等のブロックとその前又は後に 1 行だけ配置された場合は, 図・写真等

のブロックを組版対象領域の先頭に接して配置し、その 1 行は次の組版対象領域に追い出しす。
この場合の図・写真等のブロックを配置した組版対象領域の行送り方向の領域調整は、**9.11** による。

- c) **絶対位置指定及び相対位置指定による配置の優先順位** ブロック類の絶対位置指定及び相対位置指定、並びに表のブロックの連続位置指定による配置の優先順位は、次による。
- 1) 絶対位置指定、相対位置指定及び連続位置指定による配置の優先順位は、ブロック類の指定が出現した順序による。
 - 2) 絶対位置指定のブロック類がすでに配置してある他のブロック類又はその周囲の最小の空き量と重なる場合の処理は、次による。
 - 2.1) 後から配置するブロック類が版面を基準とする絶対位置指定によるブロック類の場合は、後から配置するブロック類を重ねない位置の後ろのページに移動して配置する。
 - 2.2) 後から配置するブロック類が見開きをユニットとする領域を基準とする絶対位置指定によるブロック類の場合は、後から配置するブロック類を重ねない位置の後ろの見開きに移動して配置する。
 - 3) 相対位置指定のブロック類がすでに配置してある他のブロック類又はその周囲の最小の空き量と重なった場合は、先に配置するブロック類の直後に最小の空き量を確保して配置する。
 - 4) 連続位置指定のブロック類がすでに配置してある他のブロック類又はその周囲の最小の空き量と重なった場合は、次による。
 - 4.1) 連続位置指定のブロック類の先頭位置で重なる場合は、重ねない位置まで連続位置指定のブロック類を移動し、先に配置されて重なったブロック類の直後に、最小の空き量を確保して配置する。
 - 4.2) 連続位置指定のブロック類の途中で重なる場合は、**9.8.7 c) 2)** 及び **=.=.=** の規定に基づき重ねない位置で分割し、配置する。

9.8 表処理

9.8.1 表の構成 表は、表の全体、キャプション及び注記で構成する（**図 44** 参照）。

- a) 表の全体は、表のけい線、表の行、表の列、こま、こま余白及びこま内容で構成する。
- b) 見出しとして扱う表の行を表のヘッダー行と呼び、見出しとして扱う表の列を表のヘッダー列と呼ぶ。
- c) キャプションは、表番号及びキャプション文字列で構成し、表番号はラベル名及び番号で構成する。ただし、表番号は、必須要素ではなく、省略できるものとする。
- d) 注記は、注記番号及び注記文字列で構成し、注記番号は番号及びくくり符号で構成する。
- e) 表のブロックは、**9.8.2～9.8.6** に規定する処理方法で、表の全体、キャプション及び注記を組版した結果をすべて内包する最小の長方形とする。

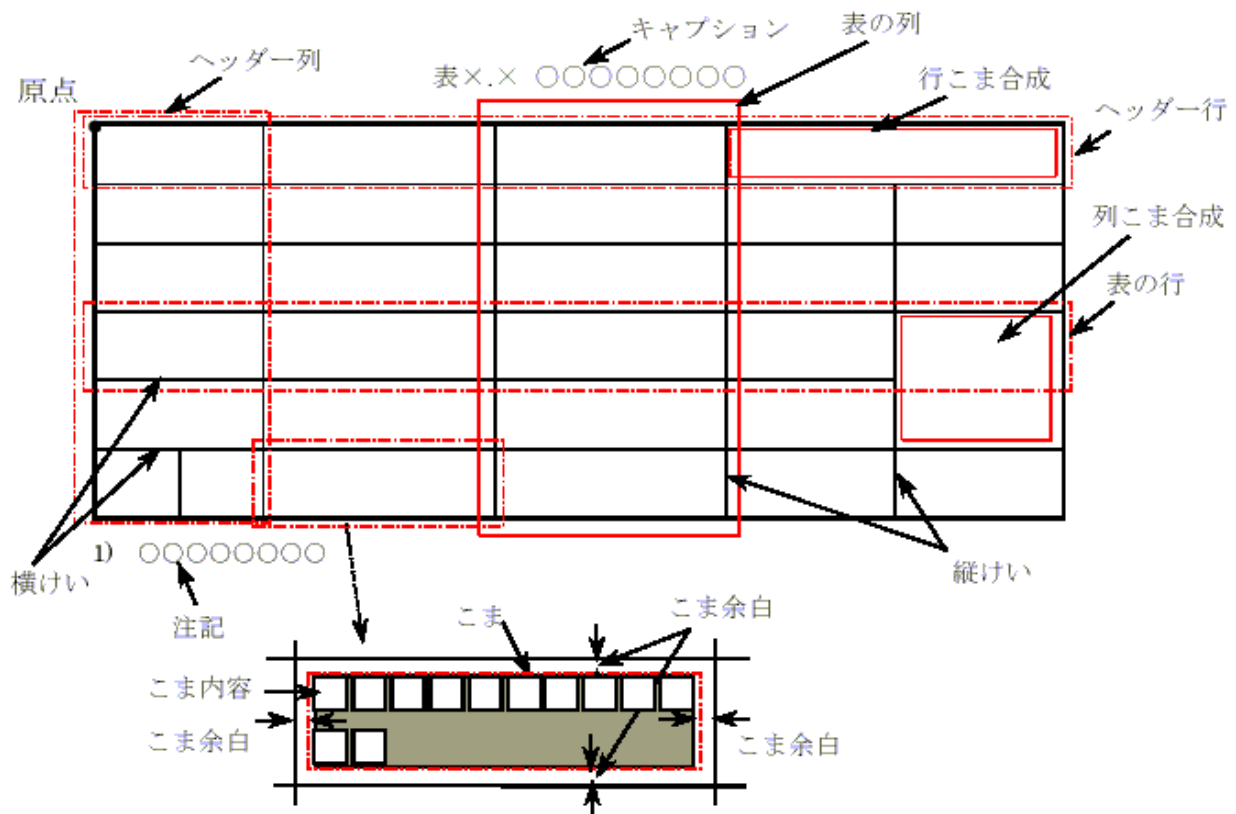


図 44 表の構成 (横書きの例)

9.8.2 表の全体の処理 表の全体の処理は、次による。

a) 表の全体の組方向 表の全体の組方向は、横書き又は縦書きとし、それぞれの原点の位置、表の行/列とこまの関係及びこま内容の配置順序は、次による。

1) 横書きの場合

1.1) 横書きの表の全体は、基本版面が横書き又は縦書きの本文中に配置する。

1.2) 原点は、表の全体の左上とする。

1.3) 隣接する横けいで囲まれる領域を表の行、隣接する縦けいで囲まれる領域を表の列とする。

1.4) こま内容の配置順序は、一つの表の行の中では左のこまから右のこまへの順序とし、表の行については上の行から下の行への順序とする。ただし、列こま合成されたこまを含む表の行においては、そのこまを含む先頭の表の行に限りこま内容を配置し、その他の表の行では、そのこまには、こま内容を配置しない。

2) 縦書きの場合

2.1) 縦書きの表の全体は、主として、基本版面が縦書きの本文中に配置する。

2.2) 原点は、表の全体の右上とする。

2.3) 隣接する縦けいで囲まれる領域を表の行、隣接する横けいで囲まれる領域を表の列とする。

2.4) こま内容の配置順序は、一つの表の行の中では上のこまから下のこまへの順序とし、表の行については右の行から左の行への順序とする。ただし、列こま合成されたこまを含む表の行においては、そのこまを含む先頭の表の行に限りこま内容を配置し、その他の表の行では、そのこまには、こま内容を配置しない。

図 45

- b) **表の行** 表の行の幅は、表の行の始まりで1度だけ最小の幅を指定し、その最小の幅の既定値は、0とする。こまにこま内容が入りきらない場合の処理は、**9.8.4**による。
- c) **表の列** 表の列の幅は、表の始まりで1度だけ指定し、途中で変更してはならない。
- d) **表のヘッダ行** 表のヘッダ行は、先頭の表の行を含む、1行以上の連続する表の行で構成する。どの表の行までをヘッダ行とするか、又はヘッダ行を持たないかは、指定による。
- e) **表のヘッダ列** 表のヘッダ列は、先頭の表の列を含む、1列以上の連続する表の列で構成する。どの表の列までをヘッダ列とするか、又はヘッダ列を持たないかは、指定による。
- f) **こまの合成** 指定により行こま合成及び/又は列こま合成としてこまを合成し、一つのこまとしてもよい。行こま合成は、表の全体の組方向の字詰め方向にこまを合成し、列こま合成は、表の全体の組方向の行送り方向にこまを合成する。ただし、合成されたこまは長方形としなければならない。また、表のヘッダ行と通常の表の行、又は表のヘッダ列と通常の表の列にまたがる合成は、してはならない。
- g) **表のけい線** 表のけい線は、表の行の境界のけい線、表の列の境界のけい線及び表の全体を囲む外枠のけい線で構成し、表のけい線の既定値は、表（おもて）けいとする。

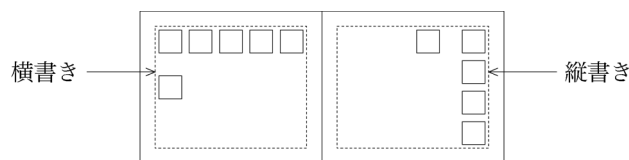
参考 表のけい線は、その効果が大きく、表の内容にもよるが、必要な部分に限定して使用し、できるだけ不可視とするのがよい。例えば、表の全体の組方向を横書きとする場合は、ヘッダ行以外の通常の表の行を区切る横けい、及び左右の外枠のけい線は、なるべく不可視とするのがよい。

9.8.3 こま内容の処理 こま内容の処理は、次による。

- a) **こま内容の組方向** こま内容の組方向は、表の全体の組方向と同一とする。

なお、こま内容の組方向は、指定により表の全体の組方向と異なる組方向としてもよい。ただし、一つのこま内容の組方向は、横書き又は縦書きのどちらか一方とし、混在してはならない。

例



- b) **こま内容の配置方法** こま内容の組方向が横書きの場合は、こまの左辺を行頭、右辺を行末、上辺をこま頭、下辺をこま末とし、こま内容の組方向が縦書きの場合は、こまの上辺を行頭、下辺を行末、右辺をこま頭、左辺をこま末としてこま内容を配置する。
- c) **こま内容の基本的な配置** こま内容の基本的な配置は、**5, 7.1~7.13, 7.15~7.19, 9.1** 及び **9.5** の規定によって配置する。

なお、こま内容の文字サイズは、基本版面の文字サイズより1段階小さくするのが望ましい。また、こま内容が2行以上になる場合の行間は、こま内容に使用する文字サイズの二分アキ以下四分アキ以上が望ましく、不可視とするけい線で接する連続するこまのこま余白の合計より狭くする。

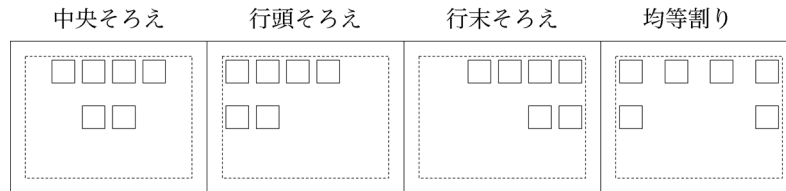
参考 ヘッダ行において、こま内容が1行のこまと2行以上のが混在する場合は、こま内容の行間を空けないこともある。特に表の行の個数が少ない場合は、全てのこま内容が複数行のときにも、こま内容の行間を空けないことがある。

- d) **こま内容のそろえ** こま内容のそろえは、次による。

- 1) **中央そろえ** 中央そろえは、**7.14 a)** による。

- 2) 行頭そろえ 行頭そろえは, 7.14 b) による。
- 3) 行末そろえ 行末そろえは, 7.14 c) による。
- 4) 均等割り 均等割りは, 7.14 d) による。

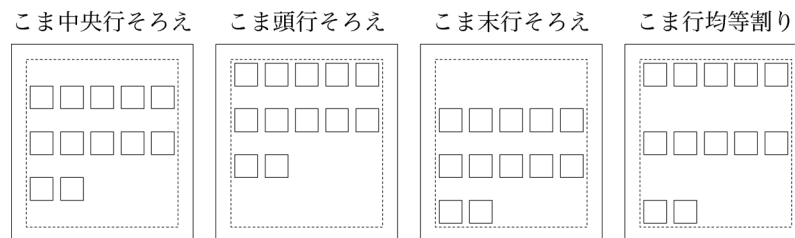
例 横書きの場合



e) こま内容の行のそろえ a), b), c) 及び d) によって配置した後, こま内容の行のそろえは, 次による。

- 1) こま中央行そろえ こま中央行そろえは, こま頭側とこま末側を均等に空けて, こま内容全体をこまの中央に配置する。
- 2) こま頭行そろえ こま頭行そろえは, こま内容の先頭行がこま頭にそろうように, こま末側を空けてこま内容全体を配置する。
- 3) こま末行そろえ こま末行そろえは, こま内容の最終行がこま末にそろうように, こま頭側を空けてこま内容全体を配置する。
- 4) こま行均等割り こま行均等割りは, こま内容の先頭行をこま頭に, こま内容の最終行をこま末にそろえ, 行間を均等に空けて, こま内容全体を配置する。ただし, こま内容が 1 行だけの場合は, こま頭側とこま末側を均等に空けて, こま内容をこまの中央に配置する。

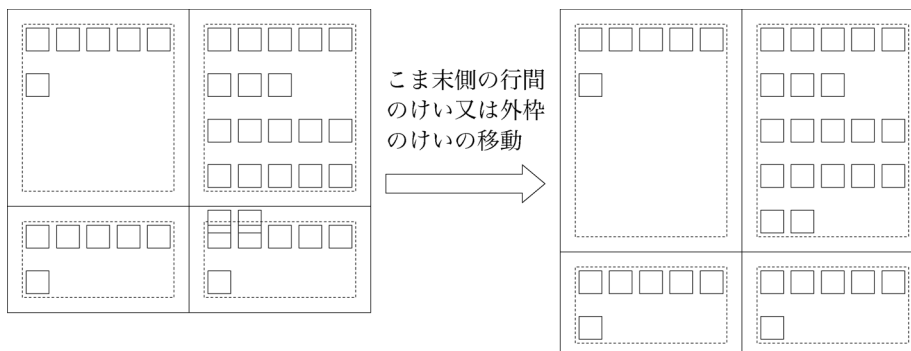
例 横書きの場合



9.8.4 こま内容がこまに入りきらない場合の処理 こま内容がこまに入りきらない場合の処理は, 次による。

- a) こま内容がこまに入りきらない場合は, 表の全体が横書きのときは, こまの下側の横けいを移動し, 表の全体が縦書きのときは, こまの左側の縦けいを移動して, こまの大きさを大きくする。

例 表の全体の組方向が横書きの場合



- b) けい線を移動する場合は、一つの表の行に並ぶこまのうち、一番こま内容が多いこまに合わせて、表の端から端までけい線全体を移動する。こまが合成され、けい線が分断された場合でも、一つのけい線として連動して移動する。

図 46

- c) 列こま合成したこまのこま内容が入りきらない場合において、けい線を移動するときは、その列こま合成したこまに含まれるそれぞれの表の行の幅が平均に広がるように、各けい線を移動する。

図 47

9.8.5 こま余白の処理 こま余白の処理は、次による。

- a) こまの行頭側及び行末側のこま余白は、こま内容に使用する文字サイズの二分アキ以上が望ましい。
- b) 可視のけい線を用いたこま頭側及びこま末側のこま余白は、こま内容に使用する文字サイズの二分アキを既定値とする。
- c) 不可視のけい線を用いたこま頭側及びこま末側のこま余白は、こま内容に使用する文字サイズの四分アキを既定値とする。ただし、こま頭側及びこま末側と、不可視にする外枠のけい線との間のこま余白は、こま内容に使用する文字サイズの二分アキを既定値とする。

9.8.6 表のキャプション及び注記の処理 表のキャプション及び注記の処理は、次による。

- a) キャプション及び注記の組方向は、表の全体の組方向と同一とする。
- b) キャプション及び注記の配置位置
- 1) 表の全体が横書きのキャプションの配置位置は、表の全体の上側とし、表の全体の左右中央にそろえるか、又はキャプションの先頭文字を表の全体の左端からの指定された位置に配置する。表の全体が縦書きのキャプションの配置位置は、表の全体の右側とし、キャプションの先頭文字を表の全体の上端からの指定された位置に配置する。
 - 2) 表の全体が横書きの場合の注記は、表の全体の下側に配置し、表の全体が縦書きの場合の注記は、表の全体の左側に配置する。
 - 3) 表の全体が横書きの場合のキャプション及び注記の指定行長は、表の全体の左右サイズよりは短く、表の全体が縦書きの場合のキャプション及び注記の指定行長は、表の全体の上下サイズより短くする。
 - 4) 表の全体とキャプションとの間の空き量の既定値は、キャプションに使用する文字サイズの二分四分アキとする。
 - 5) 表の全体と注記との間の空き量の規定値は、こま内容に使用する文字サイズの二分アキとする。
- c) キャプション及び注記の文字サイズ、書体、段落整形等
- 1) キャプション
 - 1.1) キャプションの文字サイズは、こま内容の文字サイズと同一とすることが望ましい。
 - 1.2) 横書きとするキャプションの表番号のラベル名及び番号の既定値は、次による。

図 48

- 1.2.1) 表番号のラベル名は、“表”とし、書体は角ゴシック体とする。
- 1.2.2) 表番号の番号は、アラビア数字表記による大見出しの番号及び表の番号とし、大見出しの番号と表の番号との字間に、**表=**に規定する中点をベタ組で配置する。
なお、アラビア数字の書体は、サンセリフ系の書体とする。
- 1.2.3) 表番号のラベル名と番号との字間の空き量は、キャプションの文字サイズの四分アキとする。

- 1.3) 表番号がある場合の表番号とキャプション文字列との字間の空き量は、キャプションの文字サイズの全角アキとする。
- 1.4) キャプションを2行以上にする場合の処理は、次による。
 - 1.4.1) 行間は、キャプションに使用する文字サイズの二分アキ以下四分アキ以上とする。
 - 1.4.2) 2行目以降の行頭位置の既定値は、表番号がある場合は、1行目の表番号の後端にそろえ、表番号がない場合は、1行目の行頭より2行目以降の行頭を下げ、その下げる空き量はキャプションに使用する文字サイズの全角アキとする。

2) 注記

- 2.1) 注記の文字サイズは、キャプションと同じか又は1段階小さくすることが望ましい。
- 2.2) 横書きとする注記番号の番号とくくり符号の既定値は、次による。
 - 2.2.1) 注記番号の番号は、アラビア数字表記とし、その後に表=で規定する“)”を付ける。
 - 2.2.2) 番号と“)”との字間は、ベタ組とする。
- 2.3) 注記番号と注記文字列との間の空き量の既定値は、注記の文字サイズの全角アキとする。
- 2.4) 注記を2行以上にする場合の処理は、次による。
 - 2.4.1) 行間は、注記に使用する文字サイズの二分アキ以下四分アキ以上とする。
 - 2.4.2) 注記の2行目以下の行頭位置の既定値は、1行目の行頭より2行目以降の行頭を下げ、その下げる空き量はキャプションに使用する文字サイズの全角アキとする。

d) 注記に対応する合印をキャプション及び/又はこま内容に付ける場合の合印の処理は、9.6.2による。

9.8.7 表のブロックのページ内での配置 表のブロックのページ内での配置は、絶対位置指定による配置、相対位置指定による配置及び連続位置指定による配置とする。

a) 絶対位置指定による表のブロックの配置

- 1) 絶対位置指定による表のブロックは、ページ内のどこに指定が出現しても、指定が出現した版面又は指定が出現した見開きをユニットとする領域からの絶対的な位置に表のブロックを配置する。
- 2) 絶対位置指定における表の全体の組方向は、基本版面の組方向と異なる組方向としてもよい。
- 3) 版面を基準とする絶対位置指定による表のブロックの配置は、9.7.3 a) 2) の規定による。
- 4) 見開きをユニットとする領域を基準とする絶対位置指定による表のブロックの配置は、9.7.3 a) 3) の規定による。

なお、表のブロックは、見開きをユニットとする領域を基準とする場合に限り、指定位置で分割してもよい。分割の処理は次による。

- 4.1) 横書きの表の全体を左右に分割する場合又は縦書きの表の全体を上下に分割する場合において、表の全体の分割指定位置は、表の列を単位とし、こまの途中を分割位置に指定してはならない。また、表のヘッダ列とそれに連続する通常の表の列との間を分割位置に指定してはならない。
- 4.2) 横書きの表の全体を上下に分割する場合又は縦書きの表の全体を左右に分割する場合において、表の全体の分割指定位置は、表の行を単位とし、こまの途中を分割位置に指定しない。また、キャプションの先頭から、最初の通常の表の行との間を分割位置に指定してはならない。
- 4.3) 分割位置の可視とするけい線の配置方法の既定値は、次による。
 - 4.3.1) 表の列を単位とする分割の場合
 - 4.3.1.1) 表の全体の字詰め方向の外枠を可視とする場合は、表の原点を含むページ側の分割位置のけい線は不可視とし、表の原点を含まないページ側の分割位置のけい線は可視とする。
 - 4.3.1.2) 表の全体の字詰め方向の外枠を不可視とする場合は、表の原点を含むページ側の分割位置のけい線は可視とする。

い線は可視とし、表の原点を含まないページ側の分割位置のけい線は不可視とする。

- 4.3.2)** 表の行を単位とする分割の場合は、表の原点を含むページ側の分割位置のけい線は不可視とし、表の原点を含まないページ側の分割位置のけい線は可視とする。
- 4.4)** 分割する表のブロックのそれぞれのページにおける配置位置の既定値は、次による。
- 4.4.1)** 右とじ又は左とじにおいて、左ページの版面の左端から表のブロックの左端までの距離について指定されている場合は、この指定位置に分割する表のブロックの左側を配置し、右側の表のブロックは、その左端を右ページの版面の左端に接して配置する。
- 4.4.2)** 右とじ又は左とじにおいて、右ページの版面の右端から表のブロックの右端までの距離について指定されている場合は、この指定位置に分割する表のブロックの右側を配置し、左側の表のブロックは、その右端を左ページの版面の右端に接して配置する。
- 5)** 表のブロックに対する本文文字列の回り込み処理は、**9.7.3 a) 4)** の規定による。
- 6)** 回り込みを行わない表のブロックを配置する場合、又は複数の段にまたがって表のブロックを配置する場合の本文文字列は、表のブロックを飛び越して流れるように配置する。
- 7)** 回り込みを行わない場合の表のブロックとその前及び後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は、**9.7.3 a) 6)** の規定による。

b) 相対位置指定による表のブロックの配置

- 1)** 相対位置指定による表のブロックは、本文段落などの流れとともに出現した指定の場所に追従して配置し、その配置位置の基準は、**9.7.3 b) 1.1), 1.2)** の規定による。
- 2)** 相対位置指定における行送り方向の表のブロックのサイズは、行送り方向の版面寸法を超えてはならない。また、字詰め方向の表のブロックのサイズは、字詰め方向の組版対象領域を超えてはならず、また、字詰め方向の組版対象領域をはみ出して配置してはならない。

なお、相対位置指定による表のブロックは、分割してはならない。

- 3)** 相対位置指定における表の全体の組方向は、基本版面の組方向と異なる組方向としてもよい。
- 4)** 表のブロックに対する本文文字列の回り込み処理は、**9.7.3 a) 4)** の規定による。
- 5)** 表のブロックとその前及び後に配置する行との間の行送り方向の最小の空き量は、**9.7.3 b) 4)** の規定による。
- 6)** **1) ~5)** により配置した結果、表のブロックが行送り方向の組版対象領域からはみ出した場合の処理は、**9.7.3 b) 5)** の規定による。
- 7)** **1) ~4)** により配置した結果、表のブロックの前又は後に本文文字列が 1 行だけ配置された場合の処理は、**9.7.3 b) 6)** の規定による

c) 連続位置指定による表のブロックの配置

- 1)** 連続位置指定による配置は、**b) 1), 2)** 及び **5)** により配置した結果、表のブロックが行送り方向の組版対象領域に収まる場合は、そのまま配置し、組版対象領域を超えた場合は、表のブロックを分割して配置する。
- 2)** 連続位置指定における表の全体の組方向は、基本版面と同一の組方向としなければならない。
- 3)** 表のブロックに対する本文文字列の回り込みは、してはならない。
- 4)** **b) 1), 2)** 及び **5)** により配置した結果、表のブロックが行送り方向の組版対象領域をはみ出した場合は、領域の末尾に一番近い表の行の境界で分割する。また、すでに配置してあるブロック類又はその周囲の最小の空き量と重なった場合は、重なった部分に一番近い表の行の境界で分割する。分割処理は、次による。

- 4.1) キャプションの先頭から、最初の通常の表の行との間では、分割してはならない。
- 4.2) 分割する表のブロックの前側のブロックの配置は、次による。
- 4.2.1) 前側のブロックを組版対象領域の先頭より配置する場合は、基本版面の組方向が横書きのときは、分割する表のブロックの上端を組版対象領域の先頭に接して配置し、基本版面の組方向が縦書きのときは、分割する表のブロックの右端を組版対象領域の先頭に接して配置する。
- 4.2.2) 本文文字列の後に続けて前側のブロックを配置する場合は、基本版面の組方向が横書きのときは、分割する表のブロックの下端を組版対象領域の末尾に接して配置し、基本版面の組方向が縦書きのときは、分割する表のブロックの左端を組版対象領域の末尾に接して配置する。
- 4.2.3) すでに配置してあるブロック類又はその周囲の最小の空き量と重なったことにより分割する場合は、基本版面の組方向が横書きのときは、分割する表のブロックの下端と、すでに配置してあるブロック類との間にそのブロック類の周囲の最小の空き量を確保して配置し、基本版面の組方向が縦書きのときは、分割する表のブロックの左端とすでに配置してあるブロック類との間にそのブロック類の周囲の最小の空き量を確保して配置する。
- 4.2.4) 4.2.1) ~4.2.3) の場合の版面の調整方法は、9.11 による。
- 4.3) 分割する表のブロックの後側のブロックは、次に続く組版対象領域に次のように配置する。
なお、表のブロックの後側に配置する本文文字列の配置方法は、9.7.3 b) 4.2) による。
- 4.3.1) 基本版面の組方向が横書きの場合は、分割する表のブロックの上端を組版対象領域の先頭に接して配置し、基本版面の組方向が縦書きの場合は、分割する表のブロックの右端を組版対象領域の先頭に接して配置する。
- 4.3.2) ヘッダー行の指定がある場合は、分割する表のブロックの後側の先頭にヘッダー行と同一内容を付加して配置する。ただし、右とじで1段組の縦書きの場合は、偶数ページに限りヘッダー行を配置する。
- 4.3.3) 次に続く組版対象領域にすでにブロック類が配置されている場合は、基本版面の組方向が横書きのときは、分割する表のブロックの上端とすでに配置してあるブロック類との間に、そのブロック類の周囲の最小の空き量を確保して配置し、基本版面の組方向が縦書きのときは、分割する表のブロックの右端とすでに配置してあるブロック類との間に、そのブロック類の周囲の最小の空き量を確保して配置する。
- 4.3.4) 4.2.1) ~4.3.3) の場合における版面の調整方法は、9.11 による。
- 4.4) 分割位置の可視とするけい線の配置方法の既定値は、a) 4.3.2) による。
- 4.5) 組版対象領域の領域内で分割できる位置がない場合は、基本版面の組方向が横書きの場合は、表のブロックの上端を次の組版対象領域の先頭に接して配置し、基本版面の組方向が縦書きの場合は、表のブロックの右端を次の組版対象領域の先頭に接して配置する。
- d) 各配置方法の配置の優先順位 各配置方法の配置の優先順位は、9.7.3 c) の規定による。

9.9 漢文の処理

9.9.1 漢文の組方向 漢文の組方向は、縦書きとする。

参考 横書きに漢文が引用等で挿入される場合がある。しかし、これらの引用はもっぱら学術的なものであるため、訓点を施さない白文を引用し、必要なら白文を日本語に読み直した読み下し文をつければよいので、この規格では、縦書きの漢文の処理についてのみ規定する。

9.9.2 漢文につける訓点等 漢文につける訓点、圏点及び傍線をつけることができ、訓点は、次による。

- a) 句点“。”、読点“、”及び中点“・”。

- b) 始め括弧“〔, 『, (等”及び終わり括弧“〕, 』,)等”。
- c) 返り点。
 - 1) レ点“レ”
 - 2) 一二点“一, 二及び三等”
 - 3) 上下点“上, 中及び下”
 - 4) 甲乙丙点“甲, 乙, 丙及び丁等”
 - 5) 天地人点“天, 地及び人”
- d) 送り仮名。
- e) 読み仮名。
- f) たて点。

備考 圏点及び傍線は、送り仮名及び読み仮名と同一の漢文親文字の左又は右の同じ位置に重ねて配置してはならない。また、圏点は傍線と同一の漢文親文字の左又は右の同じ位置に重ねて配置してはならない。

参考 レ点は、下の1字からすぐ上の1字に転読する場合に用い、2字以上隔てて転読する場合には一二点を用いる。レ点と一二点だけでは転読が示されない場合には、上下点を用いる。上下点は、必ず一二点をまたいで転読する場合に用いる。これらで転読が示されない場合には、甲乙丙点や、さらに天地人点を用いる。

なお、古典などの復刻等では、段落を示すための段落符号が用いられる場合がある。しかし、段落は改行等の方法で示すことができるので、この規格では段落符号については規定しない。

【以下では、実例を入れるようにする。】

9.9.3 漢文親文字の字間の処理 漢文親文字（以下9.9項では親文字という）はベタ組又は親文字の字間を二分空けた二分アキ組とする。処理系定義により、親文字の字間をベタ組又は二分アキ組以外の字間にしてもよい。

- a) **ベタ組にした場合の句点、読点、中点及び括弧の処理及び行の調整処理** ベタ組にした場合の句点、読点、中点及び括弧の処理及び行の調整処理は、7項の各箇条による。
- b) **二分アキ組にした場合の句点、読点、中点及び括弧の処理及び行の調整処理** 二分アキ組にした場合の句点、読点、中点及び括弧の処理及び行の調整処理は、次による。処理系定義により、これ以外の処理方法にしてもよい。
 - 1) 句点、読点、中点及び括弧の字幅は、半角とし、それらの前後はベタ組とする。
 - 2) 始め括弧は行末にきてはならない。
 - 3) 句点、読点、中点及び終わり括弧は行頭にきてはならない。
 - 4) 2), 3), 始め括弧が行頭にきた場合及び句読点と括弧が重なった場合の調整処理は、処理系定義による。

9.9.4 返り点、送り仮名及び読み仮名の文字サイズ 返り点、送り仮名及び読み仮名の文字サイズは、漢文親文字の文字サイズの1/2とする。処理系定義により、返り点、送り仮名及び読み仮名は、漢文親文字の文字サイズの1/2以下としてもよい。

参考 親文字に12ポイント以上の大きな文字サイズを用い、字間を四分アキなどにして、返り点、送り仮名及び読み仮名の文字サイズを親文字の文字サイズの1/2以下とする組方も行われている。しかし、これらの組方では、字間を固定する方法や、返り点、送り仮名及び読み仮名の文字サイズも適宜決めるなど、組方も種々工夫して行われている。そこで、この規定では、返り点、

送り仮名及び読み仮名の文字サイズを親文字の文字サイズの 1/2 とした場合の処理についてのみ規定する。

9.9.5 送り仮名の配置位置 送り仮名の配置位置は、次による。

- a) 送り仮名は、親文字の直後に左寄せにし、親文字と送り仮名の左端をそろえて配置し、親文字との字間はベタ組とする。送り仮名及び／又は読み仮名がついて親文字の字間が二分以上空いた場合は、送り仮名と次にくる親文字の字間を空けて配置する。

なお、2 字の熟語に送り仮名をつける場合は、2 字の中間に左寄せにして送り仮名を配置する。3 字の熟語に送り仮名をつける場合は、1 字目と 2 字目の中間に左寄せにして送り仮名を配置する。この場合は、熟語の字間にたて点をつけるのがよい。

- b) 一二点の“一”，上下点の“上”などとレ点と同じ位置にきた場合は、【2 つの送り仮名を組み合わせ、天地・左右を】親文字の文字サイズの 1/2 にする。この場合の処理は 1) 項による。

例

参考 レ点との組み合わせが考えられる送り仮名は，“一”，“上”，“甲”，“天”の四種類であるが，“甲”，“天”と組み合わせた例はほとんどみかけない。

- c) 親文字の後に送り仮名及び句点がきた場合は、送り仮名及び句点はそれぞれ親文字とベタ組にする。親文字の後に送り仮名及び読点がきた場合も同様とする。

参考 句読点とが同じ位置に並ぶ送り仮名の例としては，“一”，“上”，“甲”，“天”の四種類である。

- d) 送り仮名は、行頭にきてはならない。

備考 処理系定義として、レ点を以下のように配置してもよい。

- 5) レ点を親文字の直後に左寄せにし、親文字とレ点の左端をそろえて配置し、親文字との字間はベタ組とする。ただし、送り仮名及び／又は読み仮名がついて親文字の字間が二分以上空いた場合は、6.5 項 2) の場合を除き親文字とレ点の字間を空け、レ点の次にくる親文字との字間をベタ組とする。
- 6) レ点は、行末にきてはならない。ただし、レ点と一二点の“一”，上下点の“上”などと組み合わせた場合は、行末に配置し、行頭に配置してはならない。

9.9.6 送り仮名及び読み仮名の処理

9.9.6.1 送り仮名及び読み仮名の配置方向 送り仮名及び読み仮名は、親文字の右側に配置する。ただし、再読文字の二度目の読みを示す送り仮名及び読み仮名は左側に配置する。

9.9.6.2 送り仮名の処理 送り仮名の処理は、次による。

- a) 送り仮名はベタ組とする。
- b) 読み仮名がつかない場合の送り仮名の開始位置は、親文字の上端から親文字サイズの 1/2 の位置に送り仮名の先頭をそろえて配置する。ただし、処理系定義として、親文字の上端から親文字サイズの 3/4 の位置に送り仮名の先頭をそろえて配置してもよい。

また、親文字を二分アキ組とした場合は、処理系定義として、送り仮名が 1 字のときは親文字の下端に送り仮名の先頭をそろえ、送り仮名が 2 字以上のときは親文字の上端から親文字サイズの 1/2 の位置に送り仮名の先頭をそろえて配置してもよい。

- c) 読み仮名がついた場合は、読み仮名の直後にベタ組にして送り仮名を配置する。

9.9.6.3 読み仮名の処理 読み仮名の処理は、7.9 による。

9.9.6.4 送り仮名及び／又は読み仮名の字数が多い場合の処理 送り仮名及び／又は読み仮名の字数が多い場合の処理は、次による。

- a) 送り仮名及び／又は読み仮名の字数が多くなり、親文字よりはみ出した場合は、次にくる親文字に送

り仮名及び／又は読み仮名はかかってはならない。

ただし、親文字の上端から 3/4 の位置に送り仮名の先頭をそろえた場合は、処理系定義により、送り仮名は次にくる親文字に送り仮名の文字サイズの 1/2 をかけて配置してもよい。

- b) 親文字の後ろの文字が返り点、句点、読点、空き、和字間隔又はたて点のいずれかの場合、送り仮名は、返り点、句点、読点、空き、和字間隔又はたて点にかけて配置する。

親文字の後ろの文字が中点又は終わり括弧の場合、送り仮名は、送り仮名の文字サイズまで中点又は終わり括弧にかけて配置する。ただし、読み仮名は、後の始め括弧にかかってはならない。

図 49

- d) 読み仮名は、前の親文字につく返り点に読み仮名の文字サイズまでかかってもよい。
- e) a), b) 及び c) 項の調整処理は、親文字をベタ組にした場合は、親文字の前後及び返り点の後を空ける。親文字を二分アキ組にした場合は、処理系定義による。

備考 前の親文字及び後の親文字につく送り仮名及び／又は読み仮名の字間は、ベタ組になってよい。

ただし、前の親文字及び後の親文字がその順序で読めない場合は、処理系定義により、前の親文字につく送り仮名及び／又は読み仮名と後の親文字につく読み仮名との間を送り仮名の文字サイズの 1/2 空けてもよい。

9.9.7 たて点の処理 たて点の処理は、次による。

- a) たて点は、親文字の字間に天地中央及び左右中央の位置に二分の長さの細線を配置する。ただし、これ以外の配置法とすることは、処理系定義とする。
- b) 返り点とたて点が重なった場合は、返り点を **6.5** 項に従って配置し、その横に **1)** 項に従ってたて点を配置する。

参考 たて点と返り点との組み合わせが考えられる例は、一二点の“二”以下、上下点の“中”及び“下”，甲乙丙点の“乙”以下，天地人点の“地”及び“人”である。

- c) たて点は、行頭にきてはならない。

9.9.8 圏点及び傍線の処理 圏点の処理は **7.11**，傍線の処理は **7.12** による。ただし、傍線の長さは、親文字に読み仮名、送り仮名及び／又は返り点がついた場合でも、親文字の文字列の長さにそろえる。

9.10 行送り方向の組版対象領域の領域調整処理 行送り方向の組版対象領域の領域調整処理は、次による。

- a) 組版対象領域の末尾に配置する行は、組版対象領域の行送り方向の末尾に接して配置することを原則とする。また、相対配置のブロック類及び連続配置の表のブロックは、規定されていない限り、組版対象領域の行送り方向の末尾に接して配置することを原則とする。
- b) 次の場合において、組版対象領域の末尾に配置する行、相対配置のブロック類及び表のブロックの後ろと組版対象領域の末尾との間に空きがでたときは、それらの後を空けておく。

- 1) **9.2.1 a) 5)** の規定により 1 行追い出した場合
- 2) **9.2.2 c)** の規定により 1 行追い出した場合
- 3) **9.4.5** の規定により別行見出しを追い出した場合
- 4) **9.4.7** 規定により窓見出しを追い出した場合
- 5) **9.7.3 b) 6.3)** の規定により 1 行追い出した場合
- 6) **9.8.7 c) 4.2.1)** の規定により分割する表の前側を組版対象領域の先頭より配置する場合
- 7) **9.8.7 c) 4.5)** の規定により表のブロックを追い出した場合

- c) 組版対象領域の末尾に配置する行，相対配置のブロック類及び表のブロックを行送り方向の末尾に接して配置するために空き量に不足が出た場合は，**1)** に掲げた部分を均等に空け，**1)** に掲げた事項がない場合は **2)** に掲げた部分を均等に空ける。**1)** 及び **2)** ともない場合は，組版対象領域の末尾を空けておく。

1) 優先的に空ける調整箇所

1.1) 後注の後と本文文字列との間

1.2) 傍注の区切りけいと本文文字列との間

1.3) 後注の区切りけいと本文文字列との間

1.4) 回り込みをしない絶対配置の表のブロック及び図・写真等のブロックと本文文字列との間。ただし，相対配置において，これらのブロックとその前及び後に配置される行との空きを **9.7.3 b) 4.2.2)** による場合は除く。

1.5) 絶対配置の表のブロック及び図・写真等のブロックと本文文字列との間。ただし，絶対配置において，これらのブロックとその前及び後に配置される行との空きを **9.7.3 a) 6)** において，版面寸法の指示で指定した最も近い行の位置に配置する場合は除く。

1.6) 基本版面の文字サイズより小さくした段落の後と基本版面の文字サイズの段落との間

2) 1) の調整箇所がない場合の調整箇所

2.1) 本文文字列と後注の前との間

2.2) 基本版面の文字サイズの段落と基本版面の文字サイズより小さくした段落後との間

10. 適合性

10.1 処理系 この規格に適合する処理系は，**10.2～10.4** のそれぞれについて，適合している内容を文書で明記しなければならない。

10.2 機能追加項目 この規格に適合する処理系は，次の機能のいずれを追加しているか文書として明記しなければならない。

10.2.1 行組版関連機能追加項目 行組版関連の機能追加項目は，次による。

d) 縦中横処理 **7.8** で規定する縦中横処理及び関連規定項目。

e) ルビ処理 **7.9** で規定するルビ処理及び関連規定項目。

f) 圏点処理 **7.11** で規定する圏点処理及び関連規定項目。

g) 下線・傍線・抹消線処理 **7.12** で規定する文字若しくは親文字群の上（縦書きでは左）か，又は文字若しくは親文字群の中に指定の線を引く下線・傍線・抹消線処理及び関連項目。

h) 割注処理 **7.13** で規定する割注処理及び関連規定項目。

i) タブ処理 **7.16** で規定するタブ処理及び関連規定項目。

j) 囲み文字処理 **7.17** で規定する囲み文字処理及び関連規定項目。

k) 結合文字処理 **7.18** で規定する結合文字処理及び関連規定項目。

l) 具体字形処理 **7.19** で規定する具体字形処理及び関連規定項目。

10.2.2 版面組版関連機能追加項目 版面組版関連の機能追加項目は，次による。

m) 改ページ・改段の処理 **9.2** で規定する改ページ・改段の処理及び関連規定項目。

n) 中扉処理 **9.3** で規定する中扉処理及び関連規定項目。

o) 見出し処理 **9.4** で規定する見出し処理及び関連規定項目。

p) 箇条書き処理 **9.5** で規定する箇条書き処理及び関連規定項目。

q) 注の処理 **9.6** で規定する注の処理及び関連規定項目。

r) 図・写真等の処理 9.7 で規定する図・写真等の処理及び関連規定項目。

s) 表処理 9.8 で規定する表処理及び関連規定項目。

10.2.3 ページ組版関連機能追加項目 ページ組版関連の機能追加項目は、次による。

t) ページの構成及び版面の寸法 4. で規定するページの構成及び版面の寸法並びに関連規定項目。

u) とじの方向 5. で規定するとじの方向及び関連規定項目。

v) ノンブル及び柱の処理 6. で規定するノンブル及び柱の処理並びに関連規定項目。

10.2.4 漢文の処理関連機能追加項目 漢文の処理関連機能追加項目は、9.9 で規定する漢文の処理及び関連規定項目。

10.3 処理系定義項目 処理系定義としている各項目について、それぞれの処理内容を文書として明記しなければならない。

参考 処理系定義項目の一覧を、**附属書 =** (参考3) に示す。

附属書 = 仕上がり用紙サイズ別の基本版面の指定例, 並びに仕上がり用紙
サイズ別のノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズの指定例

番号	用紙サイズ			組方向と段数			文字サイズ・字詰等			
	判型	横 mm	縦 mm	方向	段数	段間	文字 ポ	字詰	行数	行間 ポ
T-1	A6	105	148	縦	1		8	42	16	6
T-2	新書判	105	173	縦	1		9	42	15	6
T-3	B6	128	182	縦	1		9	43	16	8
T-4	四六	130	188	縦	1		9	44	16	8
T-5	A5	148	210	縦	1		9	51	18	8
T-6	A5	148	210	縦	2	18	9	25	21	6
T-7	B5	182	257	縦	2	18	9	32	25	7
T-8	B5	182	257	縦	3	20	8	23	29	6
T-9	A4	210	297	縦	2	27	9	36	29	7
T-10	A4	210	297	縦	3	24	8	26	35	5
Y-1	B6	128	182	横	1		8	34	27	7
Y-2	A5	148	210	横	1		9	35	28	8
Y-3	B5	182	257	横	1		10	38	30	9
Y-4	B5	182	257	横	2	18	9	21	40	6
Y-5	B5	182	257	横	3	16	8	15	47	4.5
Y-6	A4	210	297	横	2	18	9	25	46	6
Y-7	A4	210	297	横	3	16	8	18	53	5

90

X 4051 : 0000

附属書 = ノンブル及び柱の配置位置及び文字サイズ例

番号	柱					ノンブル				刷り位置	
	柱	柱位置	柱大	下ガリ	アキ	ノンブル	ノン大	下ガリ	アキ	天地	左右
			ポ	ポ	ポ		ポ	ポ	ポ	mm	
T-1	片柱	天小口	7	14	8	天小口	7	0	8	中央	中央
T-2	片柱	天小口	7	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-3	片柱	天小口	7	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-4	片柱	天小口	7	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-5	片柱	天小口	8	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-6	片柱	天小口	8	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-7	片柱	天小口	8	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-8	片柱	天小口	7	8	8	地小口	8	9	9	中央	中央
T-9	片柱	天小口	8	9	9	地小口	8	9	9	中央	中央
T-10	片柱	天小口	7	8	8	地小口	8	9	9	中央	中央
Y-1	両柱	天中央	7		9	天小口	7	0	9	中央	中央
Y-2	両柱	天中央	8		10	天小口	8	0	10	23	中央
Y-3	両柱	天中央	8		12	天小口	8	0	12	31	中央
Y-4	両柱	天中央	8		10	天小口	8	0	10	中央	中央
Y-5	両柱	天中央	7		10	天小口	7	0	10	中央	中央
Y-6	両柱	天中央	8		10	天小口	8	0	10	29	中央
Y-7	両柱	天中央	7		10	天小口	7	0	10	29	中央

付属書 = 柱の柱の字間を空ける例

柱の字数，字間の空き量，倍ドリ（倍取り，字取り）の順に示す。ただし，字数は柱文字列の字数である。

1) A5 及び B5 で，柱を小口寄せにした場合

2 字 2 倍四分 4.25 倍

3 字 全角 5 倍

4 字 二分 5.5 倍

5 字 四分 6 倍

6 字以上ベタ組

2) B6 で，柱を小口寄せにした場合

2 字 2 倍 4 倍

3 字 二分四分 4.5 倍

4 字 四分 4.75 倍

5 字以上ベタ組

3) A5 で，柱を左右中央にした場合

2 字 4 倍 6 倍

3 字 2 倍 7 倍

4 字 全角 7 倍

5 字 二分 7 倍

6 字 五分 7 倍

7 字以上ベタ組

4) B6 で，柱を左右中央にした場合

2 字 3 倍 5 倍

3 字 全角半 6 倍

4 字 三分三分 6 倍

5 字 四分 6 倍

6 字以上ベタ組

参考 小口寄せに配置した場合よりは左右中央に配置した場合の方が字間を空けて，文字列全体の長さを長くすると体裁がよい。

附属書 = 中扉及び見出しの組方例

A5, 縦書き, 1 段組, 基本版面の文字サイズ 9 ポイント, 別行見出しの大・中・小見出しの 3 本立の例

1. 中扉

- ・ 標題 (18 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 版面左右中央, 改丁, 裏面は白ページ

2. 単独に出現する見出しの場合

- ・ 大見出し (14 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 4 行中央, 改丁
- ・ 中見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 3 行中央
- ・ 小見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 8 字, 2 行中央

3. 大・中・小見出しと 3 本続く場合 (合計 8 行)

- ・ 大見出し (14 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 前 1 行空ける, 3 行中央, 改丁
- ・ 中見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 2 行中央
- ・ 小見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 8 字, 2 行中央

4. 大・中見出しと 2 本続く場合 (合計 6 行)

- ・ 大見出し (14 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 前 1 行空ける, 2 行中央, 改丁
- ・ 中見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 3 行中央

5. 大・小見出しと 2 本続く場合 (合計 6 行)

- ・ 大見出し (14 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 前 1 行空ける, 3 行中央, 改丁
- ・ 小見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 8 字, 2 行中央

6. 中・小見出しと 2 本続く場合 (合計 5 行)

- ・ 中見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 前 1 行空ける, 2 行中央
- ・ 小見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 8 字, 2 行中央

7. 中扉の直後の開始ページに見出しのない場合

- ・ 本文段落のはじめを 2 行分空ける

B6, 縦書き, 1 段組, 基本版面の文字サイズ 9 ポイント, 別行見出しの大・中・小見出しの 3 本立の例

1. 中扉

- ・ 標題 (14 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 版面左右中央, 改丁, 裏面は白ページ

2. 単独に出現する見出しの場合

- ・ 大見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 3 行ドリ中央, 改丁
- ・ 中見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 2 行ドリ中央
- ・ 小見出し (8 ポ角ゴチ) 下がり 9 ポ 1 字, 前 1 行空ける, 1 行中央

3. 大・中・小見出しと 3 本続く場合 (合計 6 行)

- ・ 大見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 前 1 行空ける, 2 行中央, 改丁
- ・ 中見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 2 行中央
- ・ 小見出し (8 ポ角ゴチ) 下がり 9 ポ 1 字, 1 行中央

4. 大・中見出しと 2 本続く場合 (合計 5 行)

- ・ 大見出し (12 ポ) 下がり 9 ポ 4 字, 前 1 行空ける, 2 行中央, 改丁
- ・ 中見出し (10 ポ) 下がり 9 ポ 6 字, 2 行中央

5. 大・小見出しと 2 本続く場合 (合計 4 行)

- ・大見出し（12 ポ） 下がり 9 ポ 4 字，3 行中央，改丁
- ・小見出し（8 ポ角ゴチ） 下がり 9 ポ 1 字，1 行中央

6. 中・小見出しと 2 本続く場合（合計 3 行）

- ・中見出し（10 ポ） 下がり 9 ポ 6 字，2 行中央
- ・小見出し（8 ポ角ゴチ） 下がり 9 ポ 1 字，1 行中央

A5，横書き，1 段組，基本版面の文字サイズ 9 ポイント，別行見出しの大・中・小見出しの 3 本立の例

1. 中扉

- ・標題（16 ポ） 版面左右中央，前 5 行空ける，2 行中央，改丁，裏面は白ページ

2. 単独に出現する見出しの場合

- ・大見出し（14 ポ） 版面左右中央，4 行中央，改丁
- ・中見出し（12 ポ） 版面左右中央，3 行中央
- ・小見出し（10 ポ） 版面左右中央，2 行中央

3. 大・中・小見出しと 3 本続く場合（合計 8 行）

- ・大見出し（14 ポ） 版面左右中央，前 1 行空ける，3 行中央，改丁
- ・中見出し（12 ポ） 版面左右中央，2 行中央
- ・小見出し（10 ポ） 版面左右中央，2 行中央

4. 大・中見出しと 2 本続く場合（合計 6 行）

- ・大見出し（14 ポ） 版面左右中央，前 1 行空ける，2 行中央，改丁
- ・中見出し（12 ポ） 版面左右中央，3 行中央

5. 大・小見出しと 2 本続く場合（合計 6 行）

- ・大見出し（14 ポ） 版面左右中央，前 1 行空ける，3 行中央，改丁
- ・小見出し（10 ポ） 版面左右中央，2 行中央

6. 中・小見出しと 2 本続く場合（合計 5 行）

- ・中見出し（12 ポ） 版面左右中央，前 1 行空ける，2 行中央
- ・小見出し（10 ポ） 版面左右中央，2 行中央

7. 中扉の直後の開始ページに見出しのない場合

- ・本文段落のはじめを 2 行分空ける

見出しの字間を空ける例

※柱の字数，字間の空き量，倍ドリ（倍取り，字取り）の順に示す。ただし，字数は見出し文字列の字数である。

1) B6 縦組（1 段），B6 横組（1 段），B5 縦組（2 段）及び B5 横組（2 段）の場合の例

字数	空き量	倍ドリ（倍取り，字取り）
2 字	2 倍	4 倍
3 字	全角	5 倍
4 字	二分	5.5 倍
5 字	四分	6 倍
6 字以上	ベタ組	

2) A5 縦組（1 段）及び A5 横組（1 段）の場合の例

字数	空き量	倍ドリ（倍取り，字取り）
2 字	2 倍半	4.5 倍

3 字	全角四分	5.5 倍
4 字	二分四分	6.25 倍
5 字	三分	6.33 倍
6 字	八分	6.625 倍
7 字以上	……ベタ組	

3) 本文の行頭より字下がりを 1 字とする見出しの場合の例

字数	空き量	倍ドリ (倍取り, 字取り)
2 字	2 倍	4 倍
3 字	二分	4 倍
4 字の	四分	4.75 倍
5 字以上	ベタ組	